（毎月二回五日、廿日發行、明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可）

明治三十五年十一月五日發兌

女鑑

第貳百六拾六號

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



!!! 新年初刊豫告 !!!

女鑑第二百六十八號は來三十六年一月一日に發行し口繪には左に記せる外十數種の人物風景等を添ふべし

赤十字社特志看護婦會

（アートタイプ菊判四倍）

小松宮及同妃殿下を始め奉り各貴顯令夫人令孃等特志看護婦會に關係ある方々の寫影なり一見勇武の氣象を喚發し報國盡忠の志を起さしむ

副島伯爵の家庭

老伯夫妻を中心として伯爵邸深樹蓊蔚の中に全家團欒の眞景を寫し和氣洋々春風堂に滿つるの思あり

又記事には

婦人教育と衞生の關係　前警察醫長 醫學士 山根正次

老人の看護に就て　東京女子高等師範學校教諭 後閑菊野女史

戰國時代の婦人　文學士 小林雨塔

女優美巴孃　萬朝報記者 河村てる子

趣味論　文學士 沼波瓊音

加賀の千代　小泉三申

等其他諸名家の寄稿せられたる有益にして興味ある論說、文章を載せ猶は

新年大附錄として左記諸大家の筆に成れる小說並に隨筆を掲ぐ

巴御前　塚原澁柿園

漁夫の妻　遲塚麗水

新年の俳句　幸田露伴

女鑑第貳百六拾六號目次





明治卅六年女鑑教の庭歌文月並兼題廣告

選者

◉歌　樞密顧問官正三位子爵　**黒田清綱先生**

◉文　華族女學校教授　**井上頼圀先生**

		歌	文
一月	一日	寄海祝	元日書感
	廿日	富嶽	松の内日記
二月	一日	野若菜	初めて鶯を聽く
	廿日	晨鷄	若菜を送る
三月	一日	柳間鶯	春日古都を過く
	廿日	春雨	音樂會の記

投稿〆切期限は總て發兌期日の十二日前、則五日分は前月の廿三、廿日分は其月八日とす

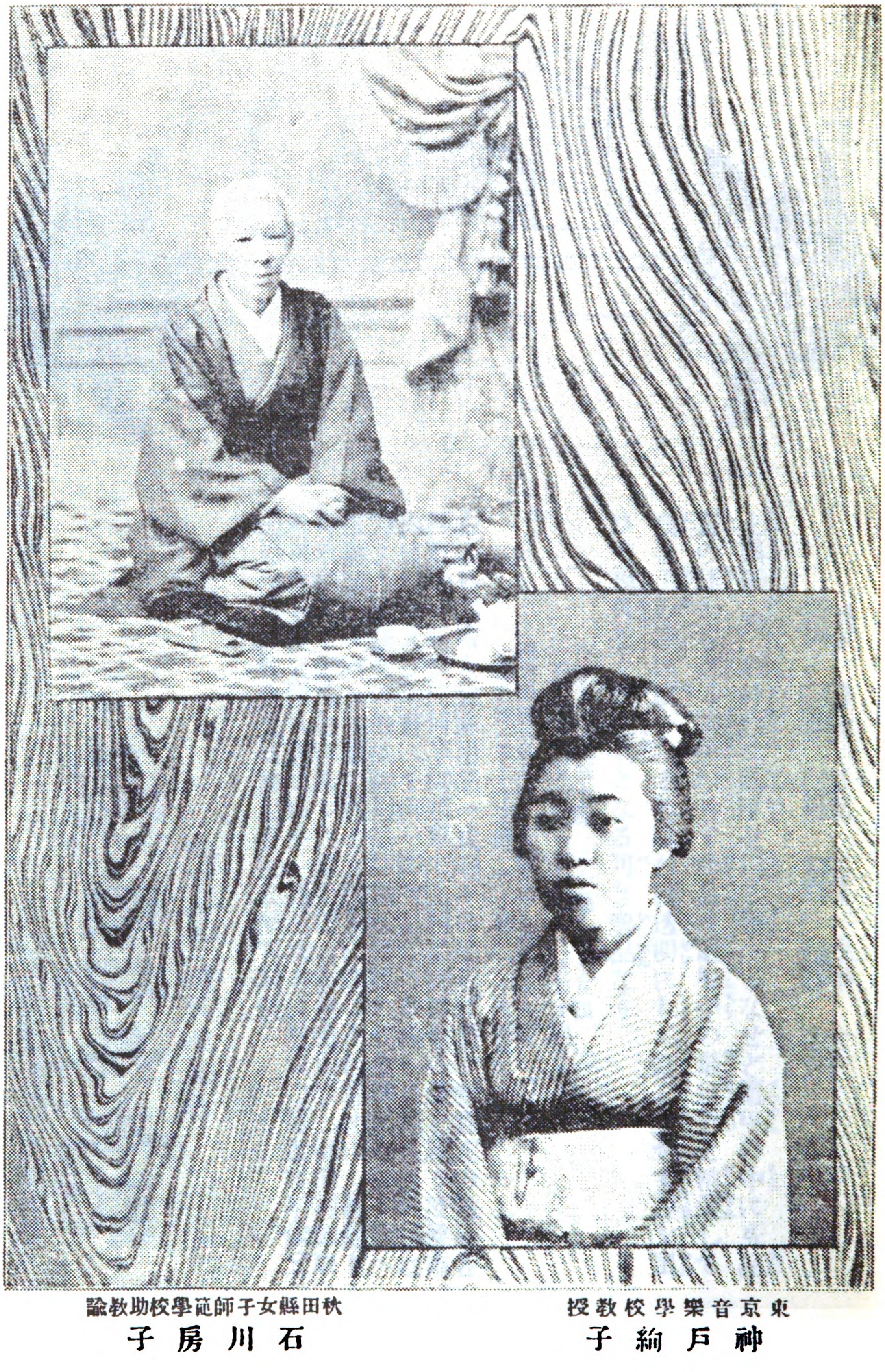
但し一月初回發兌の分に限り特に十二月十五日を以て締切期限とす

投稿心得

○兼題歌文は、女子は、何人にても隨意投稿することを得。
○投稿用紙は半紙（歌は半截文は全紙二つ折の事）。
○歌は題毎に用紙を別にし、一題には、一人一首若しくは二首を限りとす。上句の中に、二音の漢字を一字入れ、其の他は、悉く、平假名若しくは、一音の漢字にて認むべし。
○文は、毎行字數を一定し、且、句讀點を施すべし。
○右歌文とも、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて、個々に離して、分明に認め、住所姓名は、題目の下に明記すべし。
○投稿宛名は、國光社女鑑編輯局とすべし。
○總て書式に、違ひたるもの、及び、期日に後るゝものは採らず。
○投稿題文中、天地人を撰び、天には女鑑三部、地に同二部、人に同一部を贈呈す



山階宮妃殿下最近御肖影



秋田縣女子師範學校助教諭
石川房子

東京音樂學校教授
神戸絢子

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨附記被下度候

御懷中紙入



刺繡 縞珍 / 鰐革 印傳 / 蜥蜴皮 / 蒲團皮 / 生地皮其他古代製 各種

男持	女持
十三圓	八圓
十圓	六圓
八圓	五圓五十錢
七圓五十錢	五圓
六圓	四圓五十錢
五圓五十錢	四圓
五圓	三圓五十錢
四圓五十錢	三圓
四圓	二圓八十錢
三圓五十錢	二圓五十錢
三圓	二圓
二圓五十錢	一圓五十錢
二圓	一圓三十錢
一圓五十錢	一圓

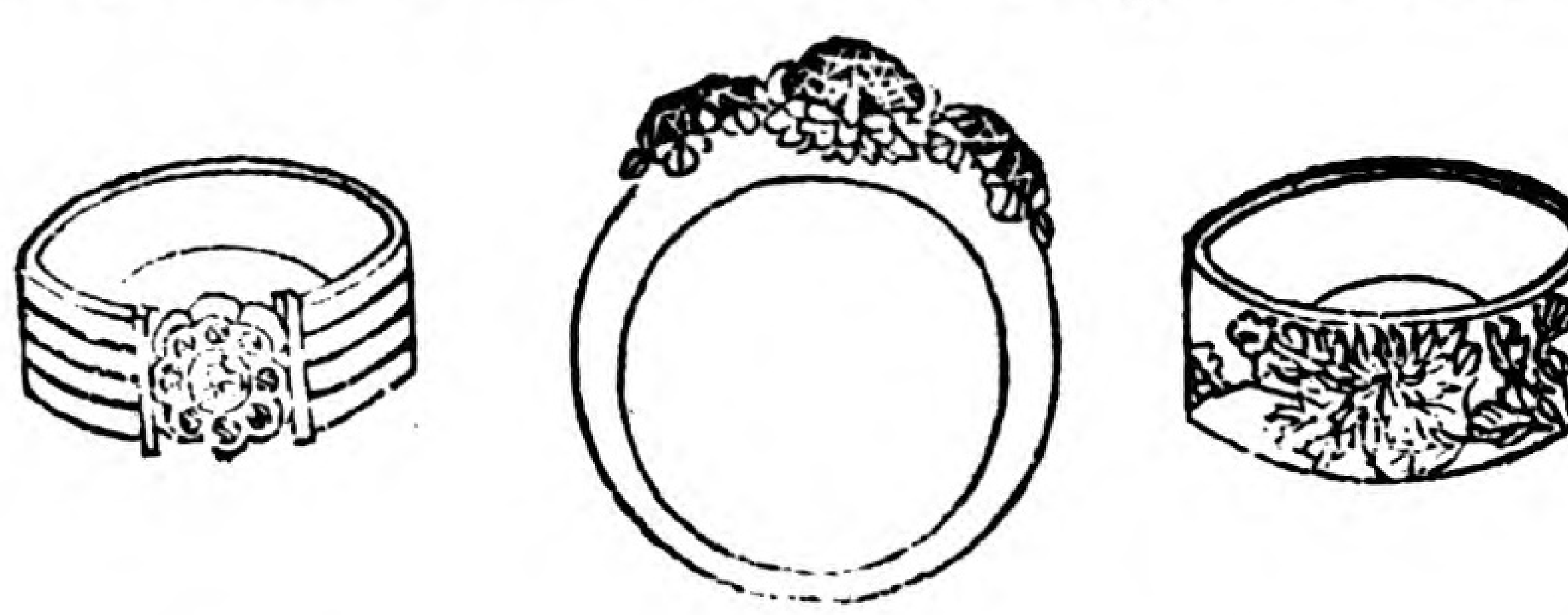
遞送料十里迄五錢百里迄八錢百里外十六錢臺灣迄廿二錢申請候

賣品目錄

煙草入、煙管、煙管筒、緒締、千代田袋、金銀製金具、婦人用帶留、[illegible]玉、銀貨入、金銀盃類、石入指環、金銀眼鏡、金製羽織紐、金銀赤銅朧銀象牙唐木パイプ等純銀製振出箸巻莨入箱背古

貴金屬指環帶留





指環

「切立蒲鉾」「無地槌目」

純金二匁附	金十二圓十錢
廿金同	金十三圓三十錢
十八金同	金九圓三十錢

同彫刻附(三匁附)

純金片切	金十四圓ゟ
同高彫	金十七圓ゟ
廿金片切	十三圓五十錢ゟ
同高彫	金十五圓ゟ
十八金片切	十二圓五十錢ゟ
同高彫	金十四圓ゟ
同ダイヤモンド入	十五圓ゟ二百圓迄
ルビー入	七圓ゟ三十圓迄
サツフイヤ入	六圓ゟ廿五圓迄
エメラルド及猫目入	十五圓ゟ三百圓迄

(注意)御注文の節は厚き紙にて指の太さを御張付被下度候

(郵券代用一割增)
遞送料實費申受候

彫刻附帶留

廿二金	三十圓より
十八金	廿二圓より
十四金	十二圓より

石入帶留

廿二金	廿五圓より百圓迄
十八金	十五圓より五十圓迄
十四金	十圓より廿五圓迄

銀製彫刻附金二圓より七圓迄 餘は御好に應じ候

一弊店從來金細工營業罷在候間金質其他の確實なるを保證す萬一相違の際有之候節は何時にても他の品御交換申上候か又は現價た御返戻致候共御需に應ずべし

爲替振込所は南傳馬町郵便局●郵券代用一割增

美術 貴金屬細工 袋物商

東京市京橋區南傳馬町三丁目十六番地

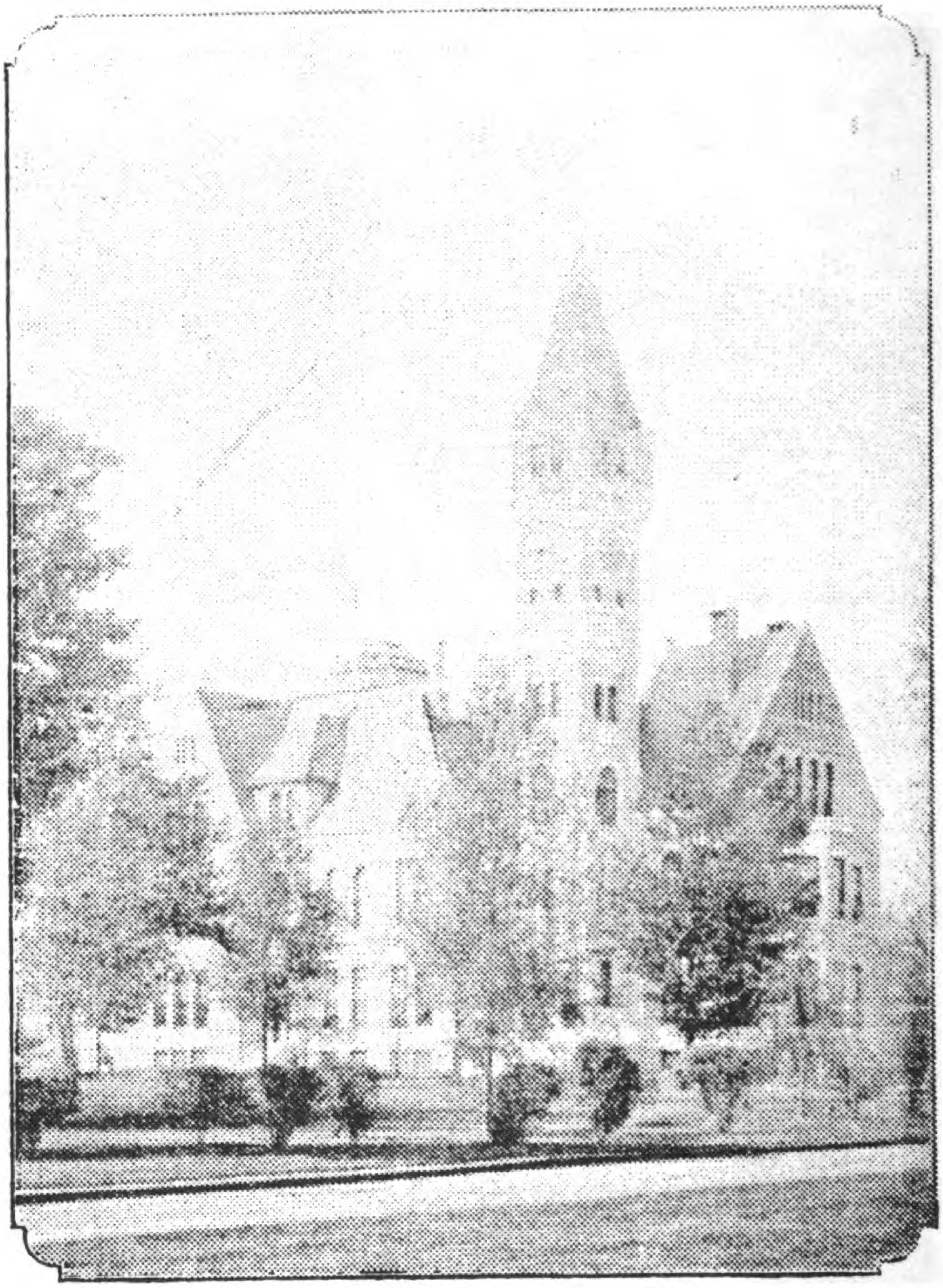
丸屋商店

金子直吉

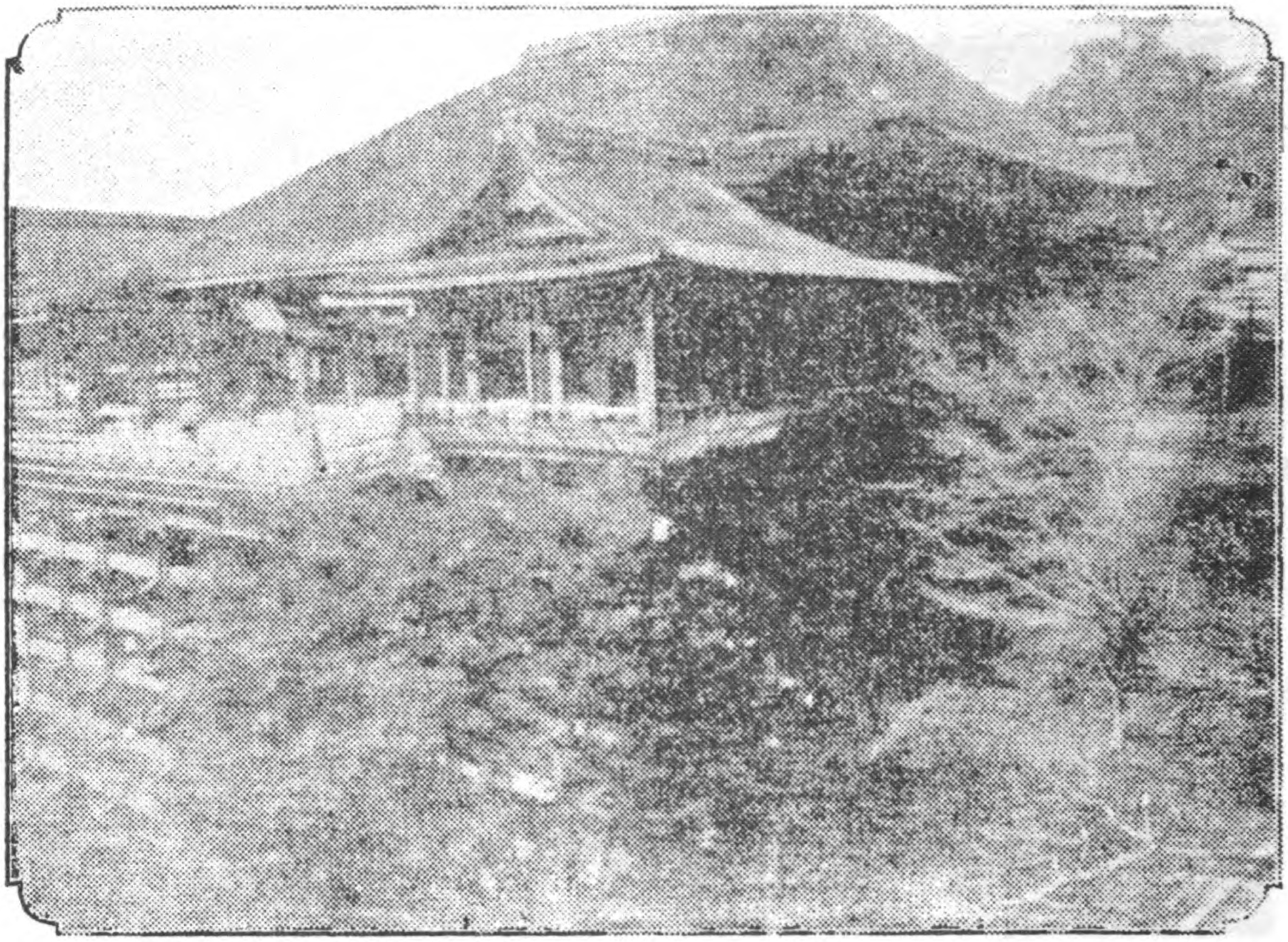
(電話本局二十番)

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

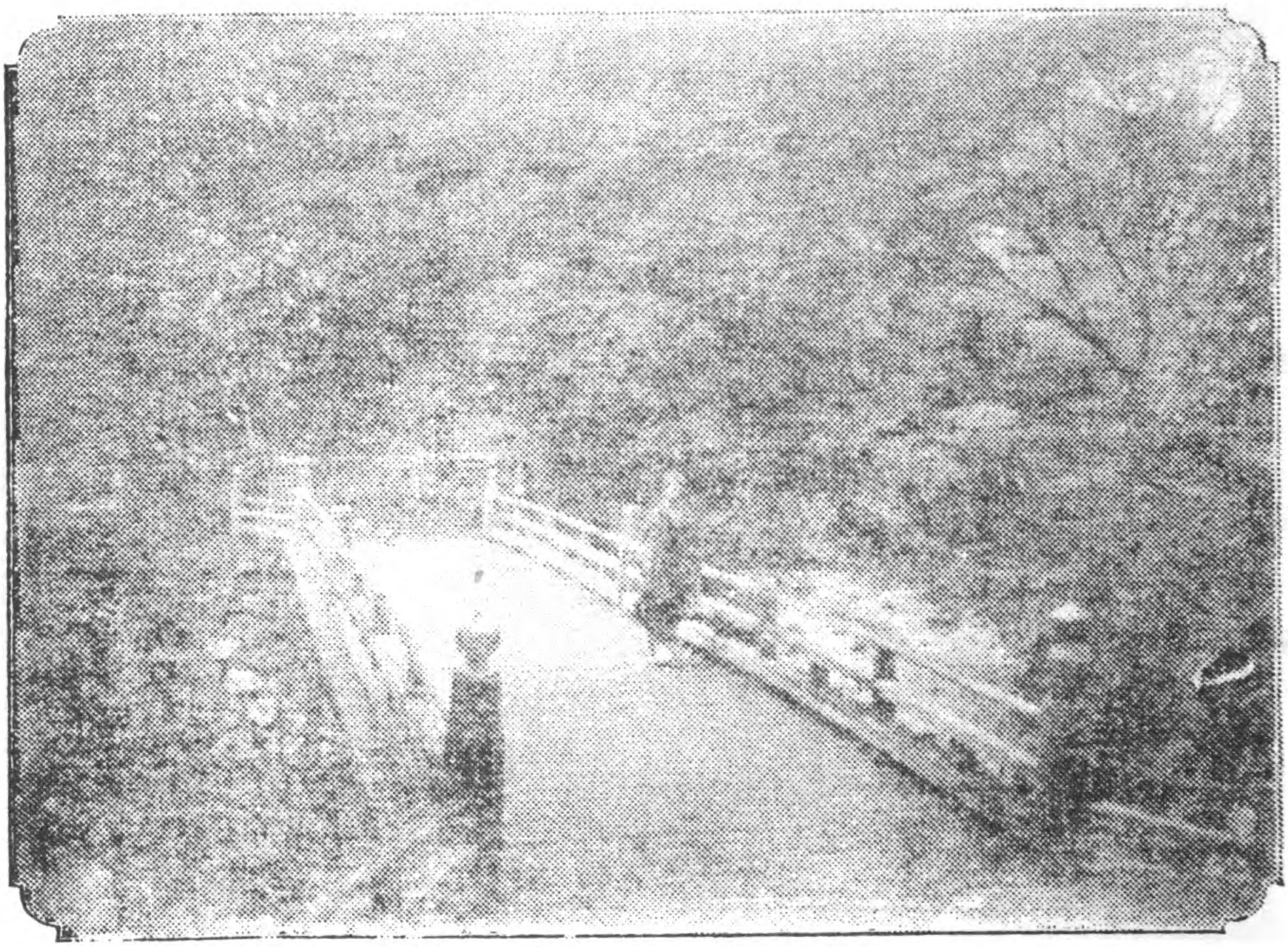




米國ブリンナー女子大學校

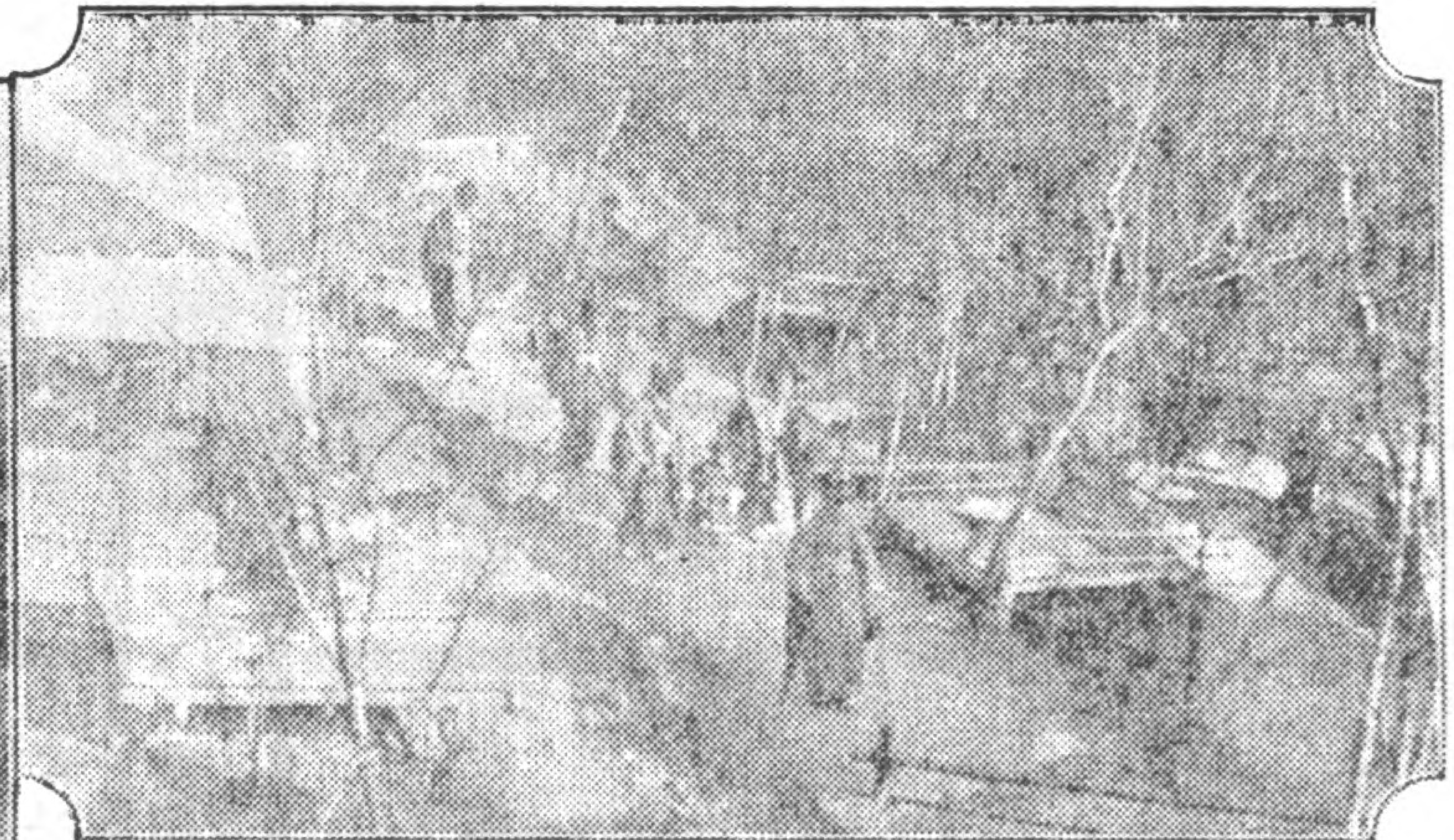


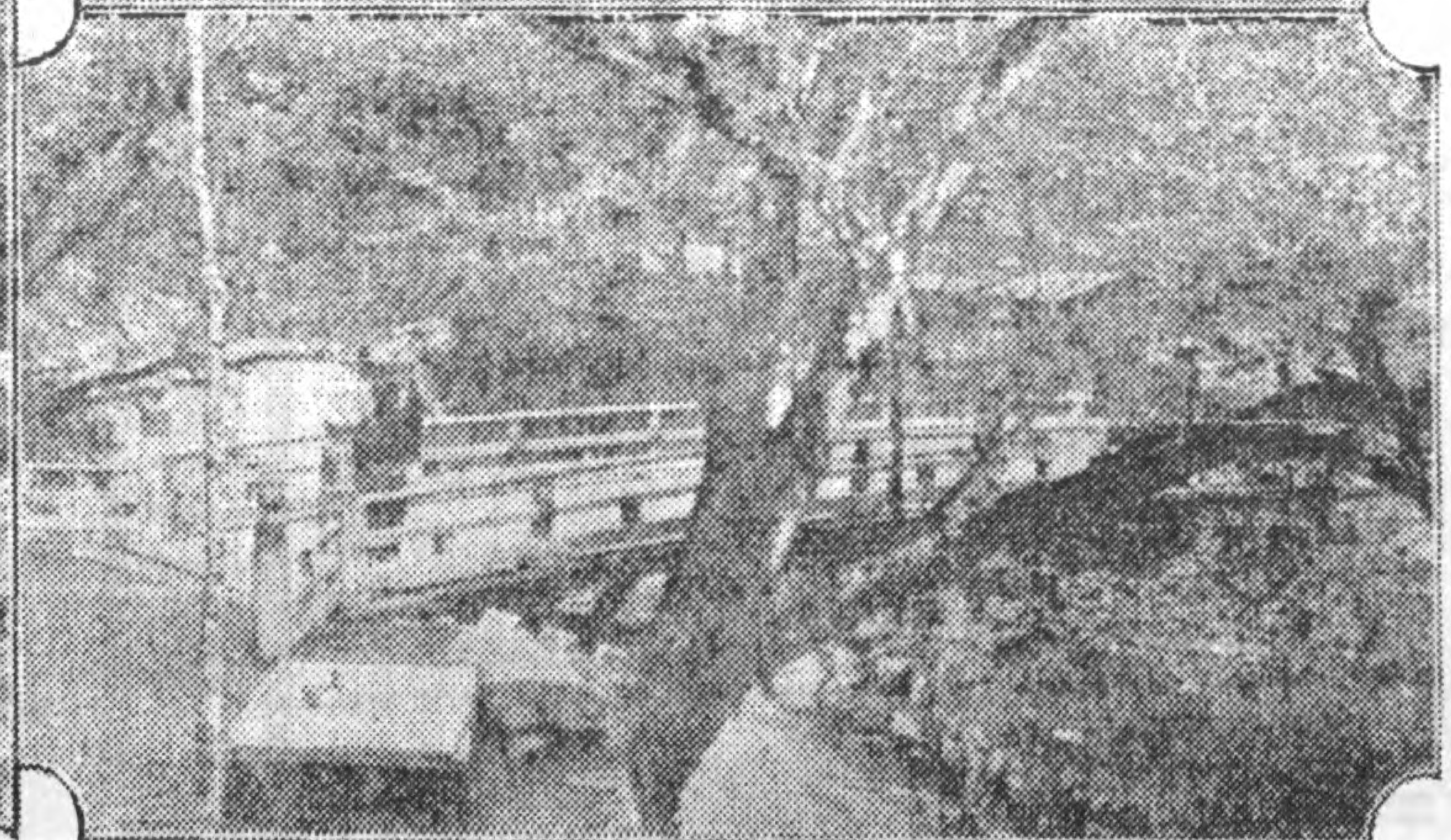
淸水寺



栂尾

清水新高尾





高尾山



槇の尾

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下候

治庖會本部教授赤堀峰翁 安西こま子共著

治庖會 日本料理法

附 什器圖解挿入 / 鰯の料理法 / 豚肉日本料理

和本全一冊 正價金四十五錢 郵稅六錢

龜屋主人 杉本新造著

增補日用 西洋料理法

附 支那料理法 / 玉突指南法

洋裝全一冊 正價金四十錢 郵稅六錢

三輪田女學校主 日本女子大學教授 三輪田眞佐子著

女訓之栞

全一冊 正價金四十五錢 郵稅六錢 和裝美製

落合直文著

女子雅文教範

全二冊 正價金七十錢 郵稅十錢 和裝美製

文學博士 小杉榲邨校閲并序

女子成立學校講師 齋藤圓子編纂

女子教科 包結之栞

套入美製正價金壹圓十錢 郵稅金十錢

和裝美製 全二冊正價 金九十五錢 郵稅金十錢

發行所 東京日本橋區通一 (電話本局一四一番) 大倉書店

東京女學館講師 國分操子著

日用寶鑑 貴女之栞

套入正價金一圓八十五錢 郵稅二十錢

和裝全二冊 正價金一圓六十五錢

女子高等師範學校教授 關根正直著

華族女學校教授 坂正臣著拜書

筆のゆきかひ

全二冊 正價金八十錢 郵稅六錢 和裝美製

小野鵞堂書

增訂 女子手紙之文

全一冊 正價金四十錢 郵稅四錢 和裝美製

華族女學校教授 坂正臣作並書

女子習字 文の山口

全二冊 正價金七十錢 郵稅六錢 和裝美製

落合直文著

小野鵞堂書

女子消息 雁のゆきかひ

全二冊 正價金八十錢 郵稅六錢 和裝

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

警察醫長醫學士　山根正次先生著

再版

婦人の生活

全一冊

正價金參拾錢
郵稅金四錢

◉婦人の強弱は國家の盛衰に關す

虚弱なる母は健全なる子兒を得る能はず多病なる妻女は幸福なる家庭を造くる能はず如何にして日本婦人を強健ならしむべきかは目下の一大問題にして之れが解釋は婦人社會の最も渇望する所なり本書は即ち此の渇望に應ぜむが爲めに公衆衛生に多年の實驗あり婦人體育の奬勵を以て半世の事業と爲せる著者が滿腔の誠意を以て記述せるものなり文章の簡潔明快にして用意の周密深切なる眞に婦人一生の師友と爲すに足らむ第一版已に賣切茲に新訂第二版出づ其眞價は乞ふ一讀して之を知れ

警察醫長醫學士山根正次講演　磯部檢三筆記

再版

改良服圖說

全一冊

新版本綴美裝
改良衣服眞圖
寫眞版十數葉入
定價金貳拾五錢
郵稅金四錢

婦人改良論起りてより種々の考案百出せりと雖も實用に供すべきものの殆どあることとなし獨り山根氏千年の學習を排し卓然として一家の見を立て着實に之れが研究を遂げ新に一種の服制を創設し自から之れを着用し裁理的根據に立ちて之を唱道し今や衣服改良は天下の輿論とならむとするに至れり本書は同氏が此の改良服裁縫の方法及び婦人服裝の改良法を講演せられたるものゝ筆記にして全篇すべて演說體何人にもよくわかる

大賣捌所

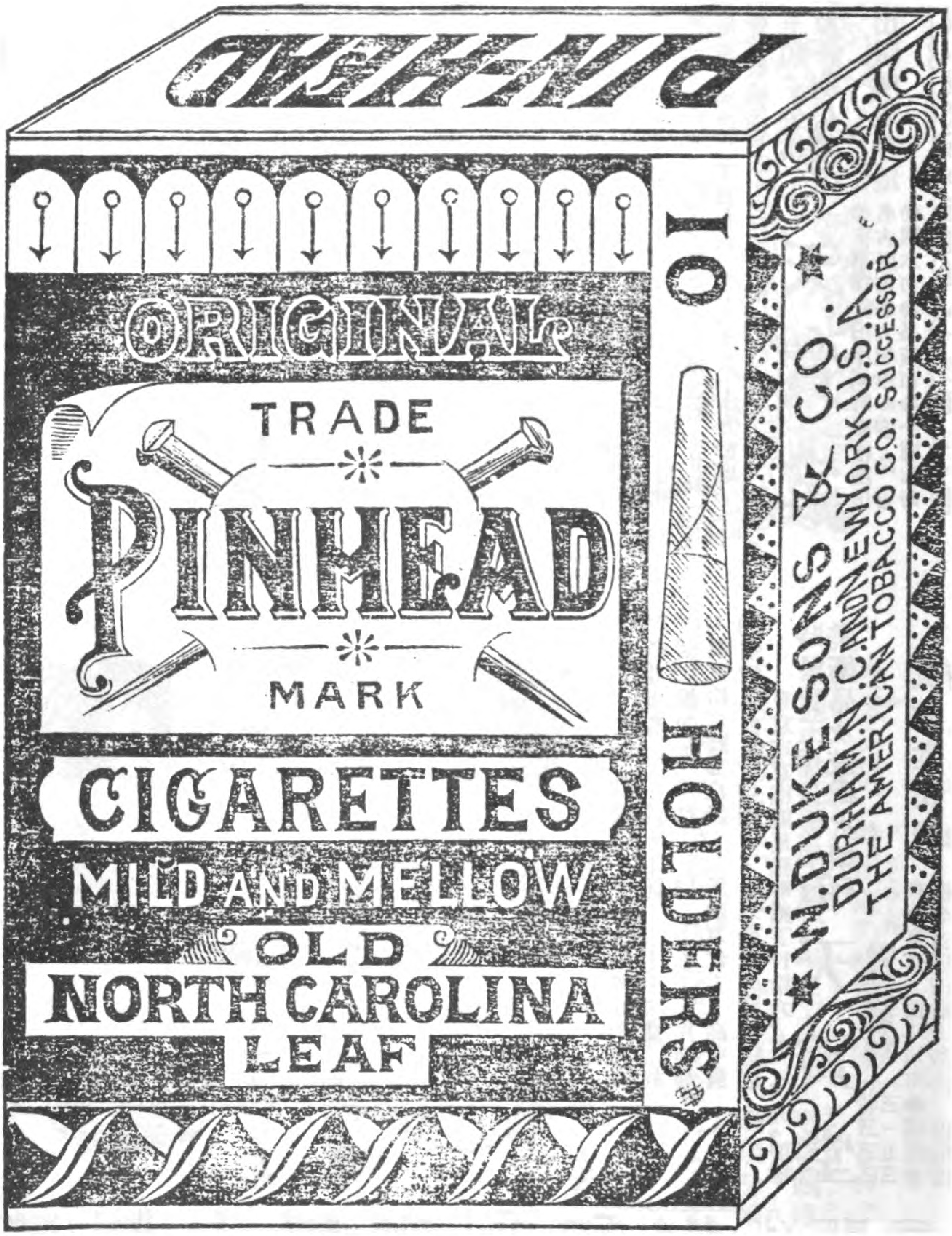
東京市京橋區鎗屋町十五番地

庚寅新誌社

（電話新橋一〇〇四番）

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

ピンヘッド



東京新橋　江副商店



子と刀自との稱辭に就て

祝儀麻呂

近來婦女子が切りと自分の名の下に子と云ふ稱辭を附けるが、是れは僭越の沙汰とも云ふべき事で、もと〳〵、此の子と云ふ辭は稱辭で、自分勝手に附けるものではないのである、固より如何なる婦女は、子を附けてよいとかわるいとか云ふ規程のあるでもなし、又門閥打破の今日にこんな事を云ふは、時候遲れの樣な心地がするが、苟も、皇族、華族、士族、平民と云ふ階級制度が現存して居る以上は、夫々身分相應に制限を附けねばならぬ事であるし、況して、女は男よりも自重心が大切であるから、こんな些細な事でも、氣を附ける方がよからうと思ふ、委しい事を云ふ餘地はないが、先づ子と云ふ事に就て、來歷とでも云ふべき事を少し書いて見やう。

○子と云ふ辭を名の下に附けたのは女のみではない男でもつけたもので、神武天皇の御代に、石押分之子、贄持之子、仁德天皇の御代に、丸邇臣口子應神天皇の御代に、壹岐直眞根子、仁德天皇の御代に、茨田ノ連衫子、又、佐伯ノ直阿俄能古、履仲天皇の御代に、阿曇ノ連濱子、雄略天皇の御代に、佐伯部仲子、又難波吉士赤目子、又水ノ江ノ浦島子、繼體天皇の御代に、筑紫ノ君葛子、又目頰子などは其の

例である、其の他、中臣ノ連鎌子、小野ノ臣妹子などは、誰でも知て居る例である、以上の人々は、皆顯門の方々で、子と云ふ稱辭は、音訓の差はあるが、孔子、孟子、荀子などの子と云ふ尊稱と同じ意味の者と見て差支はなからう、次に女の名の下に子を附けたのは、日本書紀欽明天皇の條に遣二靑海夫勾子一又云、春日日抓ノ女曰二糠子一、とあるのが、其の始であらう、此の勾子と云ひ、糠子と云ふ女は、如何なる人々かと云ふに、勾子は欽明天皇の時に、大伴大連金村が病と稱して朝せざる時勅命を奉じて、金村の許に慰問使と成て行た人であるし、又糠子は欽明天皇の妃と成た人で、いづれも高貴の人々である、是れから、女も男同樣名の下に子を附けるやうに成たが、いづれも門地の高き人々のみで、門地の卑き女には、其の例がないやうである、さて、現今はどうであるかと云ふに、恐れ多き事ではあるが、皇后陛下を初め奉り各內親王の方々や、各皇族の御息所の御名には、必ず子と云ふ稱辭が附いて居るが、是れを見ても子と云ふ辭を、猥りに用ひてはならぬ事がわかる、唯、臣下で子を用ひてよいのは、華族の婦女ばかりで、それ以下の者が、子を附ける事は、公認には成て居らぬやうである。

次に刀自と云ふ辭も、婦女に對する稱辭で、自分勝手に附けるものでない事は、子と同樣である、神代に神皇產靈神と申す神があるが、此の神の事を神魂大刀自神と申したり、又邇々藝命の后神なる華開姫命を、櫻大刀自神と申したり、又日本書紀允恭天皇の條に、鬪雞國造が皇后忍坂大中ッ姫に向て、壓乞戸母と申し上たる事などを考へてめ刀自と云ふ辭の並々ならぬ事がわかる、扨、此の刀自は諸先輩の說の如く、刀は戸で家の義、自は

主で一家の主の義である、婦人を一家の主と云ふは變な樣ではあるが、允恭天皇紀に、戸母と書てある通り、古は母なる人が一家の事を引き受けて、終生責任を負て執り行ふた者であるから、母は即ち家主である、國母と仰がるゝ方も其の通りで前に云ふた神皇產靈神の御事蹟を調べて見るとすぐわかる、それで刀自と云ふ稱は、古は一家の母として十分に責任を盡した婦人や一國の母として御功績の顯著な方に對する敬稱的名目であつたのである、しかし其の意義は、世を經るに從て消え失せ、なんでも家內にて專ら事を執る婦人を刀自と云ひ、母あれば母をいひ、母なければ妻をしか云ふ樣になり、それより後はそんな事に關係せず、只老女の稱に用ひ、今日では少し世に知られて居る婦人には、何子刀自と附ける樣に成て、戸主の眞意義は全く無くなつてしまつた、只尊稱辭である事は、知て居ると見え、子の如く濫用せぬのみである。

以上の所說で、子と刀自との性質は、略わかつたであらうが、そこで諸媛に希望する事がある、それは諸媛が子と云ふ辭を附けて、憚る事のない貴婦人の位置に進み、或は、世間より刀自と云ふ敬辭を受る樣な、才德兼備の賢婦人に成つてほしいのである。書生時代の女子や、位地名望もない婦人が、名の下に子を附けるは、僭越の事でもあるし、且心ある人の憂慮して居る、生意氣と云ふ事の一端ではあるまいかと思はれる。終に臨んで猶一言したい事は、女は名を假名で書くことが尤も妥當な事であらう、又漢字でかくならば、何女と女の字を附けた方が奥床しう思はれるがどうであらうか。

本心は神の託宣ない　（バイロン）

婦人の体育に就いて

土肥羊次郎

近來女子敎育の盛なるに連れて、高等或は專科の門に入る者も多く、又た美術もしくば工藝の道に志すものも尠からず成つたは、國家前途の爲め誠に慶すべき事である。斯の如く一方には諸般敎育の發達さるゝにも拘はらず、獨り婦人體育に就いては、著しく閑却されつゝあるは何事であるか。智育德育は末にして體育は本である、如何に德高く才秀でたる者ありとするも、其體育にして不完全ならんには、折角に琢き得た才德も心の儘に施す事が不可能であらう。加之ならず、良妻としては身體羸弱の爲めに內助の實を欠き、太甚しきは受胎の悦びを見る能はずして、寂寞たる家庭を作り出すが如き不幸も亦た決して尠くはない、否獨り一家の不幸にのみ止まらず、延いては一國の强弱にも關するであらう、未來の國民を生み出す處の母其者の體育が、不充分不完全であるからは何として健全なる國民を產出する事が出來やう。是は吾人の本誌を借りて少しく述ぶる所あらんとする所以である。

我邦婦人の體格虛弱なるは、直接間接とも其原因は甚だ多いが、就中平素の習慣、運動の不足、食物の關係、服裝及び家屋の關係、及び早婚等が最も其の重なる近因であらう。

彼の村落の婦人が都會の婦人よりは健全で、上流の婦人よりは下層社會の婦人が健全であるのは蔽ふべからざる事實である。是れ實に平素の習慣運動の不足等が主たる原因ではあるまいか、村落の者は重に、農業或は漁業を營むが、這は一人の業でなくて一家の業である、故に獨り主人の夫れに

從事するのみならず、一家擧げて之れに從ふのである、否らざるものと雖も、機を織り糸を紡ぎ布を晒すといふが如く、殆んど逸樂する暇がない、從つて消化も充分にして倦怠も覺えぬのである。故に自然に其筋肉の發達すると同時に其體格は强壯である。之れに反して都會の有樣は如何にといふに、商工業或は會社に從事するとか、又は官途に奉職する者が頗る多い、彼の下等勞働者といへる者よりは、男子と雖も勞働に從事せぬのである、故に其妻女なる者は室內に在つて事を執る、炊事洗濯或は裁縫手內職、僅に其の手足を勞するに過ぎぬのである。勞働運動の不足なるや固に當然である、筋肉體格の發達せざる實に此に基因するのである。而かも上流は殊更に其位地高く、資產ゆたかなる處より逸樂はいよいよ逸樂を極むるのである、勞働などの有るべき筈はない。多くは一室に靜座して美味を食ひ香茶を喫し、書を讀み琴を弄して生涯を終るのである。故に多くは其筋肉發達せず、體格亦た强壯を欠いて居る、比較的下層社會の婦人が體格の完全なるは、實に此の運動勞働が與つて力ある事は、殊更に辯明するの要はない。

次ぎが食物の關係であるが、食品中最も滋養に富めるは肉類である、然るに我邦婦人の多數は何故か此の滋養食を好まぬ傾がある。开は由來我邦は穀食の民であるから、斯る鷄豚牛の如きものを不淨物として避けて食せざる時代もあつた。其の古來の習慣にも依るであらうが、夫等は頓斗過去三十年の夢であつて、王政維新と共に一度泰西の文物輸入されて以來、亦た斯の如き守舊固陋の頑說を唱ふる者も少くなつたから、今日にては强がちに此習慣のみが此の傾きを作り居るとは言

はれぬ。要するに、多數の婦人が肉食を欲せざるは、一種の習慣性であらうと思ふ、夫れは彼等の運動が以上述ぶるが如く不足されて居るからは、勢ひ斯くの如き滋養に富む重くろしき食物に堪られぬくらゐであらう。成るべく淡泊なる食品をのみ撰擇するが如き傾向になるのであらう。其の運動にして今少し充分であつたなら、決して彼等は今日の如く是等の滋養食品を厭はぬであらうと信ずるのである。而かも我邦の流俗としては、食品を撰むにも其方法を誤まれるが多いやうである。假令ば同じ高價の物品を需めるにしても、滋養といふよりは嗜好の方に傾き易い、鷄羊を購はるゝの資を以つて、却つて松茸其他の物品を購ふが多い、營養の食物といふよりは嗜好の美味を求むるに急である。勿論これは女流のみ獨り爾りと云ふではないが、而も此弊は女流に於て一層烈しきを覺ゆるのである。

尤も單に脂肪に富む食品を用ふればとて、直に身體の營養とは成らぬであらう、從つて之れに伴ふ處の運動も必要である。否らざれば切角の滋養食も身の營養とはならぬであらう、運動不足の結果不消化となつた上は、多量の滋養食を用ふれば用ふるほど不消化を來すものである。故に一方運動を充分ならしめて、消化機能を敏活ならしむると同時に、適度に滋養食品を食してこそ眞の營養とは成るのである。然るに世間往々之れを察せずして、滋養食をなさゞるも田舍の者は健全である勞働者は健全である、朝夕口に滋味を食へども都人士は虚弱である、上流社會は虚弱であるといふが如きは察せざるの甚だしき者であつて、元より一顧の値もないものだが、左りとて彼等の言も全然其當を失しては居らぬ、確に現在實例はある。

乍併、運動は飽までも運動で滋養ではない、滋養は何處までも滋養であつて運動ではない故に彼の田舍者、勞働者の滋養をなさゞるも健全であるは運動の足るからである、滋養を食しても都人士上流社會の不健全であるは運動不足の結果である、もしも此の滋味を食する都人士、上流社會にして、田舍漢、勞働者の如く運動が足りたなら今一層健全な體格を作り得るであらう、彼の田舍漢、勞働者の輩にして朝夕滋養食をなしたなら更に又た健全な身體と成り得る事であらう。運動足不足の結果は男子として既に斯程の差があるからは、婦人としては更に一層甚しい事であらうと思ふ。而して其事が頗る閑却されて居るのが今日の事實である以上は、大に婦人運動の奬勵を圖らねばならぬ必要があるではないか。

次ぎは服裝及び家屋の關係であるが、是れとても矢張り食物及び運動不足が及ぼすべき程度に、婦人の體育を掣肘沮害しつゝあるのである。併しながら、古來因習の久しき、一朝にして面目を改むる事は到底難事である、否寧ろ不可能である。けれども難事不可能であるからとて其害を認めては居られぬ、假令全然あらずとも、出來得る限りはどうしても改善し度いものである、夫れも急激の勵行は迚も出來ぬが、漸次に機會を待つて改め去るの外はない。

服裝が婦人の身體發達に及ぼす第一は、幅廣き帶を腹部に卷付る事である、其の如何に胸及び腹部の諸機關を壓迫して身體の發達を害するかは、專門家の講釋を聽くまでもない、然らば早速に之れを全廢して男子の如く、狹いものを用ひて束帶とするが一番である、然しながら、這は云ふべくして容易には行なはれまい、其故は外見が頗る見

よきものでないからである。元來婦人の躰格は何處よりも最も發達したは臀部であつて、十が十其の臀肉は小山の如く成り居るものである。彼の楚王の好まれた細腰の美人としても、男子と比しては同日の談でない。故に此の臀部の大なるを掩んと常に心掛けるは亦た己むを得ぬ人情であらう。彼の歐米婦人の長裳を用ふるが如き、本邦婦人の幅廣き帶を巻附けるが如き、何れに致せ其意は一に此の臀部を掩うて、幾等か外見を飾らんと務むるに外ならぬのである、故に女子とて其幼時に在つては男子と同樣狹い帶を用ふるも、漸く成長するに從つて漸次に其幅を廣め、十四五歲に及んでは純全たる廣帶を用ふるに至る。故に身躰發育上の利益なりとて一概に此廣帶を廢せんとしたら多數の女子は必ずや之に同意せまい、むしろ其體格の發達を犧牲としても、今日の有樣即ち現狀維持を希望するであらう。然らば如何にして能く之れに處すべきかは當然來るべき第二の問題である。

（未完）

婚姻哲學（承前）

前田長太

（五）妙齡女子結婚の理由

結婚の理由と云ふと、意味が色々に取れるが、茲には今日の女子が何せ結婚々々と云つて騷立るかと云ふ譯を語らうと思ふのである。

今仔細に其の原因を探つて見ると、先づ第一虛榮と云ふのが其の一因らしく思はれる。妙齡の女子には孃樣の語ばかりでは未だ物足らぬ心地がする、一日も早く奥樣と云はれて見たいと云ふ小さな女心が誰にでもあるのである。然し奥樣の名

は獨身では攫取されない、是非とも男の腕を要する、其男是れ之を夫と云ふ、それで結婚がそんなに急がれるのだと云ふ話である。全然の眞理かは知らぬが、幾分かの哲理は必ず其中に藏して居ると思ふ。

第二早く夫を定めたならば、幸福な生涯を送られるであると云ふ謬想も、結婚の原因となるのである。余は謬想と云ふ何せなれば中々希望した通りの幸福なる生涯は、結婚に依つて直ぐに得られるものでない、結婚の味は結婚せぬ前には甘いけれども、結婚して後にはそんなに甘くはない、時に苦いこともある、所謂夫婦にならぬ前が花である、意中の夫婦の時が一番嬉しい、格別年少男子の美貌に欺かれ、其の金力に欺かれて、早く結婚したならば、装飾も充分出來るだらう、芝居見物も度々出來るだらうなどと云ふ忘想を畫いて結婚を急いだ者は、結婚の後豫想外の事實に出會して飛んだ目に遭ふ者である、結婚渇望の女子少し氣を附け給へ。

第三早く男子と提携したならば、社會的事業が行はれるであらうと云ふ大望もある、余は大望と云ふ、女にしては大望である、志や美ありと謂ふ可きであるが、然し一たび結婚した以上は家政の心配もあるし、人を誤ると、生計の心配もあり又甘く往つたとしても、直ぐに腹部に結果が生ずる、忽にして背後の重荷となると云ふやうな譯で、母と云ふ名は一方より觀て好ましいかも知れぬが、社會的事業を行はんと云ふやうな方面より觀ては、大變厄介なものである、嗚呼女と云ふものは可哀想なものである、獨身なれば纎手で何にも出來ず、結婚すれば內事が妨になりて、充分羽翼を外に伸張することが出來ず、何れにしても

希望通りの大事は行はれぬ者である。余をして正直に語らしめば、獨身の方が却て社會的事業を行ふに都合が宜しいと思ふ。其の證據は必ずしも遠き古代に遡らざるも、近き今の世に於て之を見ることが出來る。即ち獨身の女子と有夫の女子と孰れが最も社會的に働いて居るかと、兩々相比して考ふれば、直ぐに分るのである。

第四時としては又輕佻浮薄なる心より早く男子の認むる所となり、其の注意を惹き、結婚の申込を受けたのを一種の榮譽の如くに思ふ女子もある故に之を以て或は同じ芳紀の友に誇り、或は未だ結婚の見込なき者に羨ましめると云ふやうな事が言語擧動に出るものである。彼のお孃樣は最早結婚なさいましたが、此のお孃は未だ婚姻にはなりませんと云はるゝ時には、何となく其中に毀譽褒貶があるやうに思はれる。即ち前者の早く結婚じたるは男子の眷顧愛敬を買ふに足れる美點特質ありたるが爲め、後者の長く結婚の運びに至らざるは品物の不良なるが爲め賣口惡いと云ふやうに考へるからである。然し如斯心で結婚を急ぐ者は時々配遇を見そこなつて飛んでもない男に出會ふことがある、此は天の罰であらうと思ふ。

世の妙齡なる女子の結婚に奔る理由は他にも澤山あらうけれども、余は特に如上の四件を掲げたのは、世人結婚理由の如何にツマラナキものなるやを知らしめんが爲である。

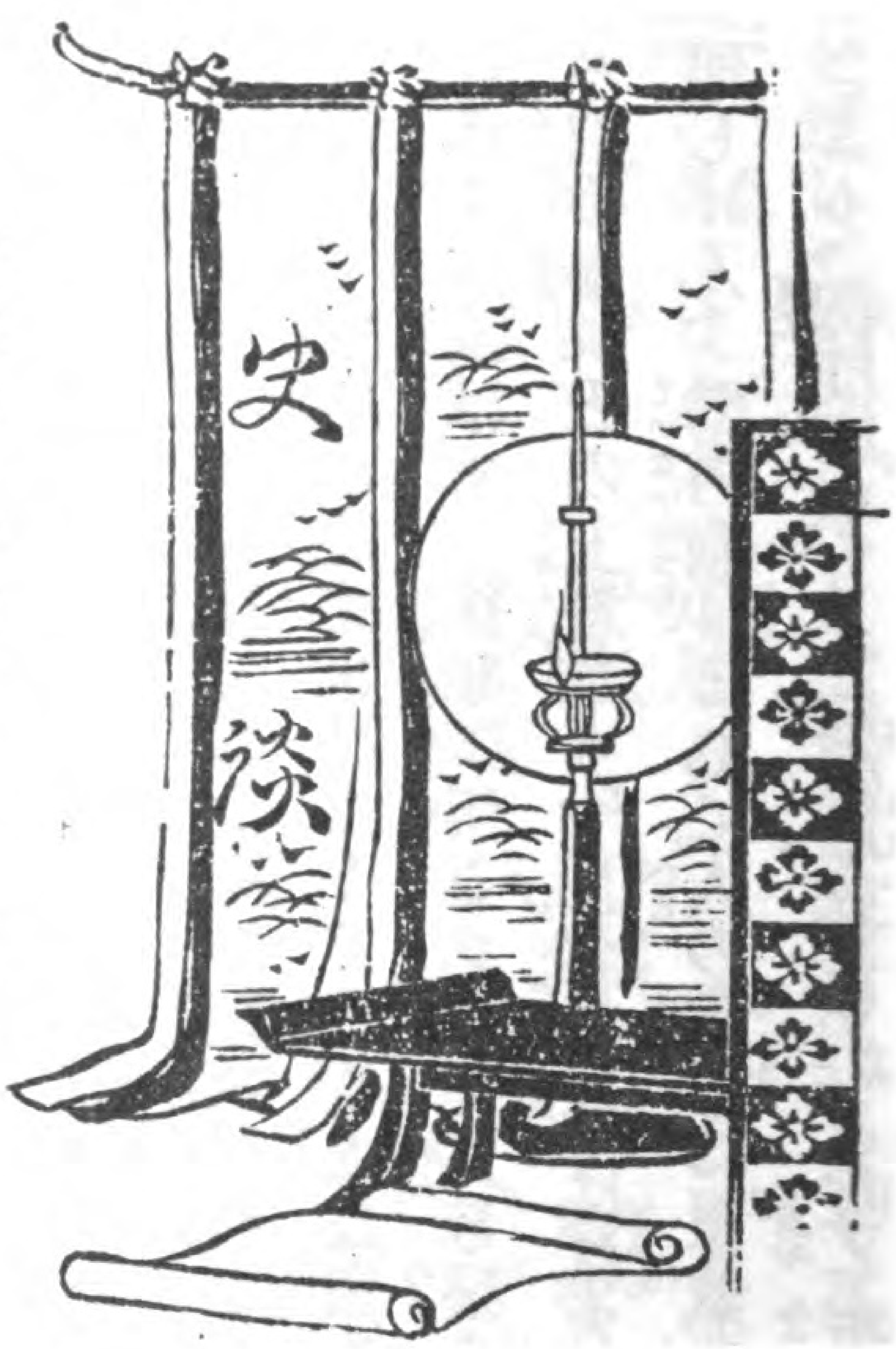
述べ去り述べ來りて茲に到れば、世の父母たる者は其の子女の結婚せんとするときには、注意に注意を加へ、先づ第一結婚せしむ可きや否やと云ふ事を其の健康、其の道德に照らし、次に其の子女が如何なる謬見を以て婚姻を希望して居るかを考へ、之と同時に今人の結婚する弊風及び理由等

を仔細に檢覈した上で、婚否を決定しなければならぬと云ふ事は、言を待たずして瞭である、此は吾人の所謂婚姻觀にして、余は之を婚姻哲學と云つたのである。一寸見ると、餘り結婚には賛同しないやうであるけれども、決してさうではない、但だ結婚の重んずべく、輕々に行ふ可きものにあらずと云ふことを論議したので、畢竟婚姻は人倫の大道なりと云ふ義を言明したまでの事である。余の宿後日機を見て獨身哲學と云ふものを草し、余の宿論を尚一層明に述べやうと思ふ。　（完結）

面白き航海實記若くは旅行實記を手にし山中の故家に座を構へて之を閲讀し而して屋外の風聲なして恰かも背中の波浪松風に伴はしむ正に是れ人生最大幸福の一なるべし

（レイハント）

から衣すそ野の原の花すゝきほに見ねかけて霜枯にけり



佐野政言の母

何人の作にや我家に『安明噂日記』といへる古代の書本あり記する處は何れも田沼騷動なるが佐野政言の母堂が召捕はるゝ前後亦た捨て難き所もあれば其一節のみを聊さか補筆して本誌の餘白を汚す事となしたり

月巴道人

天明四甲辰年三月廿四日殿中大廊下に於て、

時の若年寄田沼山城守は刃傷に及びたる佐野善左衛門政言、祖先傳來の業物一竿子忠綱の一刀をもつて、逃げ行く山城守を後袈裟、肩先より腕に掛けて八寸程も斬り下げたれば痛手に堪得ず打伏したり。此有樣に詰合の面々スワ事起れりと走せ附くる中に、大目附松平對馬守七十餘歳の身を持て第一に後より抱き止め『如何に善左衛門亂心せしか、殿中をも辨まへず斯る狼藉尾籠なり』と呼はれば、政言徐にこれに答へて『決して亂心は仕つらず、據ろなき仔細あつて斯くは刃傷に及び候、此上は何卒いま一刺し快よく仕り度く候間暫しの御猶豫下され度し』と言ひながら又たも一刀、其場に打臥す山城の股の附根に刺しとほし力に任して剜りたり。折柄御目附柳生主膳正前より進みて兎角して一刀を奪ぎ取つたれば政言も今は意を決し、更に是等の諸士と爭はず『此上は何卒御定法どほり宜しく御取計らひ下され』と從容として繩にかけられ、編輿物にて御中の口より揚屋へとは送られける。

去る程に此變を聞きたる山城の實父田沼主殿頭は、大いに驚き且つ怒り直ちに有司に下知をなし、佐野の一族はいふに及ばず從類に至るまで悉く召捕しめんとて計りたり。依て忽ち町同心數十人番町袋町なる佐野家の邸宅を取圍み、其中の重なる者五六名門内に進み入り玄關口に立つて『今日善左衛門事亂心なせしか、殿中をも辨まへず、若年寄田沼山城守に手傷を負はせ候段其罪輕からざるに依り、揚屋に遣はされたり、然る上は家內一族は申すに及ばず、從類に至るまで一人も殘らず搦め取り參れとの上意なり』と大音に呼はれども、如何しけん、邸內寂りとして人の居るべき氣色もなきより、扨は早やくも逃げ失せしかと呟く折柄、

奥より年頃六十餘歳と見ゆる老婆の只一人衣服を改めたるが、徐々と玄關に立出で、式臺に兩手を仕へたるまゝ『何れも樣御役目御太儀千萬に存じまする、斯く申す自づからは佐野善左衛門が母にござります、悴善左衛門事、定めし今日は殿中において田沼親子の中いづれかに出合ひ申し、本望を遂しつらんとは存じながら篤と樣子を聞かざる中は心掛り、今まで案じ暮らし居りましたが、斯く何れも樣の御入來といひ、唯今の御口上にて悉く安堵いたしましてござります。サ此上は御遠慮なく是れへ御通り下されまして、自からを始め召使ひ一同、御上意のごとく御繩頂戴仕づり度う存じまする』と聲も澱まず咽喉も喝れず、平然として述べ立つたり。

捕方の者共は此の案外なる爲體に暫し呆れてあつたるが、頓ての事に手配なし表裏より一齊に家内を差して込み入れど、刃向ふ者は一人もなく、老婆の外には小犬一疋居るべき樣子の見えざれば、一同は增す〳〵不審し、間每〳〵を吟味して書院まで打通りしに其の次の室に以前の老婆泰然と座し、首に水晶の念珠をかけて兩眼を閉ぢ、小音に讀經なしてありたるが、唱へ終りしか此方に對し、時刻を移すは御上を憚からざる恐れあり、早々に御繩を頂戴申さん』自から我が手を後にまはし殊勝極まる覺悟の體に、捕方の人々は心に感じ、役目ながらも躊躇しが、天下の法に是非もなく、繩打て使者の室に据ゑ、尙ほも家內隈なく求むれど、男たる者一人もなく、此方の一室に漸く十一二なる小娘の繪本を見居りしを取押へ、室內は云ふも更なり、床下天井に至るまで悉く探しけれども、他には影すら見えざりし。

然るに書院の床の間には具足一領飾りありて、

其が片邊なる三方には銚子盃、肴も二三種取揃へ、大きやかなる飯つきには赤の飯さへ詰めおかれ、尙は其他には五升樽を二つまで順よく飾りありければ一同不審の思ひをなしつゝ老婆に向ひ『是等の設けは何故なるか、何んぞ來客の準備でもせられしか』と尋ぬれば老婆は打笑み『如何にも今日來客として御待受け申上げしは餘の者ならず、御役柄にて御越しある何れも樣でござりまする。御時分お宜しうござらうなら御勝手に御支度下しおかれたく、又た麁酒にては候らへども、夜前より今朝まで母子名殘りの盃をいたし候殘りの分もござりますれば、お宜しければ御氣献に御用ひの儀を願ひます、これみな悴が此度の大望成就いたしたる母子の者が心いはひでござります。又た悴奴は妻子は先達て離緣いたし、召使も大方は暇を取らせましたれば今はこれなる小女一人、又た今日御城へ供に召連れしは、殘らず日雇の者共ばかり、憚かりながら此段もよしなに御取計ひ下さりませ、尙は此外にも御尋の筋もござらば、自から能出で一々申上げませう』と凜然として答へしは流石は名家の母なりき。

（未完）

佛國文豪シヤトブリアンの事を紀す

菊地雪子

「ゼニ、ド、　リスチアニスム」の作者として文名を一世に轟かしたるシヤトブリアン氏曾て曰く、『我名譽幸福は慈母の賜あり、そは、我をしてわが宗教を離れしめざるやう努め給ひたればなり。』と

此言は母の幼兒に對する影響の如何に大なるか

を知るに足れり。氏又曰く、
『母君は萬事父君の好み給ふ所に抗抵したる事なし。』と
シャ氏が資性快活なる母君を天使に比して聖女と呼び寡言沈默にして、極めて人附惡しき父君に對して、大に之を怖れたるを見れば、その父と母の稟性には雲泥の差異ありしを知るべし。氏は其の双親の正反對なる氣質を其言行錄に記して曰く、
『父君家に在せば、母君も姉君も余も恐怖の念身を襲うて、宛も木偶の如くなれり。』と
コンブール城はシャ氏の住居にして、荊棘の林中にあり、四邊翠籬を以て廻らし、小川の水音ならでは訪ふ人絶てなかりければ、父君をして愈々世塵より離れて執拗の心を起さしめたり。靜なる秋夜風死し草眠る頃、父君は絹布の白衣を着、見惡き高頭巾を蒙りて、跫音嚴然として室内を歩み給へば、室も家も天も地も闃として一語なし、此際若し一言だに發するものあれば、父君は嚴重なる聲音にて、
『何を語るか』
と叱して直に沈默せしむ。斯くて夜やうやく闌ならんとするや、父君は歩を廢めて居室に入るを常とせり。
斯る嚴肅なる生活の中に、などて融々たる和樂の生ずべき、母君が日一日に憂鬱沈默の人となれるも亦理なり。シャ氏は其著「アタラ」及「ルネ」の中に母君に就き記して曰く、
『プルターギユの家に子女と共に遁世の人の如く、幾星霜の間憂き日を重ね給ひし母君の風采、擧動は其初め艶麗快活にして、父君の粗暴沈鬱の狀に比ぶべくもあらず、父君は性恬淡苛酷

史傳

なれども、社交をも好み給ひしが、母君は輕妙快活なる人に在せしに、父君の性癖の爲に年頃日頃心神を勞せし結果、漸く憂鬱に沈み給へり云々。』

抑もシャ氏の母君は想像に富み、神性聰敏にして幼少の時よりフェネロン、ラシヌ、マダム、ド、セヴィエ等の如き大家の著述を讀みて大に其の敎化を受けぬ。又その祖母君はマダム、ド、マントノンの設立せられたるサシンル校に於て學びしかば子女孫女の敎育を自ら擔當せられ、文運全盛なるルイ十四世の御代に於ける珍聞逸話等を記臆して語り、博覽にして且賢明の聞へ高かりければ、特にシャ氏家の夫人となるべかりし孫女に嚴然たる家庭敎育を施されたり。されば夫人は祖母より見聞したる事を多く暗んじ、小說等をも全篇其儘記臆したりと云へば、シャ氏が記臆力の强かりしと全く其の母君より享けられしものなるべし。古來偉人豪傑の母には必ず人に優れたる所ありて其子に及ぼす感化極めて大なるものなり。シャ氏の如きも幼少の頃より母君に睦みて、大に其性に化せられたる一人なり。故に人は之を詩人ゲートと對照す、ゲートも亦其母に負ふ所極めて多かりし者なりと云ふ。シャ氏は常に母君と苦樂を共にし、執拗偏窟ある父君の下に在りつゝも、母子相互に日頃の心苦しさを語り慰めしとぞ。氏は當時の家庭雜話を記して曰く

『月冴え、虫鳴く秋の宵父君やがて居室に退き給へば、母子家從が蜂の巣の壞れたるが如く騷ぎ立つるも理なり、父君在し給はゞ、物をもえ言はで、靜肅になし居ればなり。されば父君の退き給ふや各自其業を爲しつゝ、輪番に囀づるも面白し、母君は辨者にて在せば忠臣義士の話、時

には奇異の妖怪物語などをなして子女を喜ばしめ給へり。夏季には吾等欣びて母君の手助をなし晩餐を終へ、父君鳥を打ちに出で給へば、母君、姉君達と共に、木陰に暮れ果つる夕日の景、三ッ四ッ星の見え始むる黄昏の空などを打眺めぬ云々。』

と、斯く自然の美景に感を打たれたる幼兒が、他日米國の山川を眞に迫りて描寫せる、大文豪となりしは宜なりといふべし。氏は此時既に天然の眞美を語れり、木の葉も途に散り敷く頃、兄弟手を取かはして逍遙する事の樂さ言はん方なし。姉君ルシルは

『此景色を筆に寫し給へ』

と云ふ、シャ氏は當時未だ幼少なりしかど、數種の歌を詠じ、之を「フホレシランシウズ」と名付けたりしとぞ。

而て姉君も亦之に倣ひて詩歌を作れりと云ふ、歌題として二人の撰びたるものは往々舊約書中ジヨブの傳の極めて悲慘なる條章とラテン詩人ルクレスの最も悲哀なる人生觀等なりき。蓋し其家庭生活の有様より察すれば、此の如き出所より作詩詠歌の題を採りたるは毫も怪むに足らざるなり。

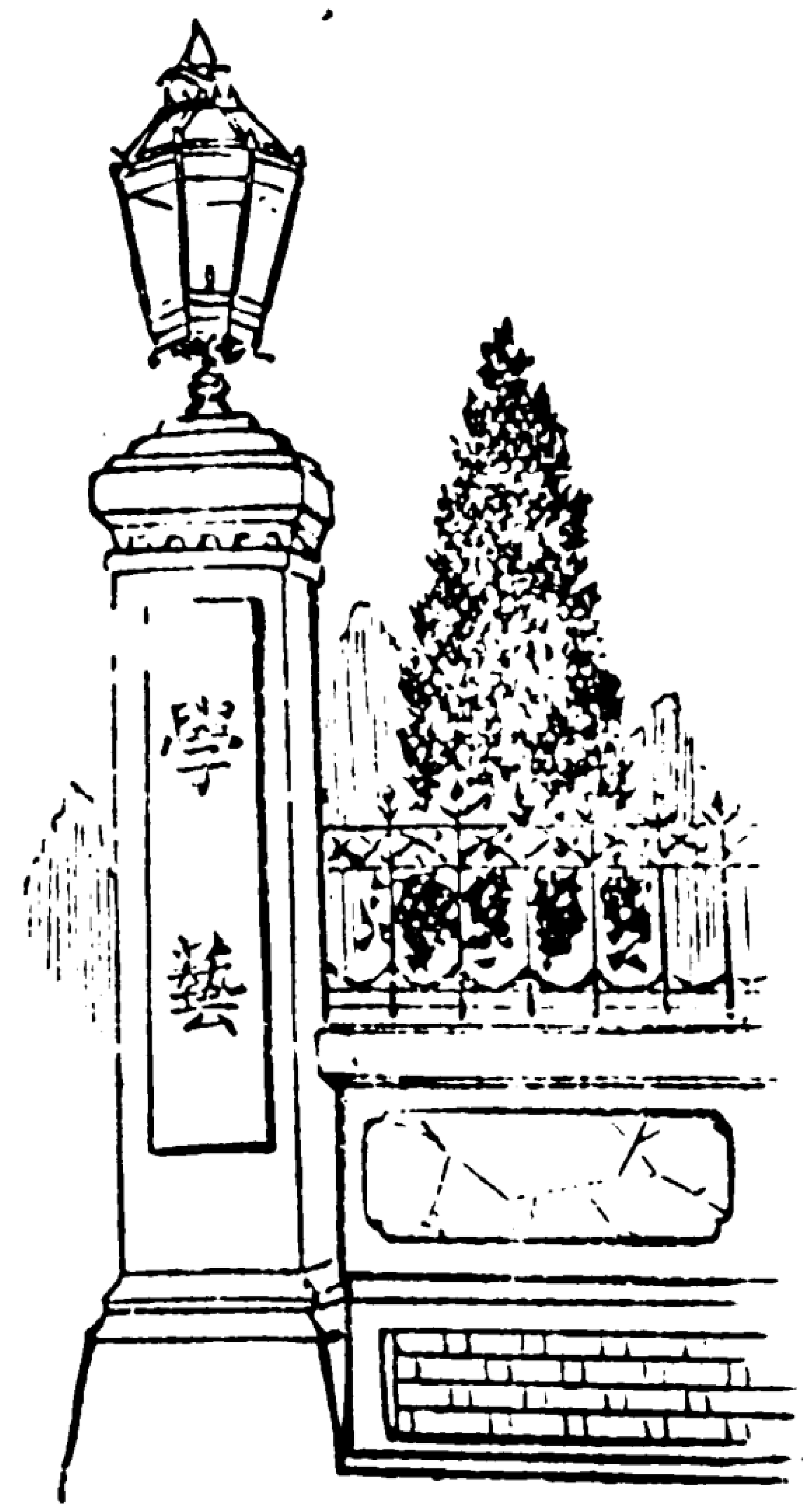
幼時の教育はゆめ等閑にすべからず。些細無意義の事と雖も第二の天性になりては、其の一生涯に及ぼす影響實に計るべからざるものあるなり。シャ氏が其の思索力、想像力等を大に發達せしめたるは、全く其の家庭教育に遡源せる事は氏の著書によりても明なり。氏は岩打つ波、松吹く風を友とし、兒童を集めて共に沙上を驅廻りつゝ、毫も危險を顧みず、或は寄去り寄來る浪に戯れ、岸邊に沙もて岡を造りなどし、之を以て無上の樂とせり。然るに水は方圓の器、人は善惡の友との

諺に洩れず、シャ氏も惡き兒童等と親く交れるにつれて、いつとはなしに惡童とは成りぬ。アゝ當時身に垢付きたる襦袢を着て、顔に喧嘩の傷痕を印し、我家に歸れる小兒にして、後日佛の文壇をにぎはせる大篇雄作を編まんとは誰か又想ひ至らんや。シャ氏幼時の逸事は一々枚擧に遑あらず。中に就て特に著しきものは、一日朋友と岸の杭に腰打懸け、寄來る浪を眺めたりし折柄、一人の少女あり、惡少年に突出されて海に陷り、既に命危き許なりしを、人々に助けられて、やうやく救はれたるが、彼を倒したる惡少年は外ならず、シャトブリアンなりき、さればシャ氏は復讐せられんを恐れ、急ぎ家路を指して走り行けるに、やがて幼女の隊追來りて其家を圍みたり、此時家に人なかりしを幸とし、一人の友と共に塀の上に攀上り、熱湯と藥物とを群がる寄手に注ぎたれば、團直に潰えて、敵兵は止むを得ず、そのまゝ退きしとぞ。かゝる有樣なれば、シャ氏は文讀み字習ふことも絕てせず、可惜光陰を空しく遊惰に過せるが、左ればとて强ち無益の事のみにてもあらざりしが如し。シャ氏自ら

『此の如き粗暴なる擧は、却て余が爲に二三の德を涵養する素をなせり。』

と記せるにても、明なり、學問を抛つて惡童と遊戯する事は、固より容されざる所なれば、父君は氏をして海軍士官たらしめんと欲し、授くるに製圖、數學、英語等を以てせり。然るに母君は兒に中學課程を卒へしめんとて、希臘羅甸の語學を研究せしめ、父君の感情を傷けんを恐れて、始は隱に之を學ばしめ、進歩するに及びて公然之を習はしめたり。左ればシャ氏が古代の大著述を學び得たるは、實に母君の力ありといふべし。母君は海

軍士官は兒が將來の希望にあらざるを知り、他の方面に於て適當の學科を學ばしめぬ、其故は母君は熱心なる宗教信者にして、兒が宗教界に盡力するを切に望みたればなり。（未完）



國文學講義

通俗土佐日記（第四）

廣島商業學校教諭 兒玉彌三郎

廿八日、浦戸より漕ぎ出でゝ大湊を追ふ。其の間に早くの守の子山口千岑、酒、好き物共持て來て、舟に入れたり、行く々々飲み喰ふ、

○大湊　は長岡郡に在り、今は十市といふ、海邊の村なり、浦戸を距ること一里許なり、十市村の西隣に池村あり、廣き池ありとぞ、浦戸より大湊、宇多の松原、鳴津、羽根、室津、御崎と次第に東南に當れり、浦戸より御崎を過ぐるまでは南方一面、島だに見えず、水や空なる大洋なり、下文にいつしか御崎といふ處を渡らんとのみ思ふとあるは此の故なり。

○追ふ　とは舟人等が常に用ゐる海邊の通語なるべし、其の義は、彼方の物は動きもせぬ地名なれど、動く物を追ふ有様に言ひ爲したるなるべし。

○早くの守の子　紀氏より以前に守たりし

人の子の、故ありて此國に留まり居たるなるべし、或は其國のさるべき女の腹に生れて留まれるあるべしといふ說あり、さるともありぬべし。
○酒好き物　好き物とは何にても美味の物をいふ。
○舟に入れたり　とは酒並びに美味の物を入れたるなり、千岑、別れを惜みて、暫したりとも語らんとして來けるも、旣に舟を出さんとしたる所に來合はせたるが故に、別れを惜むも草卒にて、其の持ち來りし酒などを舟中に入れたるにて、相互の情の本意なさを思はせたるなり。
廿九日、大湊に泊れり、醫、ふりはへて、屠蘇、白散、酒加へて、持て來たり、志あるに似たり、
○大湊に泊れり　とは風荒れ波高かりしが故なるべし。
○ふりはへて　とは態々志を起すことなり。
○屠蘇、白散、延喜式典藥に「白散一劑、元日御藥、歲旦以二温湯一服二五分一、一家有レ藥則一里無レ病、帶二是散一、病氣皆消屠蘇一劑、治二惡氣一、温疫辟二邪氣毒氣一」とあり、本草綱目には、除夜之れを絳嚢の三角なるに盛りて井底に懸け、元旦、酒中に置き、煎じて、擧家東に向ひて、年少より長首に、次第に之れを飮むこと、今俗間に爲すが如きこと記されたり。延喜前後には温湯を以て服せしを、承平の頃には酒にて飮みしなるべし、又伴嵩溪の說には延喜式には、屠蘇と白散とを分けたれど、こゝのは一種なるべし、下文元日の處に、白散を風に取られたることをいひて屠蘇のことなしと、此の說理あるに似たり。
○酒加へて　とは酒を添へたるなり。
○志あるに似たり　とは志、他に勝れたりとい

ふべきを他を憚りて態と朧氣に書けるなり。

○此の段、此の醫師、船中なれば屠蘇白散は固とより酒も意に任せざらんと察して、遠く此處まで送りたるは、單に元日の儀の爲めのみならず、紀氏をして平安ならしめんと思へる志あるにて、紀氏の徳に感佩せるものなること明らかなり、然るを志あるに似たりと書けるは、不及を以て過ぎたるを思はせたる書き方なり。

元日尚ほ同じ泊りなり、白散を、或る者、夜の間とて、船屋形に挿めりければ、風に吹き鳴らさせて、海に入れて、得飲まずなりぬ、芋も、荒布も、齒固も無し、斯う樣の物なき國なり、求めも置かず、唯、押年魚の口をのみぞ吸ふ、此の、吸ふ人々の口を、押年魚若し思ふ樣あらむ、今日は、都のみぞ思ひやらるゝ、家の門の尻久米繩、鯔の頭、大戟等いかにぞとそいひ合へる、

○元日は承平五年正月元日なり。

○白散を云々　前段伴蒿溪の説の如く屠蘇と同一物なり。

○或る者　とは從者の中の一人あるべし。

○夜の間とて云々　前段に言へる如く、除夜絳囊に入りて井戸に懸け置く習慣なるに、舟中固より井戸あるべき筈なく、絳囊も亦無きが故に、醫師の贈れる儘にて舟屋形に挿み置きたるをいふなり、器の中などに納め置くべきことなれど井中に懸くる代りに斯く挿めるなるべし。

○風に吹き鳴らさせて　とは風の吹くに任せたるをいふ、海に入れてといふも、自ら海に入れしにはあらで、井戸に懸くる代りに挿みたるが、

學藝

思ひ掛けなくも、入れたる如き結果となりたるを以てなり、此の或る者の舟屋形に挿みたるは、粗漏は粗漏なれど、故なく挿みたるにあらざれば、其を咎めんとにはあらず、醫師の折角の好意を無にせるを嘆きたるなり。

○得飲まずなりぬ　とは舟中なれば、今年は飲むこと叶ずと思ひ諦めたる白散を、思ひ掛けなく醫師より贈りたれば、他の祝儀は無くとも是れだにあらばと、深く喜びし甲斐もなきを歎けるなり。

○芋も荒布も云々　芋、荒布、齒固、共に元日の食饌に供するものにて、延喜式大膳下に「正月最勝王經齋會、供御芋六合荒布二兩二分」とあり、又、江次第卷一に「元日平旦云々、供御齒固、具盛二青瓷二云々」とあり而して古來、齒を以て年齡を代表せしに依り、齡を固むる意に寄せたるなり、是れは餅のことなり、白散は無くとも切めて此の三種の中一つだにあらば、まだしも元日の儀式らしき心地もすべきに、其れすら無きをいへるなり。

○斯う樣の物も無き國なり　國とは勿論土佐國なれど、例のおほめかせるなり、千年の昔なれば是れ等の物も土佐には無かりしにや、されど醫師が白散を贈りしを以ても、正月に餅を喰ふ風習なき處とも思はれず、或は土佐の任の不平なりしより、此の三種の品の如きだに無き邊陬の國なるを思はせんが爲めにや。

○求めも置かず　とは是れ等の物の有る他國より求めても入れ置くべきことなりしかど、其れもせずといふなり、畢竟紀氏が廉潔にして、他の受領の如く富を貪らずして清貧なりしかば、遠國より求めなば求め置かるべかりしを、其の

資力もなくて求め得ざりし由をいひて、専ら廉潔清貧なりしことを思はせたるなり。

○押年魚の口をのみぞ吸ふ　延喜式主計に「筑前筑後肥前肥後、並獻ニ押年魚同漬鹽年魚、云々」とある、又、江次第に「元日押鮎一杯、鹽鮎一杯」とあり、元日所用の品たること明らかなり、前に芋、荒布、齒固などすら求め置かずとありしに押年魚に限り所持せしと不相應なるが如しと雖も、是は延喜式にある如く肥筑等の國は土佐と遠からぬ處なれば、其の國人より送りなどしたらんを持ち合はせたるものと見ば可ならん。

此の押年魚の口吸ふといふことを、本居宣長は、男女間の接吻に擬して、押年魚は、假令其の口を吸ふとも、其の人を思ひもすまじきにと戯れたるなりといひ、又、上田秋成は、齒固の時には鮎を丸にて喰ふにもやあらん、其の口の様の可笑しきをいへるならんといへり、御杖は、人數に足らぬ年魚なれば、喰ひては一同に行き渡らざるが故に、年魚の口を吸ひつゝ人々に渡して形ばかりの祝ひのしるしとせるなりといへり下文の思ふ様あらんの解し方に依りては、本居の説も面白き様なれど、御杖は又別に解せり、其の處に擧ぐべし。

○此の吸ふ人々の云々　斯く人々吸ひつゝ渡す其の人々の口を、若し押年魚が心に思ふ様もあらんかとの心にて、其の心は、人々の中には口振りの惡しきもあらん、又臭氣の有るもあらん、さる口にて吸はれては、いかに苦しく詫しからん、從つて今我が、押年魚の斯く苦しく詫しき目に逢ふをも思ひやらで、此の口吸ひ渡す事を爲したるを恨めしく思はんかとの心なり。是れ表面は唯、戯れに書きたるなれど、其の實、

貧しきを示したるにて、貧しかりしは即ち任中の廉潔を思ひ見るべきなり、是れ、時、處から、陰氣なる有樣なり、若し前の、本居の說に從はば頗る陽氣なる解釋となるべし。

○今日は云々　元日なれば追ひ來る人もなく徒然のまゝに、餘念もなく都を思ひやらるゝにて、或は任中、家を預け置ける男の、善くせるか將た惡しくせるかなどを思ひ、親屬朋友などの上をも思ひやりしならん、されど下文の詞を以て見れば、主として家の事を思へる樣なり、末に至りて、家を預けたりし男の、大に荒らしたるを憤れることも見ゆれば、かた〴〵思ひ合はさるべし。

○尻久米繩　古事記上卷石屋戸の條に「即布刀玉命、以㆓尻久米繩㆒控㆓度其御後方㆒白言、從此以內、不㆑得㆓還入㆒故、天照大御神、出坐之時、高天原及葦原中國、自得㆓照明㆒」とあり、神代卷には「於㆑是、中臣神、忌部神、則、界以㆓端出之繩㆒、云々」とあり、本居宣長は、藁の尻を切らずして籠め置く繩なり、くめはこめにて後世のくるめの義なりといひ、加茂眞淵は、尻に御後方久米は限目の義なりといへり、後者は繩の主意を釋し、前者は繩の樣を釋せるなり、兩者を兼ねて藁の尻を切らで綯ふを以て日神の御後方を極むる由なりとは御杖の說なり。

○鯔の頭　神代卷に「口女自㆑口出㆑鉤、口女鯔也」とあり、和名抄、遊仙窟、新撰字鏡等皆奈與之と訓せり、奈與之とはぼらの古訓なり、後世は都鄙共に鯔の頭を挿すも、其の頃は鯔を用ゐたるなるべし。

○大戚　延喜式に大戚又黃芩とあり、和名抄に「黃芩、本草云、黃芩音琴、和名比々良木、揚子漢

語抄云、杠谷樹、杠音江、和名比々良木、一云巴戟天」とあり。

○右、尻久米繩は正月の習ひにて、鰯、大戟は節分の習ひなれば、節分並びに正月の習ひを、彼の留守預りの男、爲したりや爲さゞりしやなど思ひやれるなり、等とは正月にも尻久米繩に限らず種々の儀あり、節分にも鰯、大戟に限らぬことなれば、此の三種にて正月と節分との種種の儀を束ねていはんが爲めに等と書せるなり、新年に家々尻久米繩を引き渡し、松を立てなどするを、後世は何の故とも辨へず、只迎春の設けとのみ心得たるが如し、松を立つるは即ち石屋戸の條なる、根こじにこじたる眞阪樹に疑せるなり、眞阪樹のことを榊なりと心得たるは、新字創製後のことにて、神代巻に榮樹と書せるを正しとすべし、榮樹とは何の木なりしかは詳かあらざれど、小松は野山に甚だ多くある者なる故、是れを根こじたるなるべし。尻久米繩のことは前に引けり、我が國教の精華として、天照大御神を石屋に籠らせ奉るべからざること、國民の心得べき一大事なれば、年首に、石屋戸の樣に擬したる遺式あり、鰯も前に引ける口女に擬し、大戟も古事記上巻にある比々羅木之其花麻豆美神といへる名に因みたるならん。

○いかにとぞ云々　留守預りの男が、形の如くしたりやいかになどゝ人々言ひ合へるなり、是れ等の儀をさへ缺かずして爲す程の心ならば、假令五年間の留守たりとも、家も荒らすまじければ、是れ等を以て家の事を想像し得らるとの意より書きたるなり。

○此の一段の文氣、全く、心よからぬ任に年を經たるを歎きたるより起れることを知るに足る

べし。

二日、尙ほ大湊に泊れり、講師、物、酒おこせたり、

○大湊に泊れり　風波の荒き爲めなること三日の條下の詞に徵して明らかなり。

○講師　は前に見えたる國分寺の講師なり。

○物　とは食物なり。

○おこせたり　とは使に持たせて贈れるなり、去る十二月廿四日の條には講師馬の餞けにいでませりと敬語を用ゐ置きて、此處におこせたりといへるは前後不釣合の樣なれども講師媚俗の弊風を前の一度すら淺間しく思ひしに、重ねて贈り物などせしかば、愈、不快に思ひたるが爲めなるべし。

三日、同じ處なり、若し風波の、尙ほ暫しと惜む心やあらむ、こころもとなし、

○風波の云々　風荒れ波高くして舟出し難きは、風波心ありて尙ほ暫しと留むるにやとの心なり、土佐の任の心苦しさに、辛うじて得たる歸期なれば、暫しにても此の國に居らんことの厭はしくて、今日は今々々と思へど舟出すべき日なきを歎けるあり。

○こゝろもとなし　は後世の不安心とは異にして、あやにくといふ意なり、辛うじて歸期を得て、今は一日も早く此の國を離れんと思ふに、來る日も今々々風波荒れて、舟出し難きあやにくさを歎けるなり。

四日、風吹けば得出で立たず、昌連、酒、好き物獻れり、斯う樣に物持て來る人に、尙ほ、爲も得あらで、いさゝけきわざせさす物なし、賑はゝしき

樣なれど負くる心地す、
○風吹けば　とは此の日にのみ風吹きたる樣なれど、前日若の風波の云々とあるにても、前日來吹き續きたるを知るべし。
○得出で立たず　も前日に同じく、此の國を離れぬを歎けるなり。
○昌連酒好き物獻れり　此の人に限り斯く獻れりと書けるは、身分甚だ賤しき人なりしなるべし、下文に返禮のことをいへるは、總ての人々にかけたるなれど、殊に賤しき者には必ず返禮すべきことなる故に、此の人を首として他の人人に及ぼせるなり。
○物持て來る人に　とは送りて來たる人々の中に、物持て來ぬ人々もあれば、其れに別ちていふなり、紀氏の廉潔なる、送られたる情をば喜べと、決して物を喜ぶ心なきことは上文にも見えたれど、物を贈れる人々に返報せでは、貪る如く見ゆるを以て斯く取り出でゝいへるなり。
○尙は爲も得あらで　必ず爲べきことをせぬを尙はといへるなり、返報せずには得居らでといふ程の意なり、此の尙は下文のせさすまでにかゝりて、物もなしといふまでにかゝれるにはあらず。
○いさゝけきわざ　とは小事なり。
○せさす　とは人に命じてせさする心なり、守なれば自らする樣には書かぬなり。
○饒はゝしき樣なれど　とは當時受領は任中收納多き者にて、歸京の時は富める習ひなりしが故に、一般の受領に準じていはゞ、紀氏も富みたる樣にはあれどゝいふ心にて、記者たる女、紀氏の貧しきを嘲りたる體に書けるなり。
○負くる心地す　國守なれば國人どもに負くる

筈はなきに、賤しき者すら身の程々に物を贈りなどもするに、紀氏はいさゝかの返報をもせぬは、國人どもに負くる心地すといふなり、是れも紀氏が無益の廉潔だてをして、守にてわりながら國人にも負くるは見苦しきことなりと、傍より見たる女記者の嘲けりたる心に書きて、却つて任中廉潔なりしが故に貧しきにて、國人の斯く慕ふも皆夫れより起れることなれば、多くの受領中抜群の由を思はせたるなり。

○玆に、本書の緒言に於て斷はり置きし所謂倒語に關する「燈」中の一例を抄出して、讀者の參考に供し併せて此の段の解釋の足らざるを補はん。

「裏」今日も尚は舟出だし難くて此處に泊られける徒然を思ひやりて、昌連、酒など贈れるにつけて、是れに限らずさま〴〵も志ある人々、此の昌連が如く物など贈りたる人も多かりし嬉しさも思ひ續けられて、箇様の人人には必ず報いすべき事と心には思へども、いさゝかなる報いわざせさすべきものなければ、止むことなく受くるばかりにて止みたるがいと心苦しき由をいひ、おほかた受領の歸へさは任中の收納にて必ず富饒なる習ひなれど、貫之ぬしは其の習ひに違ひて貧しければ、國守なれど彼等が志の深きに負くる心地すと、我が禮の缺くるをもて人々の志の厚きを賞し喜ばれたるなり、されど是れは詞の表にて、任中善政に依りて人々其の恩を感じ德を思ひて、斯く別れを惜み禮を厚くし志を盡すにて、是等に報いも得せぬは身柄にも應せず淺間しきわざなれども、任中貪婪の心いさゝかも無かりしが故なれば、任の中貪りて是等が報い好くするを、報いはいさゝかも

得せねど任中廉潔なりしとは、孰れに優るべき、是等を比べて其の辨別を思はしめんが爲めなり、斯く貧しきは任中の廉潔なりしが故にて、其の故に國人も斯く別れを惜む由を思はせたるなれど、あらはなるときは、他の受領の不潔を示すが如くなるべきが故に、此の記者の女の、貫之ぬしが貧しきを見て、人並みなる報いはせずとも、いさゝかなるわざはせさせんを、其れだにし難きばかりなるをかたはら痛みて書ける樣に書きなしたるなり、斯くいふは樣なれど、心地すといふ二つの詞にしるければなり、されば世の受領は皆富みて歸るを貫之ぬし一人貧しきを愚なりと嘲けり笑ひたるが樣に書きなされたるなり。かへす〴〵、いかにしてか斯く倒語の妙を得られたりけんといとあやしきまでに覺ゆるや、見ん人こゝを善く味ひて、此の記の至妙をも知り自らが進みともすべきなり。此の一段ばかりにも、此のぬしが任中の廉潔善政思ひ遣るべし。

雪のはだへは氷のやいば
　つゆのいのちのすてどころ」
お月さまさへ泥田の水に
　おちてゆくよのうきしづみ」
三日月さん痩た筈だよありや病あがり
　それでないたかほとゝぎす」（小松帶刀）

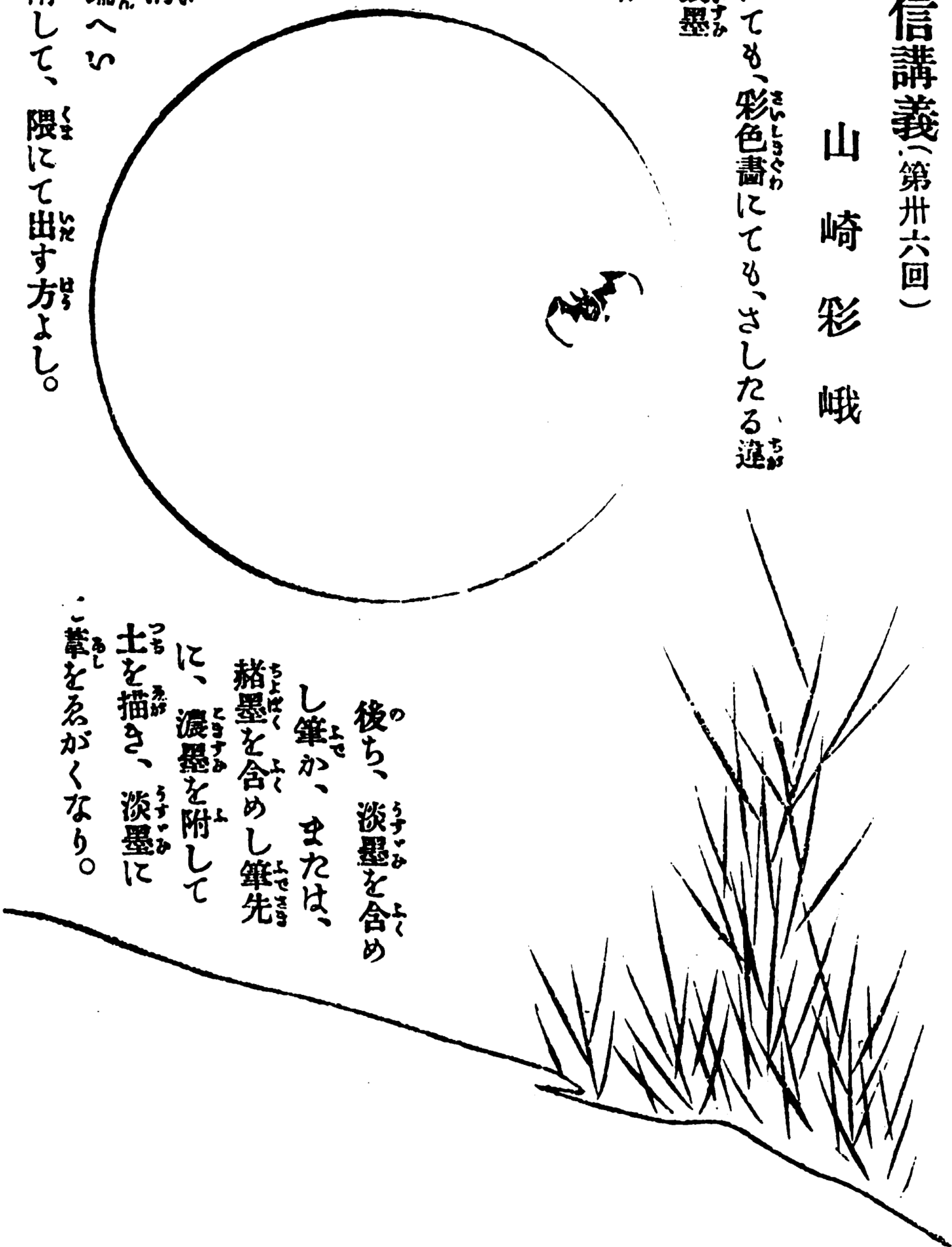
龍田川無理に渡れば紅葉がちるし
　渡らにや聽かれぬ鹿の聲（久坂玄瑞）

朝顏のたのむまがきにふりはなされて
　うつむきや涙の露がちる（高杉晉作）

和畫通信講義（第卅六回）

山崎彩峨

蝙蝠は、墨畫にても、彩色畫にても、さしたる違ひなし、先づ、濃墨にて、蝙蝠をゑがき、それより月をゑがくなるが、その月は、墨畫なれば、淡墨、彩色なれば、淡き藍色にて、ゑがくなり、尤も筆を清むる水にて濕し、筆端へいづれの色にても附して、隈にて出す方よし。



後ち、淡墨を含めし筆か、または、赭墨を含めし筆先に、濃墨を附して土を描き、淡墨にて葦をゑがくなり。



慈母と愛兒（承前）

出生後の心づくし

山形縣女子師範學校長　津田元德

前數回を重ねて、胎内中の心得、出生時の注意を述べたれば、進んで出生後の最大注意を述ぶべし。

予は曩きに教育界なる雜誌第一卷第十二號に於て、人生の最大危期なる題目にて、人生の最大危期は、生後一ヶ月内にある事を論述せり、其詳細は茲に繰りかへす能はざるも、實に、恐れても恐るべく、注意の上にも注意を重ぬべきは、此生後三十日間にあるのみ、希くは、世の母たる者、其身の爲に、將た其愛兒の爲に、將た其家族の幸福の爲に、其國家の隆盛の爲に、此三十日間に於ける母と兒との發育法を研究し、進みては一ヶ年内に於ける幼兒の教育法につき深き研究をなしたまはん事を、予は不肖ながら年來研究せし一部を幼兒心理學と名けて、此頃出版すべし。今其注意し研究すべき最大項目を擧ぐれば、實に左の三に過ぎざるべし。

一、生後三十日間産婦の安靜と謹愼

二、同日間生兒の養育法

三、生後一年間生兒の健康

而して、此三者中最も須要なるは、衣食住に關する事項なるべし、されば左に二三の事項を詳述すべし。

●●●●産婦の食物――或國にては、力餅と稱して、出産後直に餅を與ふるあり、ある國にては、そばなどを與へて得々たるあり、皆何れも、危險此上もなき事と云ふべし。腹部膨大して爲に壓しつけられ居たりし胃腸は、俄かに擴張したる折柄なれば、特に和らかく、且滋養ある食物を撰ばでやは、されど亦、粥と鹽とのみ與ふる如き習慣も決して好ましからず、其要は、前にも述べたる如き柔かにして滋養ある飲食物普通の物は、産婦の好みに應じて、決して忌み除くるに及ばざるべし。

●●●●衣服の着替――出産時用ゐたる汗じみたる衣服を永く着せしむるは、決して好ましき事にあらず、されど、亦輕忽に着替たる爲、風を引き、産蓐熱とて、いと恐るべき病など惹き起す事もあれば、暖かくして、心爽かなる日を撰み、室内を暖めたる上、徐かに之を爲さしむべし。

●●●●産室の安靜――血液の循環、其度を失したる際なれば、産室は、時に安靜、爽快ならしめ、産婦をして平穩快活に起臥せしむるを要す、要なき來訪婦人の喧々に心を加へ、瑣々たる家事に心を痛ましむるなど、頗ぶる害毒を及ぼすべし、恐るべき産蓐熱は、此等些々たる事より起るべきなり。

●●●●生兒の體温――ローゲル氏の檢査によれば初生兒の體温は、平均攝氏三十七度二分五厘にして、一時間以内に三十六度に降り、時としては、更に三十五度五分の低きに降ることあり、其翌日に至れば、再び三十七度餘の體温に復し、其後七歲に

至るまでは、大人の體温に比すれば、概して、攝氏二分二厘乃至五分の高温を保つと云ふ。

此體温の變化につきては、實に非常の注意を要せざるべからず、胎兒の胎内にあるや、一定の體温に生育し、外氣の浸入、寒暖の變化一も之を侵すなきのみならず、温和比類なき包被の中に、二百八十日を經過し、一朝忽ち出産てふ運命に接するや、假令自然は多少の準備を爲せるにせよ、氣候飲食の激變、光音寒暖の波瀾は、恰も吾人が硝烟彈雨の間に出沒すると同じく、其生命を全うする事の不可思議なるに於てをや、宜なり、彼の生兒の最大危期の此際にある事や。（未完）

富者を健康ならしむべき唯一目的は斷えず運動と節制とを行うて恰も貧者の如く生活せしむるに在り　（テムプル）

冬の衛生（承前）

中外醫事新報 治療新報記者　尼子四郎

氣道の急性加答兒に就ては既に本誌の前々號并に前號の兩號に亘りて略ぼ述へ盡したれば之れより順序として其慢性加答兒に就て述べむとす。されども慢性の加答兒は冬季に特に多きものにあらずして寧ろこの季に至れば增惡するものなり。問題と聊か矛盾するの慊ひあるが故に一言茲に辨し置くなり。

既に急性加答兒の條下に述べたるが如く、急性の喉頭并に氣管支加答兒は寒冒又は其他の原因よりして起るものにして多くは數日乃至數週にして治癒し、間々新來の原因により再發することあれども、直に慢性の加答兒に陷ることは稀なるもの

なり。然れども急性加答兒を惹き起す處の原因反復襲來し加ふるに其度の強きときは遂に慢性の加答兒を起し、而して既に慢性の加答兒を起すときは急性の加答兒の如く速かに治癒せざるのみならず夏季に至りても全治せざるものなり。今試に慢性の加答兒を起す有害物と急性の加答兒を起す有害とを比較するに甲には概して化學的若くは器械的のもの多く、而かも此等の有害物は持續的に作用するものなるが故に加答兒は殆んど治癒するの機會を得ざるを常とす。例之ば化學的藥品を使用する工場の職工、磨者、麵包燒者、石匠、炭坑工夫等の常に慢性氣管支加答兒を患ひ數月數年を經過するも遂に治癒せざるが如し。

慢性氣管支加答兒の原因は固よりこれのみにあらずて斯の如き有害物に遭遇せざる人にして重き慢性氣管支加答兒に罹るもの屢々之れあり。結核、心臟病、腎臟病、脉管病、貧血等も亦慢性氣道加答兒の原因となるものにして此等の場合に於ては慢性加答兒は其併發症又は續發症として顯はるるものなり。

慢性氣管支加答兒(慢性喉頭加答兒より述べき順序なれども冗長に失するが故に省略す)を細かく區別すれば多種あれども、其中緊要のものを擧ぐれば乾性加答兒及び化膿性加答兒の二種にして、乾性加答兒には甚だ煩はしき咳息あり、喀痰は粘稠にして其量甚だ少なく而して此症は斯の如く咳息劇しきが故に肺臟の膨脹(肺氣腫)を來し易く、又此症に於ては屢々喘息樣發作の來ることあり、之れに反し化膿性加答兒には咳息あれども乾性加答兒に於けるが如く煩はしからず、喀痰は稀薄にして膿狀を呈し且つその量甚だ多し。試みに此喀痰を「コップ」に盛りて靜置するときは、器底に沈渣を生し上部は透明となるなり。此

症は屢々漸次に氣管支の擴張を起すことあり。

斯の如く慢性氣管支加答兒は時として肺氣腫、氣管支擴張等の續發症を起すことあり。而して既に續發症を起すときは夫れより又心臟右室の擴張を續發するものなり（其發生の理由并に之れより起る變化は冗長に失するが故略して述べざるべし）

其他慢性氣管支加答兒に續發する疾病にして緊要なるものは腐敗性の氣管支加答兒なり、若し慢性氣管支加答兒の此症に陷るときは、喀痰の性狀一變して腐敗性の惡臭を放ち、その量亦著しく増加す、試みに之れを「コップ」に盛りて靜置するときは希薄、稍濃厚及び濃厚の三層に分る、其他屢々發熱し既に發熱し居たるものに在てはその熱一層昇騰し、胸部の疼痛及び咳息等も亦一層增劇するを常とす、而して斯の如く慢性氣管支炎の腐敗性氣管支加答兒に移行する所以は空氣中に瀰蔓する處の腐敗を起す黴菌の吸氣に混じて氣管支に到り、茲に附着して蕃殖するが故なれども、氣管支に擴張あるときはその内に喀痰滯積し大に黴菌の蕃殖を助くるが故なり、この腐敗性氣管支加答兒は或は輕快し或は增惡して荏苒治癒に至らず、其間に時として頗る危險の疾病を起すことあり、そは即ち肺炎にして此肺炎は甚だ肺壞疽に陷り易く、若し肺壞疽に陷るときは肺臟の組織は大に破壞せられ、患者多くは死亡するを常とす。

然れども斯の如き危險の續發症は固より必發のものにあらず、西洋の諺に「長く咳嗽するものは久しく生存す」と言ふことあり是亦固より總ての場合に適合するものにあらずと雖も、能く慢性氣管支加答兒の危險の度を言ひ顯はしたるものにして、實にこの諺の如く外圍の關係にして不良ならざるときは患者は能く殘生平均命數（保險會社杯に能く用ゆる命數計算法にして例之は三十歳の者の殘生平均命數に三十四年餘即ち今後三十四年餘の間生なすと云ふが如し）を終る迄

で生存するものにして、加之ならず他の病氣に續發せざる處の所謂原發性慢性氣管支加答兒にして尙は未だ餘症を起さゞるものは全治すること屢々之れあり（但し緊要の注意を等に附するときは再發すること勿論なり）、而して其心臟病、腎臟病、脉管病等に續發するものに至ては治不治は一に此等原病の治不治に關係するが故に玆に述ぶべき限りにあらず。

余は之れより慢性氣管支加答兒に對する手當法を述べむと欲すれども元來此症の手當法はその續發症殊に肺氣腫及び氣管支擴張に關係する處多きを以て、理解し易からしめむが爲に先づ此兩續發症のことを略述すべし。

肺氣腫は甚だ多き疾病にして既に述べたる如く本症慢性氣管支加答兒に續發するものなれども其他種々の原因よりも發するものにして、彼の勞働者、擲夫、喇叭卒、玻璃吹者に發するものは一の職業病と見做すべきものなり、其他屢々重き百日咳或は劇しき喘息發作の後に發することあり。而して慢性氣管支加答兒あれば如何にして肺氣腫を發するかの所以を簡略に説明せむに、細小氣管支の粘膜腫脹してその内腔狹小となるが故に吸氣の際肺臟強く擴張せざれば所要の空氣を吸ひ込むを得ず、又慢性氣管支加答兒存在するときは肺胞の力減ずるが故に強く收縮せざれば既に吸込みたる空氣を外部に呼出するを得ず、斯の如く肺胞は吸氣時にも又呼氣時にも非常に力を勞するが故に、遂に、その力即ち彈力を失ひ、恰も古き護謨帶狀となるを以て肺臟は膨大して吸氣時の狀を呈するに至る、之れ即ち肺氣腫なり、然れども肺氣腫は常に此度に止まらずして更に進行することあり。

氣管支擴張も慢性氣管支加答兒に續發する一症にして多くは圓壔狀を呈す（其他に尙ほ囊狀の氣管支擴張症あれども肺萎縮又は徑

結核に續發するものにして本病となるが故に省略す）而してその發生の理を述ぶれば慢性の加答兒あるときは氣管支壁は從順となり、咳嗽には氣壓亢進するが故に其都度漸次に擴張せられ、加ふるに分泌物漸次其中に滯積して益益氣管支を壓排するが故に遂に氣管の擴張を起すものなり。

（以下次項）

挿花の話（つゞき）

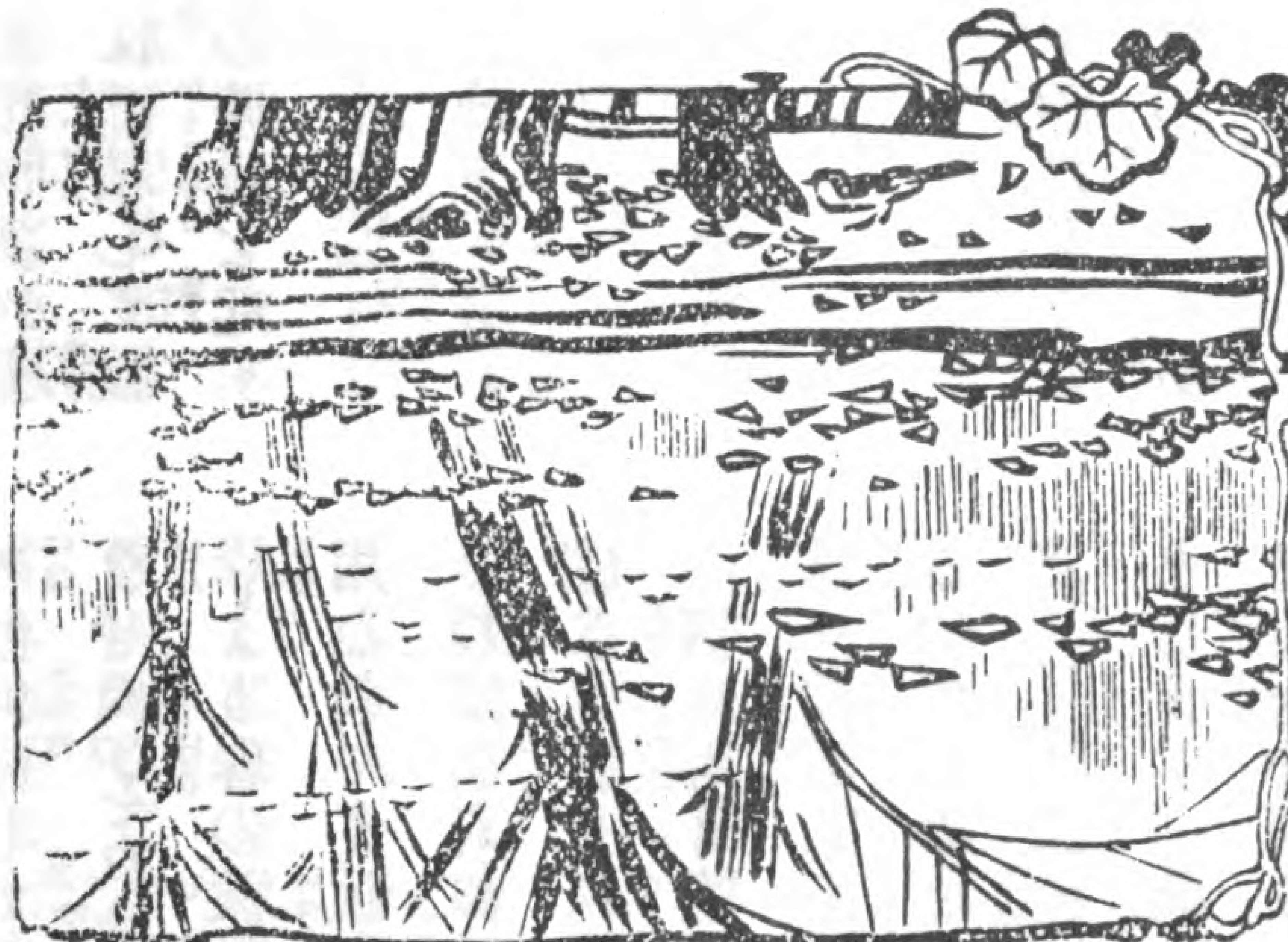
小畑いく子

馬耳蘭

菊もうつろひ山茶花もちり初めます頃になりましては、挿花の材料もまことに冬がれの淋しく不自由を感ずるものであります。かやうな時は所謂歳寒彰松の慣といふわけでもありませぬが、自然常盤ものを用ゆる樣になるのであります、就中馬耳蘭、金雀子などは最此節が挿しよき時でありまます。此馬耳蘭は春より夏にかけては葉が柔きため如何にしてもよわり易く、勢ひのよき形は出來ませぬ。それ故或地方などにては、馬耳蘭は秋の彼岸より春の彼岸までは稽古に用ひ其他はなるべく用ゐぬやう致して居る處もあります。それ故夏挿けねばならぬ時は是非古葉を撰び、若葉を避けねばなりませぬ。

扨此馬耳蘭には葉組の法があります、葉組とは一枚若しくば三枚が互に相對し抱き合ふ樣にするのであります。まづ五枚の葉を挿けやうと思へば「一」に二枚「二」に二枚「三」に一枚總て三株五枚とします、此一枚葉は他の組葉とは全く別になりて相對せぬやうに致しませぬと、三枚組の觀を呈する恐れがあります。七枚ならば「一」に三枚「二」「三」に二枚づゝ、これも三株、九枚ならば「一」

「二」各二枚「三」二枚「奥」一枚「心」、二枚といふやうに凡て五株とし、尤も一枚葉又は三枚組は必ずしも前に申た通りに挿さねばならぬわけではなく、便宜により或は「三」或は「二」に用ゐるも差支はありませぬ。また十一枚は三枚組一つ二枚組四つ都合五株とし、十三枚は二枚組六つ一枚葉づゝにて都合七株、十五枚ならば三枚組一つ二枚組六つ都合七株、十七枚十九枚と枚數は常に奇數に、株數も亦或は一株に三枚組を用ゐ或は一枚葉を配合して、七株、九抹、十一株と奇數の株數に挿すのであります、併し流義によりては此規則を用ゐ



ず、例へば九枚挿に三枚組三株、十一枚挿に三枚組三株二枚組一株都合四株など便宜によりて挿すのも少くない樣でありますが、是は強てさう挿してはならぬと申す原則はありませぬが、難をすて易につくので技術上より余り賞めたものではない事と存じます、其上是は天然に背きて居ると私共の流義では申して居ります。

馬耳蘭の土中より出て居る處を見ますとよくわかります、大方二枚づゝ向き合で生じて居ります、或は古葉の根に新らしき二枚出たのなどもあります、三枚組は其形を寫したのであります。

又寡葉俗に後家葉と申して一つ離れて生ずるのもありますから一葉を一株に數ふるのは此理であると申し傳へて居りますが、是れは餘りに理屈に傾いた天然論でありますけれど、最も複雜な挿方は恐く此方が第一で、ある點から私は是れを採用するのであります。

馬耳蘭本花 七葉



挿方は普通の草花は「二」より挿すのでありますがこれは「三」をまづ挿し置く方「根」のしまり方が宜しくまた、廣き葉でありますから「一」「二」「三」「奥」「心」などのけじめが判然せぬから、葉の大小の組合せ並に其配合に注意せねばなりませぬ、それ故豫め自然に「一」「二」「三」に適當なる樣に出來たるを撰ぶ事が必要で、東京の挿花會に多く見る樣に大きな葉を鋏にて少さく切斷するなどは最もあしき習慣で心ある者は眉をひそむる所であります。

凡て初學の間は葉數少き程挿し易き樣でありますが漸く熟するにつれて却て十一葉か十三、十五葉などの方がよき形が出來ます、と申すのは五葉七葉九葉などになりますと葉の數は少くして「一」「二」「三」心奥など各組葉を以て兼帯する樣に挿す事に氣がつく樣になりて、尋常一樣の直な葉のみにて滿足が出來なくなります、



そこで夫々自己の經驗より葉の大小は勿論或は片殺のした長刀なりの葉だの、卷き込んだ葉だの夫れ〳〵塲合に應じて撰擇の必要があります、併し東京の如き地では思ふにまかせぬ事が多く、其上葉が短かくて十五葉以上も挿ずには大骨折でありますから是非庭園内に培養して置きたきものであります。

殊にまた他のものと異りて、細き莖に廣き葉でありますから隨分とめ難く又風を受けてくづれ易きものでありますから、配木の大小に注意する事が肝要であります。先づ九本なり十一本なり挿んと思ふだけの莖にて塡る丈けの配木の大さを撰び置かねばなりませぬ。又挿方の處に述べて置きました矯かへしをよく致しませぬと中々根がそろはずとまりかねるものであります。葉先きの矯方も大切ではありますが、これも余り矯め過ぎますと、誠に賤げに見ゆるものでありますからよく〳〵注意してあまり作意に落ちぬやう、根の締りと「一」「二」「三」などの區別の判然する樣、氣品高く何げなく挿すやうにありたいのであります。

水揚を申しても別にはありませぬが、切りて直ぐよりも先づ切り取りて葉の掃除をすまし葉もと即ち莖の境より一寸ほど上の處を内に卷きこみて、ゆるく結び桶或は竹筒の如き深き水入れの中に挿し入れて二三日ほど過したる後挿す方大に葉組の都合よろしいのであります、是は本花は勿論、低ながしなどに最よく適して居ります、高中ながしも挿しますが余り面白くありませぬ。

家庭俳句（五）

内田茂文

◎御次男は馬が上手で雪見かな　太祇

是は昔の旗本の次男の擧動を寫したものであるが、旗本の次男と言へば惰者の惡戯者で始末に了へぬ親泣かせの厄介者が多かつたから大概の者は敬して遠ざけて居た、此句御次男と云ふ御の字があるを見れば餘程上流社界の次男にても有う、常に遠乘など試つて自慢の馬術を今日こそはと家人の止むるをも聞かず態々馬で雪見に

出掛ける我儘者の光景見るが如く「御」の字上流社會を示すと同時に幾分か作者の冷嘲の意を灰めかしたもので、又頗る好ましからぬ家庭を聯想される、啻に是れ昔の旗本をのみ限らない、現時の社會にも亦甚だ是に似た家庭が有る。

◎粗末には水も遣はず寒の内　　風斎

言ふまでもなく是れ庖厨に於ける若くは洗濯とか總て勝手向きに於ける句である、寒さの時は一釣瓶の水を汲込むにも炊事方の勞は思ひやられる、其局に當る妻君なり若しくは下婢なり下男なりは一柄子の水も粗末にはせぬ、現時は水道の設けられて自由に流し元へ水を呼ぶ事が出來るが、夫さへ人口割とかで遣ふ水の多寡に依りて課せらるゝ税金の多少があると言へば益遣ひ水の粗末にならぬを感ずるです。

裁縫

横濱高等女學校講師　中村うめ子

男襦袢の裁方

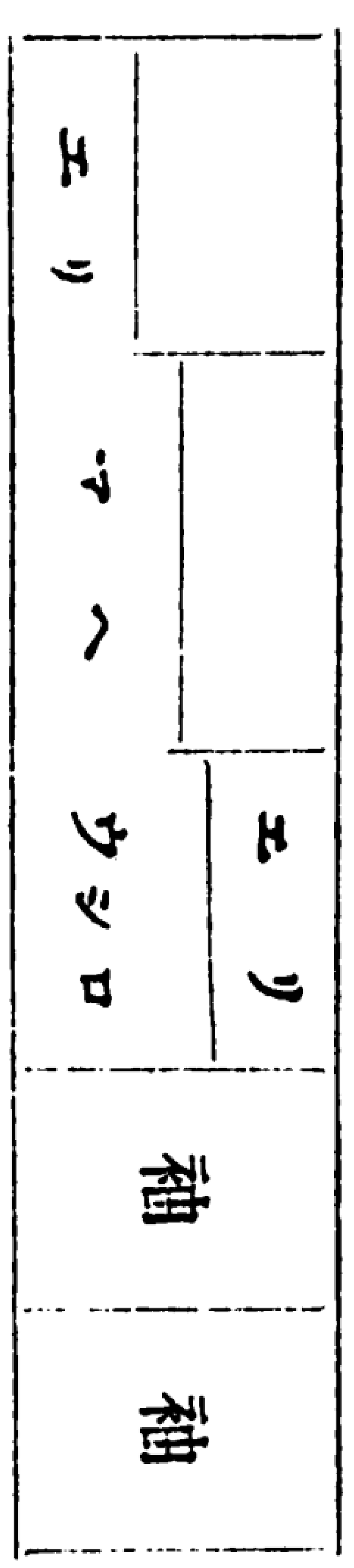
(巾一尺三寸の布を以て)

裁切寸法

●袖丈　一尺三寸　　身丈　二尺一寸

●衿肩　二寸四分　　後巾　八寸七分

●前巾　六寸五分　　衿巾　四寸三分



13,×4=52,　21,×3=63,　52,+63,=〃115′用布

衿の眞中へ足し切を入れます、

積方解

袖丈の四倍と身の丈の三倍とを加へまして、用布を知られます。

一つ身の裁方

是迄襦袢の事ばかり申まして、襦袢の仕度は大分出來ましたから、是から上衣のお話を致しませう。最初一つ身から申ませう。

裁切寸法

●袖丈　一尺六寸　袖巾　六寸　身丈
二尺五寸　前巾　四寸七分五厘
●衽丈　二尺四寸　衽巾　三寸五分
●裾下　八寸　衿肩　一寸　衿巾　一
寸三分

常巾一丈一尺の布を以て、一つ身の裁方

16,×4=64,　110,−64,=46,　46,÷2,=23,身丈

裁方解

一丈一尺の中から、六尺四寸裁ちまして、其片端から、巾六寸裁ちまして兩袖と致します、殘りの巾狹き方は圖の樣に切りまして、衿衽と致します次に殘りの四尺六寸を竪に二つに折まして、又横に二つに折りまして、輪の處を一寸切りまして、衿肩と致します、次に前身頃にあります方を、半巾に裁ちましたらばよろしいのであります。

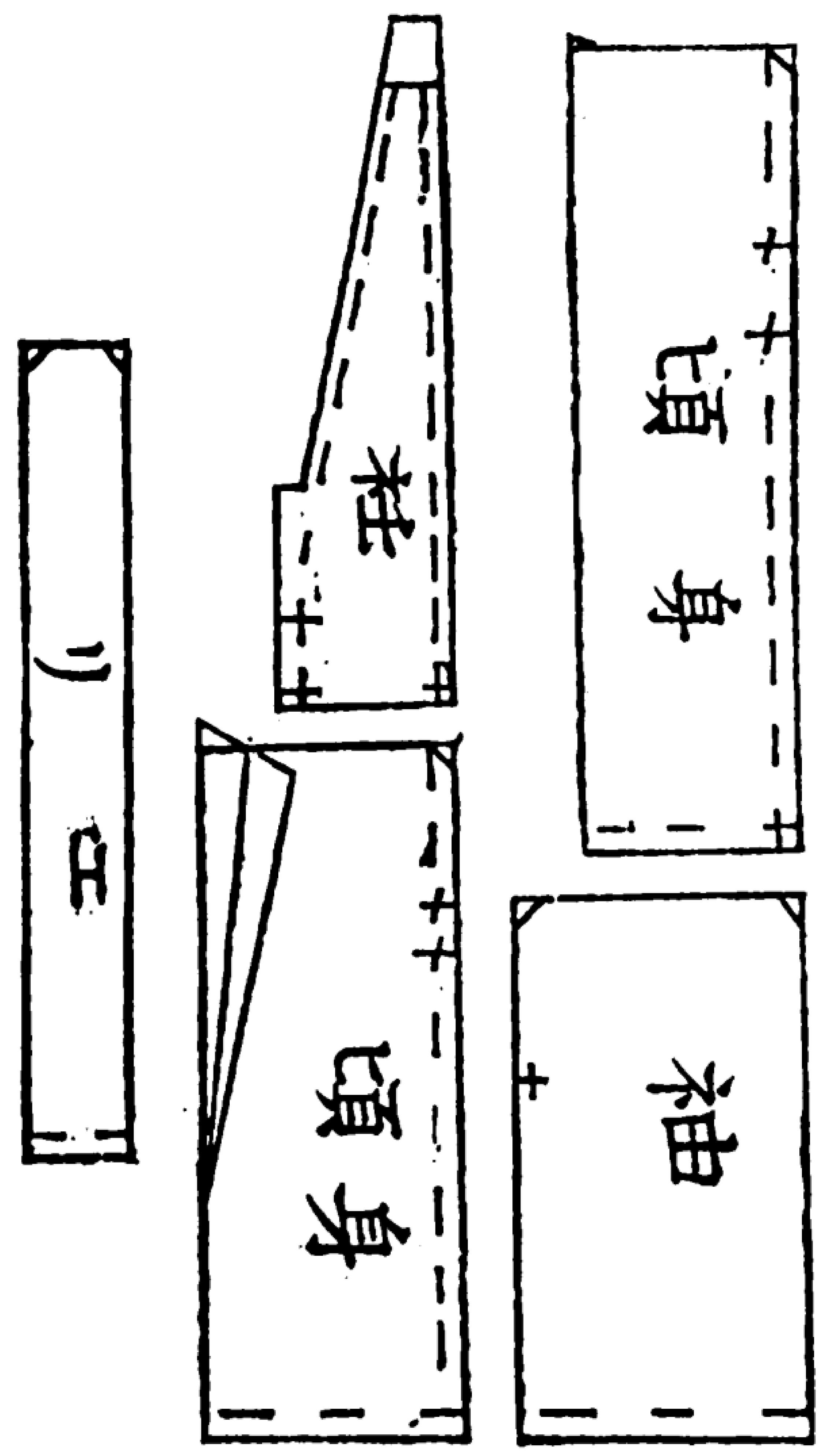
積り方解

總尺から袖丈の四倍を減じまして、二で分りますれば身の丈を得にのであります。

篦の仕方

篦の仕方は話しばかりでは管々しくなりまして、却て分り惡う御座いますから、圖でお目にかけ

ませう。



惣菜種々

石井泰次郎

惣菜三百種といふ小冊子が此頃あらはれました、著者は井上善兵衛氏です。治庖會日本料理法といふ小本も又近く出版になりました著者は赤堀峯吉氏です。共に惣菜料理としては、高尚すぎた物だといふやうな評判です、ところで私は其高尚すぎて居る所をずつと略して、筆に中丁刀の役をいひつけまして、墨に大根、胡蘿蔔の代りを勤めさせまして、硯のまな板の上にひとつ惣菜の惣菜たるべき科目を硯蓋の上に（硯蓋など〻は少々高いかも知れねど）ずつと並べて見ませう。

第一　ほうれんさうの御汁
並に　第二　第三　拵方

ほうれん草は、菠薐草とかきます品で、汁につかひますには、葉を水でよく〳〵あらひまして、切方をつけて汁に入れて煮ます、汁はおまき味噌をすりばちですつて、みそこし笊でこして汁にたてるので、水と味噌の合せ方は、好み次第に出來ますから、そこで炭火に其汁を鍋に入れてかけて煮たてます、煮えた所へ、菠薐草の切つたのを入れ

るのです、扨てからいふと、誰れでも知つて居るやうに見えますが、汁のたてやうも手なるれば、よろしいが、手なれませんと濃すぎたり、淵かつたり、煮すごしたり、煮へたりなかつたりします。ところで菠薐草の用ひ方は、莖の所の赤いのをもませて入れるのです。こゝで其汁の出來たのを椀にもつて出します、其出し方と盛方は、左の通り、切方はざく〳〵切がよい。

椀をよごれぬやうに注意して折敷（今俗にゼンといふ）に載せて出します、飯とならべても、又あとからも出します。

椀に盛やうは、椀を左の手に持て、鍋の緣よりさげて、右の手に杓子を以てすくひ入れるのです、此汁の採合方は

汁　菠薐草　きのめ

木のめは山椒の實を用ひ、又葉を用ひます、あるひは柚子をへぎても入れます。（季節次第なり）

汁の一つの拵方を示しますれば、煮漉といふのがあります。それは味噌を水に浸しましたのを鍋に入れて、又水をましまして、木杓子でくづしまして、其まゝ煮わけましてから、馬尾篩といひまして毛ぶるひが有ます、それを別の鍋でも器へでもかけて置まして、其上から煮た汁をざつとわけて、漉します、煮て漉しますから煮漉といひます、是も一種の拵方で、一寸入用です、やつて御らんなさい。

又一つの拵方をいひますと、豆腐を布で包んでかたくしばつて、白味噌、赤味噌を合せて摺ませまして、馬尾篩でもつて漉します、漉しやうは馬尾篩のうらにすつたのを置て木杓子で一度は平らに一度はたてゝこいてこすのです、下へ皿などうけ

ておきます、汁には水をすこしにして、濃くたてるのです。

同　くひやう

この汁をたべます手つゞきは、まづ飯をたべましてから次で、右にはしを持て居ながら左の手で汁椀を取りて、右の手に持て口によせまして、箸で實ばかりをくふのがくひ方です。汁をすふのはむづかしい事としてありますが、ざく〳〵しかたなしに汁もすふやうなわけです。一寸式にはおはづれて居ります其わけは、

寺でくふくふざく〳〵の菜汁かな。

といふ句でも御わかりでありませう。

この頃世間で材料をくはしく計算して書き付けますのは、私の發明で、即ち石非式教授法ですから皆さん能く御記臆をねがひます。



保育に就て

醫學博士　三嶋通良君　演說

左に記せるは本月三日同氣倶樂部に於て開會したる保育會の席上三島博士の演說せられたるを速記したるものなり今同會の許を得て本欄に掲載することゝせり

今日まで子供に就いての問題といふものは兎角後廻しにされて居りました。然るに私は自分が子供のことを研究するから酷く子供の肩を持つ譯

ではございませぬけれども、豫て自分は斯ういふ一語を唱へて居るのであります。即ち『何人も小兒なる時期を經過せずして大人となる者無し』、子供の時期を經ずして、おとなになるといふことは到底出來得べからざることであります。而して其子供の時に受けた所の總ての利害といふものは、おとなになッてから受けたものよりは餘程長い間、且つ非常に割合に大きく關係するものである。是は敢て身體上のことばかりで無く、精神上に於ても矢張子供の時に受けた利害は將來に至るまで非常に感ずるものである、所謂三ッ子の魂百までもといふやうなもので、子供の時に惡るい感化を受ければそれは殆んど生涯拔くべからざるものになッて、終ふ。又身體の上でも極幼少の時分に適當に育てぬと、其爲めに所謂育て損ッて、大人となつた後でも自然或は身體が弱くなるか、又命が縮むか始終病身で暮らすかといふやうに、生涯其害を受けて居るといふことになる。それから又此子供の成長如何と云ふ問題は、一體一個人の身に取ッての關係ばかりではございませぬ、子供が一人生れるのは家に取つての喜びのみならず國に取ッても喜ぶべきであります。それでありますから之が丈夫に育てば愈々親は滿足する、一日も早く大きくしたいといふ考を持ッて居る、併しそれは其人に取ッて喜ぶべきことであるのみならず、國に取つて又喜ぶべきことでありますから、子供の死に方が非常に多いといふと、是れ亦家に取つて悲しむべきことのみならず國に取つても、損害になるのです。極端から申しますと、年を取つた人が死にますのは是は當り前の話で、又國に取つて餘り損もございませぬ、即ち其人が其人だけの天職を尽し國の爲めに働き、夫々の職分を尽

してから死んで呉れますのですから、既に年老て物の役に立たなくなつたからは成るべく一日も早くお暇乞をして往つてもらつた方が國の方では都合が好いのです。

所が子供は之に反してまるで固定資本のやうなもので、生れるから育て擧げるまでの間唯資本を注込んで居るばかりである。即ち假りに極大體の計算をして見るといふと、子供一人育てますのに、例へば、親の乳で、育て、或は牛乳、或は乳母を置いて育てます、其方法はまた事情と身分とに依つて多少違ひはありますが、それを平均して私の考には、丁度生れてから滿一年まで育てるのに、凡そ百圓掛る、さうすると、二年になればそれが增して二百圓マア極勘定善く百圓づゝ掛ると見て、此子供が幾つになつて始めてどうか斯うか自分の手で飯を食ふやうになるかといふと、どんなに致しましても十五歳に成らなければ自分で食ふといふことは出來ませぬ。さう致しますと先づチヨツト一人の人間が獨りで食べるやうになるまでには元金のみで千五百圓掛る、そこで三年にしろ五年にしろ入れただけの元金働かなければ——子供が死ぬとすれば、詰り資本を入れたのみで利益を見ずに損失して仕舞ふのと同じでございます。故に子供が餘計死ぬ程國は貧乏をするといふことになるのです。

マアさういふ風の關係で色々の點からして子供のことを考へて見ますると、中々子供の問題といふものは重大のことになつて參ります。又數の上から申しましても、例へば我日本國が唯今の所で先づ四千五百萬程人口がございます。其中にドノ位子供があると云ふに五年までの者が凡五百四十萬十年までが四百六十萬十五年までが四百四十

御文注の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

宮中御歌所寄人中邨秋香著
華族女學校講師小野鷲堂書

新編書簡文例

木版半紙摺高尚優美本定價六拾錢郵稅六錢

新編女子書簡文例

木版半紙摺高尚優美本定價六拾錢郵稅六錢

●書簡の文體は直に其人の品位を上下するに足るべく其人の智識を推測し得べきものなり斯の如く交際上貴重のものなれば一日も苟もすべからざるは論を俟たず本書の文例は現代の文豪中邨先生の腦漿より迸出せしもの一言一句津々たる趣味あり擬古に陷らず流俗に同せず繁簡宜しきを得眞に今日書簡文の好模範たり書は筆硯界の巨擘鷲堂先生の手腕になりしもの習字の兎鑑として上乘の書なり曩に新編女子書簡文例發刊以來女子大學校初め各女學校の參考書或は敎科に採用され異數の世評を得たるは玆に贅せず今書新に男子文用の例を發賣す世の文筆に志あるの士は座右に一本を供せられよ

◎發兌元 東京市日本橋區箔屋町 前川文榮閣◎

●女生徒募集

授業開始入所當日

當女子部は女子に簿記法を敎授し家計整理又職業としては計算事務賴たらしむる外○華族紳士商家奥員家計整理員○女學校其他出敎授向女子部計算事務員紹介保證の依○に應ず

私立
銀行事務員養成所女子部

東京市神田區裏猿町四番地

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

華族女學校編纂

國語假字遣ひ一覽

壹部定價拾貳錢
郵送料金貳錢
郵券代用一割増

從來國語の假字遣ひを敎ふるに多くは、たゞ五十音の順次のみによりてその語を配列するを、例とせるが、本書は、まづ、その語原近きもの、意義通へるものを一括して、之を類推せしめむと計り、成るべく記憶の勞力を省かしめんとせり。本社今回華族女學校の御下附を得て、世に公にす、國語研修者、文學者には座右必携の要書なり。

發行所 東京京橋區築地二 電話新橋二六九三 株式會社國光社出版部

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

東京高等師範學校附屬小學校編纂

茗溪叢書

學校生活

東京高等師範學校附屬小學校に於ける訓練に關する研究報告

壹部定價金貳拾錢郵税四錢

本書は東京高等師範學校に於て多年實施せられし經驗と佐々木訓導の研究報告とに基きて編述せられたるものなり學校生活を系統的に研究せんとするの士は一讀せざるべからず

發行所 東京本郷元町二丁目 茗溪會

發賣元 東京築地二 電新二六九三 國光社出版部

●注意● 茗溪會員及び同會の證明ある人には定價の一割五分引

萬ですから子供が千四百四十萬人ある。それで學校に這入ッて居る者はドノ位あるといふに凡そ五百萬ある、さうすると先づ四分の一以上は小兒でございます。一國を成して居る所の國民の四分の一以上ある所の子供といふものに就いての研究が行届かぬであるといふ爲めに受けし所の損害は餘程澤山のもので詰り是から先き國を立派にするのも、或は弱くするのも、國民の身體を丈夫にするのもせぬも殆んど子供の時からのやり方次第にあると謂ッて宜しい。さういふ風に考へますと子供の問題を是まで兎角世間で等閑にして、——成程小學校の教員或は幼稚園の褓姆といふ者は直接に自分の職務として毎日子供を取扱ひますから、子供の事柄を幾らか知ッても居る、又研究もしませうが、——其他の人は母親が自分の子を育てる必要から少し子供のことを注意するといふ位のものであります。右を除て社會の上流に位する學者、政治家、經濟學者、或は醫學者、或は法律學者等の中に——先きに立ッて世の中を警められなければならぬやうな人達が、子供のことになるとマルで之を度外視して一向之に就いて考へて居らない。さういふことを私は常に殘念に心得て居ります。自分は元來子供が好きといふ所から小兒科を研究する心になり、又子供の衞生を研究することになッたのであります。詰り自分が子供を好きであるといふ所から、子供に就いて注意しまして色色の點から考へるのに、どうも世間が子供に對して餘り冷淡であるといふことを始終憤慨して居る。幸ひに近年に至りまして教育上に於ても兒童心理學のやうなことが段々發達して來ました、又近頃は醫學の方でも精神病學の内に教育病理學のやうなものが出來まして、質の惡い子供或は癖の

悪い子供などの心理病理を研究して、ドウしたら之を満足に育てる事が出來るかといふことを研究する學問が出來ました。又兒童研究に關する雜誌なども出來て來まして、大に子供に就いての問題も段々世の中に表はれるやうになりました。

又私自身の關係の方から申しますと豫て十年以來學校衛生の方に盡力して居ります、此學校衛生といふものは、高等の學校に在る成人した學生生徒に就いての關係といふことは誠に少ない。專ら幼稚園の幼兒小學校の兒童の健康保護が學校衛生の主眼となッて居る。そこへ丁度近頃になッて、皆様の御盡力で此囚人携帯乳兒保育會が出來まして是等の憐むべき子供が誠に冷かなる所から温かい所に移され、さうして殆んど本統の親でも出來ないくらゐの惠みある保育を受けるといふことになりましたのは、實にドウも子供に取ッて是くらゐ幸ひのことは無いと思ひます。

そこで此子供の育て方でございますが、教育上では育兒といふことゝ、保育といふことゝを二つに別けて大抵論じて居ります。育兒と申しますのは、子供のはごくみ方、即ち乳を呑ませること、或は食物の食べ方、着物の着せ方等の事柄を重もに育兒と云うて居ります。保育と申します方は重もに幼稚園などに於きまして、小さい子供を教育する仕方の方を保育と稱へます。併し是は言葉の用ゐ方でありまして文字の上から申しましても、どちらも殆んど同じ樣で是はマアそんなに區別を立てる程の違ひは無いと私は思ひます。ソンなら子供の育て方はと申しますと、今申すやうな風に身體の方の側、精神の方の側といふ風に引分けてえ論ずるのはドウして其當を得たものとは思はれませぬ。ドウしても子供といふものは物を食べさせ

る時にも物を教へて行くのであります、着物を着換させる時にも矢張物を教へて行く、寝る時も起る時も「じゝ」「ばゝ」の時も總て此世話をすると同時に之を教育して行かなければなりませぬ。それで矢張子供といふものゝ育て方に就いては、私は豫てより小兒教養法と名けて居る、教へ養ふといふことで、此教養の語も私が自儘に作ッた言葉ではありませぬ。昔から小兒教養といふ言葉は支那あたりにも用ひられてあります。教へることゝ養ふことゝを同時にやることであります。例へば昔は教育は子供が生れて何時から始めるものであるなど云ふ問題があッたので御坐ります。所が今日では子供は「おぎやー」と生れたならば、産れた其時から教育しなければならぬ。教育といふものは、其母の胎を離れて外へ出て外の空氣を吸ふたら其時からすべきものです。それをいつからするが善い悪いといふ議論をしたり、研究をしたりして居る内には教育の初めの段階といふものを失つて仕舞ふ。而して其時ドウいふ事から教育を始めるかと云ふと、「子供は生れると何の用があると言へば、昔から申します「百日の寝ッ子たれッ子」寝て居ることゝ大小便することより外に用は無い、後は何であると言へば乳を吞むこと、是はモウ子供がそこへ生れ出る、空氣を吸ふと同時に唇へ物を當てがひますと、それを吸ふ心持がある、即ちモウ生れながら乳を吸ふ——即ち自分で養ひを取ッてそれで活きて行くことをチヤンと知ッて生れて居る、其乳を附けるといふ時が即ち教育をする初めである。

通例我邦で今日やッて居ります生れたての赤子に對する處置は何であるといふと、先づ生れると從來あります「まくり」といふ物を哺ませる「ま

り」は大抵五香散といふやうな物で、重もなる性分を申しますと大黄のやうな下劑であります。其下劑を呑ませる譯は、親の胎内に居る内に色々不潔の物を呑んで居る、それを捨置くと即ち胎毒となッて後に子供が弱ッたり、或は腫物が出來たり、或は頸にぐりぐりが出來ることがある、之は皆胎毒である。「まくり」を澤山哺ませると胎毒が皆下ッて仕舞ッて子供が達者に育つ、故に昔から澤山「まくり」を哺ませるのが親の自慢でありました。事に依ると姑――年を取ッた姑は人に自慢を言ふです、今の嫁は學校で「まくり」などを哺ませてはいかぬなど丶教へられてありますが、私が剛情を張ッて到頭家では十服哺ませましたとか、十五服哺ませましたとか、是はお婆さん大氣焰であります。所が其「まくり」は左まで必要な物であらうか是非哺ませなければならぬものであらうかと云ふ

に、チッとも必要な物でも無く哺ませなければならぬものでもないのです。恐らく世の中に生とし活けるもので「おぎやー」と生れて直ぐに藥を哺ませなければならぬといふやうな、さういふ不都合千萬の者が生れて來る譯は無い。藥といふものは一方には毒である、毒でなければ藥にならない、其毒を生れながらにして直ぐに哺ませなければならぬといふやうな、不自由なことをして造物主が人間などを生れ出させる譯のものでない。それでさういふ風に「まくり」などを哺ませますと、詰り生れたこの極柔かなマルで吉野紙同様の胃や腸の所へ、強い下劑を哺ませるのですから必ず下痢する、其下劑も丁度良い具合に下れば宜いが、淺はかな人間の考へでは「かにばゞ」は胎毒であるから此が下れば後は何のこともないやうに思つて居ますけれども、さうでない、時とすると腹の中へ其

「まくり」が這入ッて、吉野紙のやうな薄い腸や胃をウンと引ッ掻廻はすから、爲に生れ立の子供が大下痢を始める、到頭其爲めに死んで仕舞ふなど云ふ場合がある。近頃は此「まくり」を哺ませるのを急弊だといふ考から、大黄舍利別を哺ませる産婆などがありますが、是も矢張下劑でありますから「まくり」と同じことで、大黄舍利別を飲ませると子供が其爲めに害を受ける、共に是等の物は不必要であります。それなら俗に云ふ胎毒「かにばば」といふものはドウすれば出るか、捨てゝおいても宜しいのですけれど親が乳を哺ませればそれで出るのです、親の乳が直ぐに出ない時はドウする、親の乳が出て來るまでソッとして措いて宜い、生れて直ぐ子供は乳を哺まぬで宜しい、殊に初産の方の乳の出るのは一日二日掛らぬと出て來ない、其間子供を干乾しにして宜しいか、此も差支無い、併し側で見て如何にもひどいやうに思つたら、沸し冷しの湯でも少し口へ入れて遣れば宜い、或はそれだけで氣が濟まぬと思つたら、極良い砂糖を混ぜて、甘くないやうにして口内を潤して遣ればそれだけで決して差支無い。其内に親の乳が出初める初めて出た乳は色が黄色で固まりのあるものであります、其乳を哺ませる。それも一度に澤山はいけませぬ、少しづゝ哺ませるのであります。此初めて出る親の乳には緩下劑の効能がありますから自然と子供の腹が下つて通じが附く、大人でも此産婦の出たての乳を小茶碗に一杯も飲めば必ず通じが附きます。さういふ風にチャンと乳の中に下劑が仕込んであるのです、決して他から下劑を持つて來て哺ませる必要はない。斯ういふ風に子供が生れるに付いては母の身體にそれだけの準備がある、成るたけ天然に逆らはぬやう

に、自然の途を取つて行きさへすれば子供といふものは育つて行く。ドウしても人間の力で天然の法則に逆らつて仕事をすることは出來ないのであります。醫者などは特にさうです。昔フーフエランドといふ醫哲が「醫者は自然の僕なり」といふことを言つて居る、醫者はネーチユアの僕――モウ天然といふもの丶力には決して逆らふことは出來ませぬ、療病の仕事でも病氣と戰ふといふことは出來ない、詰り病氣を增長させぬやうに、熱ければ冷たくし、冷たければ溫かにし、咽喉が渇いたら水を呑ませる、おなかが空たら物を食はせると云ふやうに、簡單に言へばそれだけの理窟であります。其天理天則を上手に應用するのが名醫です、殊に子供に付ては天然の法則に逆らつて育て丶行かうとしても、決しても育てられるものではありませぬ。此は西洋の學者がそう云ふばかりではございませぬ。東洋でも昔から朝鮮の趙活庵といふ醫師が言つた『小兒は草木の春に長ずる如し人巧を藉るべからず唯其飮食を謹むのみ』と云ふた通り、子供といふものは草木が丁度春に育つやうに、決して人間の敢果ない智惠でいぢつてはいけない、唯飮食を愼しめば宜しい。又『子供は野山の木の如く能く日を當て風を通じさへすれば育つ。』とも云つてある、斯ういふやうなものです。それで子供を育てる原則として、私は自分で『母のつとめ』を書いた時子供の丈夫に育つ御眞言といふものを書いた――おまじなひではありませぬが、おまじなひとして置けば忘れぬでせう。それは……『氣は附けよ手は附けるな』(注意して放任せよ)といふこと、それを朝起きて一遍づ丶おッかさんが唱へて居ると決して子供が弱くなる氣遣ひは無い、必ず丈夫に育ちます。世間には兎角子

供をいぢり殺すのが多い、氣を附けるのは宜しいが、手を附けていぢり殺して仕舞ふです、それが即ち中等社會以上に多くあるので、手が多い爲に却つて子供をいぢり殺して仕舞ふ。

私の調べによると日本の子供は丁度一誕生で歩くのが通例であります、生れて十三ヶ月日で歩くのが並であります男も女も……それが手の多い家の兒は十三ヶ月で歩かれぬで、十五ヶ月十六ヶ月甚だしきに至ると二年も掛るのである。何故といふに不斷抱いてばッかり居て手足を働かせない、始終「マア此方へお貸しなさい」「イヘ今度は私のお抱き申す番です、此方へお貸しなさい」と言うやうな工合に子供を抱きづめにする。それで子供の筋肉か少しも働かない、手足を動かして見ることも出來無い、時が來れば不思議のものでチヤンと歩き出すべき筈なのに、それを押へ附けて置くから歩かれぬのです、必ず手の多い家の子供は歩き方が遲い。さういふやうなものでありますから、成るたけ天然に逆らはぬやうにやつて行かねば却つて成長を害します。（未完）

婚姻論（つゞき）

法學士　天野弘一

扨て然らば何故に古代に於ては斯とも、同族が和集まりてそれ〳〵血統團體なる者を組織して居つたのであらうか。此事は大に研究するの價値があるのであります。恰も好し吾法科大學の穗積博士は昨年六月英文を以て「祖先教と日本の法律」と題する小冊子を著はされまして博士が卓拔なる識見を遠く外國の學界に發表せられたのであります。今私は一に此書に依つて此問題を解決致さうと存じます。

扨て此書物と第八頁から第十一頁にかけて論じてあることで御座りますが今其大體の趣旨を申上げて見ますれば。

現時に於ては人々が皆同じ目的の爲め相結合するに至つたのである。例へば政治上の主義綱領を同うする者は相集つて一の政黨を形作り宗旨信行を一にする者は相寄つて宗教上の團體を組成するが如き、其他共通の智識を取得せんが爲に諸種の學會を開設し、相互の利益を獲得せんが爲めに商事上の會社を設立するが如き一々枚擧するに遑なき程である。斯て此種の團體は日を追ふに從つて、益々增加し其勢力は文明の進步に伴うて、愈々盛なるに至り遂に世人をして、苟くも社會に世話する以上は志を全うする者相集つて以て共同の事業を營むに如くはないといふことを日々に覺らしむるのであります。

語を換へていへばたとひ國を異にし人種を異にする人々と雖苟くも主義を全うし目的を全うする以上は相依り相結つて以て共同の事業を營まんとの觀念は益々世人の腦裡に浸み込むで來るのであります。斯て人々自ら其利あるとを覺つて相互に結合するに至るのでありますから、此の如きを稱して自覺的に團結を爲すと申します。

然に古代の人民といふ者は、中々どうして團結の利益を自ら覺るあどといふどは思ひも寄らぬとであります。語を換へていへば彼等は決して自覺的に團結を爲すのではなくて、識らず識らず或る一種の力に依つて相結合するに至るのであります。然らば則ち其力とは何であるかといふに是れぞ即ち血統を同うするといふ觀念に基いて居るのであります。然しながら血統を同

うすとはいひながら其間自ら遠近親疎の別が御座ります。そこで何か此疎遠なる同族をも一にまとめる他の力がなくてはなりませぬ。其力といふのは則ち祖先教であります。即ち共通の祖先を崇拜し奉祀するといふことが多數疎遠の血統をも引き付けて、吾輩こそ同じ祖先を戴くところの同胞兄弟なりとの念慮を深からしむるのであつて若し此鏈鎖なくば彼等は忽ち離散してしまふのであります。然るに年月を經るに從つて同族が益々増加するにつけ漸々疎遠になりがちでありますから是に於て祖先の祭祀は益々必要なるに至るのであります。夫れ此の如く古代に於ける人民の團結は取りも直さず血統の結合でありまして此血統の結合こそ能く疎遠なる同族の同情と愛情とを醸す所以であります。云々との趣旨を申されて居ります。

扨て然らば何故に祖先の靈といふ者は斯くも至大なる勢力を有して居るのであるか即ち一言にしていへば祖先教の根源は抑何であるかといふことにつきましては是亦同博士が右の書物の中に力を極めて論ぜられて居るのでありまして其斬新奇抜なる殆どあらゆる西洋の大學者を後に瞠若たらしむるの感が御座ります。即ち同書第四頁乃至第七頁に掲げられて居るのでありまして今又吾輩は茲に其大要を御紹介致さうと存じます。（つゞく）

（前號に完結とせしは誤りなり）

三尾の秋色

黑金道人

西都秋景の一班として高尾槇尾栂尾の概況を報道すべし。

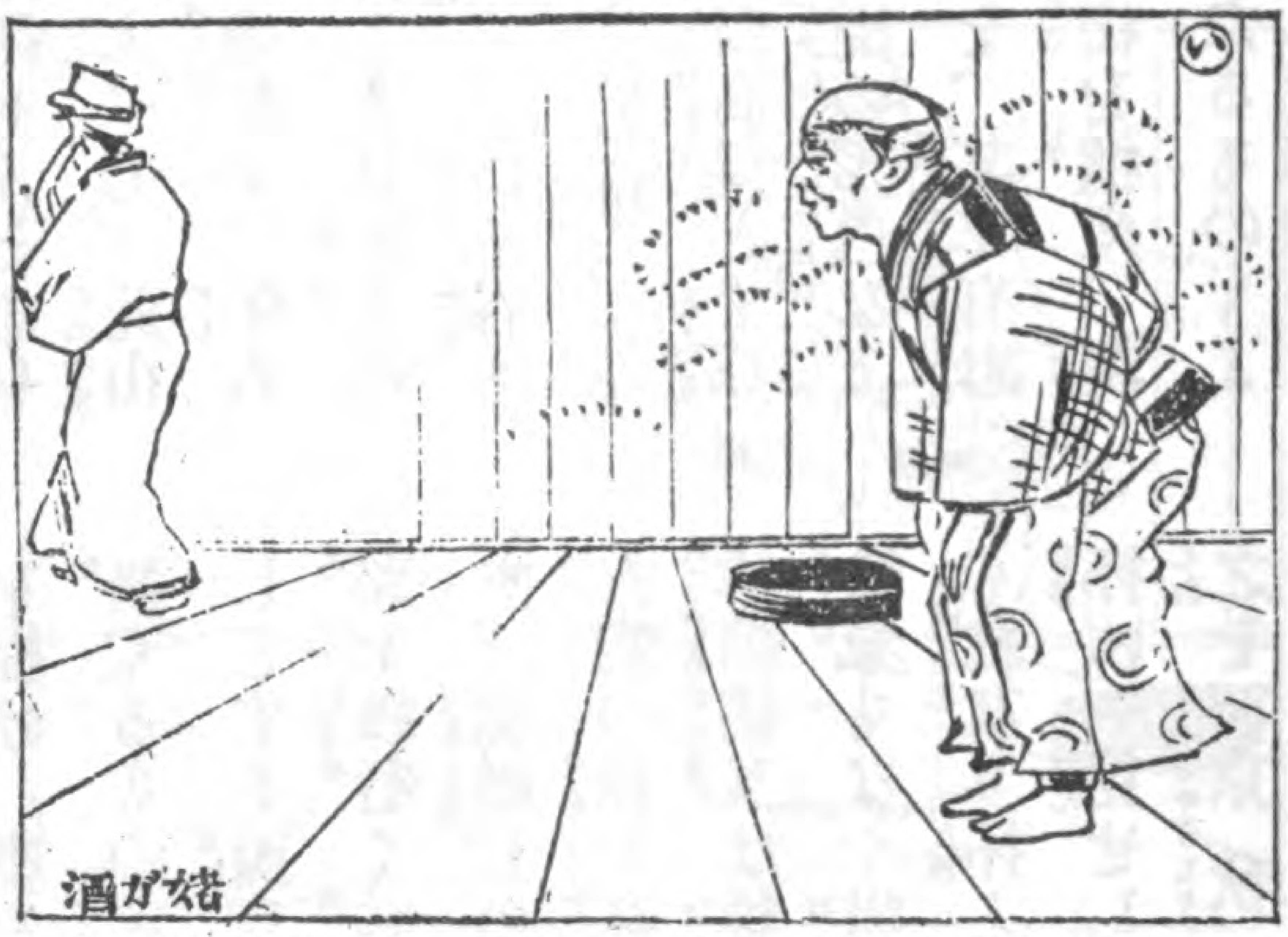
漫錄

高雄又高尾に作る、京都府下葛野郡梅畠村に屬し、愛宕山の東北京洛の北西に當る山間の地にして、槇尾栂尾皆其附近にあれば、之を三尾と稱して、紅葉の名所とはするなり。京都鐵道の便に依るものは花園停車塲よりするを最も便利とす。里程凡そ壹里二十丁許山間なれど道路險ならずして人力車を通ず、車道窮まる所に紅葉茶屋と稱する小料理店あり、店前の坂を下ること數十級にして、清瀧川の上に出づ、此邊前山後山の楓樹幾百千株なるを知らず、河岸に佇立して顧望すれば、上下四維總て霜葉にて、宛も蜀紅の錦に包まれたるが如し。清瀧の川は其名の如く水清く、流れ急にして、岩を蹴り石を洗ひ、雪を噴き、玉を碎き淙々の響人の心耳を淸まして、此間の風景は迚も筆舌の形容し得る所にあらず、橋を渡り屈曲せる前面の坂路を上れば石磴の下に出づ、之を登ること數十階にして神護寺の山門に出づ。

此寺は神護景雲の昔時和氣淸麻呂朝臣宇佐八幡宮に詣でし折に神勅ありて開創の志を起し、光仁帝の御宇奏聞を經て建立し、神願寺と號せしが、桓武天皇の延曆二十一年始めて法華會を此處に修せられ、嵯峨天皇の弘仁三年弘法大師始めて兩部灌頂を修し、淳和天皇の天長二年神護國祚眞言寺の號を賜はりしなり、其より幾多の沿革ありて現在の堂中宇には大將軍頼朝の建立せしものなる由なれば、例の文覺上人が壯士劇的勸進をなし、後白河法皇の叡聞を驚かし奉りし結果ならん乎。寺の背後にある地藏院址、又楓樹多く深潤幽谷松柏の蓊鬱たる間に燃ゆる計りの紅葉を點綴せる殆ど大着色の屛風幾百枚を建廻せるにも似たり、神護寺には寶物數多あれども其優等なるは國寶となり、或は京都帝國博物館へ寄托され、寺內に陳列

して從覽せしむるものは其殘品のみ、金堂の本尊藥師如來講堂の五大尊共に弘法大師の作と傳ふ。此他大師の手に出づると稱する書畫彫刻頗る多し、樓門の額は仁和寺覺信法親王の筆、鐘樓の鐘は世に三絕の鐘と稱せらるゝものにて銘は菅原是善卿序は橘廣相卿書は藤原敏行卿なるよし、山門を入りて右手の山腹に和氣清麿公の墓あり、老樹森々たる所石の玉垣を繞らし、神寂て最尊とし。威焰烈火の如き法王道鏡の面前に宇佐の神勅を唯ありのまゝに奏して、鼎鑊の其身に迫るを恐れざるの高風を欽仰して、久しく墓前を去る能はざりき。

山門を出で前路を取り、清瀧川を渡りて左折すれば、槇尾道なり。清瀧川に沿うて行く、傾斜の急なる所岩を掘り、石を疊みて、道を築く水色蔚藍の如く、楓葉臙脂の如し、槇尾の景は高雄の如く雄大ならざるも、水石の配置幽雅にして、景色の締れる所、最も愛賞するに足れり。門を出で又路を左に取る、坂路縈廻乍ち昇り、乍ち降り、數丁にして栂尾寺の門前に出づ。景の最も美なるは、其楓樹に圍まれたる此門前にて、一道の清流坂の右に注ぎ、潺湲として聲あり、坡公の所謂山水有清音のものならん。水は紅羅を漂はして、人は錦幔の裏を行く、宛然四條派の畫幅なり。



栂尾山高山寺は明慧上人の開基せる道場なり。建永元年冬後鳥羽上皇勅して栂尾山を上人に賜ひ、永く華嚴興隆の地と爲す、上人

諱は高辨、姓は平氏、紀伊上田郡の人、我國華嚴宗の第十七世なり、三學兼備内外博通にして著述七十餘卷あり、嘗て支那より天竺に遊學せんと志せしも疾を以て果さゞりしは遺憾と謂ふべし。此山に住し大に華嚴宗を唱へ寛喜四年に遷化す、年六十。上人が茶樹の栽培に熱心なりしことは世人の知る所なり。書院の前庭楓樹最も多く、山も谷も唯一體に錦繡をもて蔽へる如く、艶麗目を驚かす。

以上は三尾秋色の萬一なるが昨今新高尾とて京都士女の傳説嘖々たるは清水觀音南園の形色なり此處は數年前迄荊蕀榛莽の區なりしを、某々有志等相謀り、賤蓬惡竹を剪除して、楓樹を植え、溪を浚ひ道を作りて遊覽の境となしたるものゝよし。中々に眺多し、今後七八年を過ぎ楓樹長大せば、一勝區となるを得べし。

元來京都の士女は郊外出遊を好むものなるが、十一月十日頃より天氣開晴なれば、流竄の公卿墮落の沙門を始めとして士農工商各腰に一瓢を提げ、妻を連れ娘を伴ひ老を援け幼を携へて出掛くるもの雲霞の如し。殊に衣裳を生命よりも重しとする西京婦人が、今日を晴れと着飾りて、大路を練行く其美麗は、迚も紅葉抔の及ぶ所にあらず。裾廻しの切れるを厭ふにはあるまじけれど、衣裳の裾を高々と帶際迄まくり揚げ、燃立計りの緋縮緬又は緋の紋縮緬緋綸子等の長襦袢腰卷等を惜氣もなく蹴出してる樣、中々以て二月の花よりも紅なり抔と、澄ましては居られず。例の杜牧之抔に一見せしめば、驚天して目を廻すならむ乎。之を西京秋色の記となす。(本號の口繪則ち此の記事中の景色なり)

小さき斧も屢々撃てば最も堅き樫を倒す。
(シエクスピア)

深い〳〵森の中（西洋お伽話）

天風譯

深い〳〵大きな森の前に、貧乏な木挽の夫婦が住んで居りました。其子のヘンゼルは兄で、妹はグレッテルと云ひ、仲睦じく、又両親の云ふ事にも柔順でありましたが、可憐そうな事にも、母親といふのが、後妻で、此兄弟には繼母であつたのです。然るに、或年大變な飢饉が起たので、最早食糧も殘り僅かとなつて仕舞ひ、誠に心細い始末となりました。さあー、かうなると人の良い父親は心配を始めだし、子供等が寢てから床の上に坐て、大に嘆息をして、行く先の事などを考へ込み、鬱ぎながら其妻に向て云ふには、



さあ、吾々は之からどうしたらよからう、吾々の事は扨て置いて、子供等をどうして養育したらいゝだらう、見ればもうお前と二人で喰より外にパンはなくなつたやうだ。

と云ふ言葉も、子供等の事を考へての話であるが、そこは繼母であるから、一向そんな事には頓着しない、冷然として、如何にも殘酷な考を抱いてゐるので御在ます。

なーに、それなら妾がいゝ事を考へ出しました、其は外でもないが、子供等を深い〳〵森の中に連れて行て、其處にをきざりにしてくれれば、途を迷つて、ゐなくなる

のに極まつてます、けれども可憐そうだから、其處に火でも燃してやつて、パンの一かけもやつて置けば澤山でせう、そうすれば家に歸てこないのは請合です。

なんと酷い繼母ではありませんか、然し父親は實父であり、且つ人の良い人ですから、いかにもそれが可憐そうで堪らないから、

いーや、それはそうしても、若しも獸にでも喰殺されたらどうする、可憐そうな事ぢやないか。

繼母は少し怒を含んで、

なぜあなたは、そんなに子供が可愛いんですか、妾の云ふ樣にしなけりや、四人とも皆飢死しなければならなくなつて、あなたは棺桶の用意をせねばなりませんぞ。

無慈悲な繼母は、夫の承知するまで深い森の中に置きざりにする事を、主張して止まないで、遂に父親も、泣く／＼此事を承知して仕舞たので御在ます。

憐れなる、可愛らしき兄妹は、飢の爲めに未だ寢就く事が出來ないで、思はず此相談を聞いて、大に胸驚して仕舞ひました。妹のグレッテルは、女ですから、己等の運命も明日限りかと思て泣きだしましたが、ヘンゼルは健氣な男の子ですから、妹を慰めて、

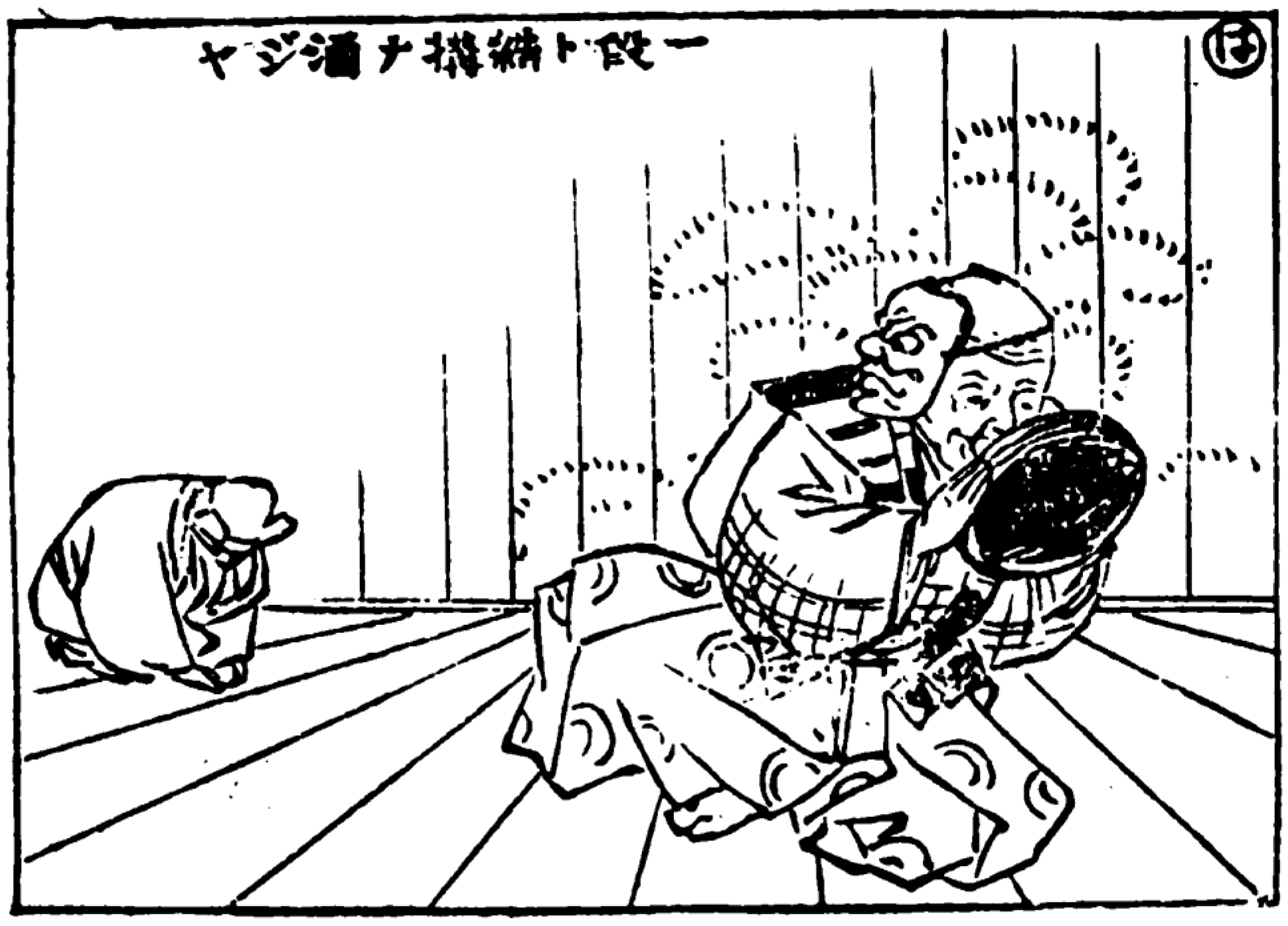
靜におし、私か請合て、御前を助けて上げるから、安心してお眠りなさい。

と申しまして、兩親が充分熟睡したのを窺て、ソッと寢床を出て、戸を開いて外に出ました。折しも月の光は皎々として冴え渡り、深い／＼森の奥までも照らした景色は、如何にも崇高い天地の秘密を宿したかの如くで、下を見れば地に轉ん

でる石は、月の色に白い光を放てる、樣です。ヘンゼルは靜かに、此白い小石を拾ひ集めて、服のカクシに一パイ押し込めて、充分重くなつた頃、又家に入りて妹を慰め、自分も又安す〳〵と眠て仕舞ました。

二人の兄妹に取ては、悲しむべき朝とありましたが、太陽が登るや否や、繼母は兄妹の寢部室に這入てきて、遠慮會釋もなく、此怠惰者めらがと怒鳴り付けて起こしました。そうして一所に森の方に參りました時、パンの一かけを與へながら申すには、

此パンをお前達二人にやるから、晝飯時にならなければ、喰べちやいけませんよ、さあ一處においでなさい。



妹のグレッテルは之れを手に受けて懷に入れましたが、其はヘンゼルが、カクシに石を一ばい容れてるからであります。やがて四人はづん〳〵深い森の中に這入つて、一哩も行た頃に、ヘンゼルはしきりに後の方を振りむきまして、家の方を眺めて居ますから、父親は不思議に思ひまして、

ヘンゼル、なぜお前は後ばつかり見てるのです、お前が來た方が家だから、さあ早く、お歩きなさい。

ヘンゼルは利巧な子供ですから、

お父さん、私は家の烟突にゐる白猫を見てるのです、そうして猫にさよならをするんです。

と云ふと繼母は、がみ〳〵した調子で、

馬鹿、あの猫はお前の猫ではありませんよ、さあ早くおあるきなさいよ。

だがヘンゼルは、決して猫を見てるのではありません、持て居る白い小石を、自分の來た途に落しつゝあつたので御座ます。

やがて深い〳〵森の中に來た時、父親が兄妹に向て、

お前達は木を集めあさい、お前達が寒くならない樣に、火を燃してあげるから。

と申して火を付けますと、繼母は早速、

さあ、仕事にいきましよう、お前達も靜かに遊んでおいで、私達の仕事が濟んだら、又連れにくるから。

と白々しい虚言を付いて、父親と一處に何所かに、いつて仕舞ました。

ヘンゼルとグレッテルは、淋しくも火の側に座を占めまして、色々遊んでる中に、丁度晝頃になりましたから、二人で中よくパンを食べて仕舞ましたが、耳を澄ますと森の中に、斧の音がしますから、まだ大丈夫だと思うて居ました。而し其は、決して斧の音ではなく、風の爲に枝と枝とが衝き合うて鳴る音なのです。其中に二人とも疲れて、眠たくなりましたから、思はず知らず眼を閉ぢて轉がつて仕舞ました。やがて二人が目を醒ました時は、旣に日は深い森の間に隱れて、闇は一段の凄味を添へて居たのです。而し未だ親達は來て居りませんでした。であるから少さなグレッテルは、急に悲しくなつて泣き始め、早く森を出やう〳〵と申しますが、兄は兄だけで、少さいながらも妹を慰めて、もう一時間もすると、月が出るから、其までは堪忍して居ろと申して居ますと間もあく、滿月は美しい〳〵光を放て、森の蔭から天

女の如くに登りて、今迄の闇の世界を破りました。
そこでヘンゼルはグレッテルの手を引いて、月の光りに自分の置いた白石を、たよりながら來ました。幸はひ石は月の光りに、頗るよく光るので、難なく迷はないで家に歸る事が出來たのです。然し家についた時は、旣に夜明で、丁度繼母が戸を開けるときでした、

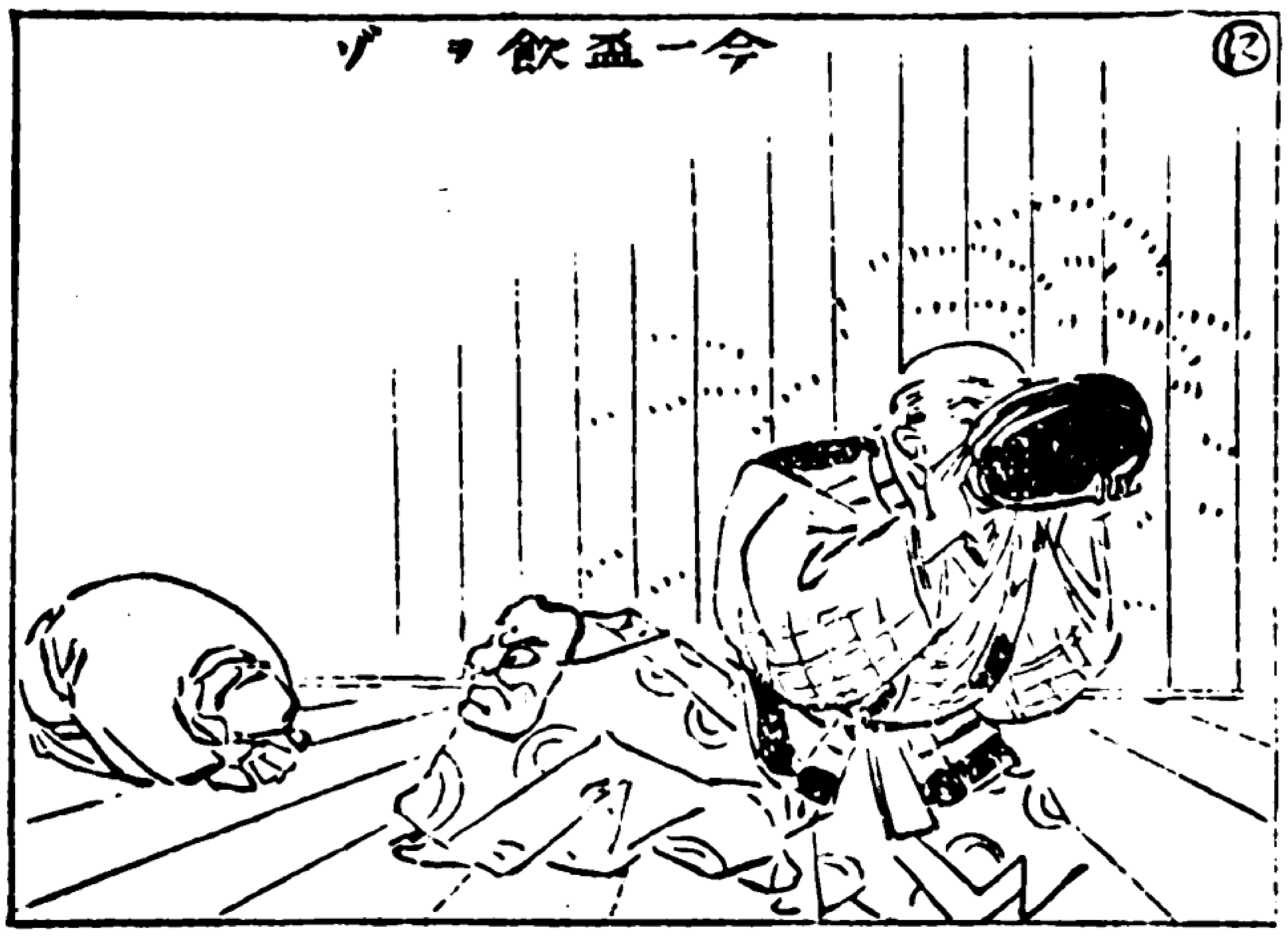
なんだ怠惰者めら、今迄寢過ごして、なぜ歸て來た、

と怒鳴る繼母は、隨分亂暴な女ではありませんか。而し父親は、心の中で二人の歸つて來たのを喜んで居ましたので御座ます。

暫く日數を立つと、また繼母が、父親に食物が僅かより殘て居ないから、二人を森の中の、猶更深い深い處へ捨てろと勸めました、父親は心の中で、非常に苦痛を感じまして、妻に、子供等と一處に餓死しやうと申しましたが。心の曲た繼母は、之れを罵詈讒謗して、遂に再び捨てる事に決まりましたのです。父親から窃かに之れを聞いたグレッテルは、今にも泣きだしそうですから、ヘンゼルは之れを慰めて、又外に出で白い石を拾ふとしましたが、繼母が戸を閉て置いた爲め、外に出る事も出來ません、けれどもヘンゼルは心の強い子供ですから、

グレッテルや、決して泣きなさるな、神様がきつと助けて下さるから。

と云うて妹を慰めました。



漫錄

又朝になると、繼母は二人を起しましてパンを與れますと、今度はヘンゼルが之れを受取つて、カクシに容れました、やがて親子四人は森の中に行きましたが、一哩も行くとヘンゼルは、又後を切りに振返ります、父親はなぜ早くあるかないのだと云ひましたが、今度はヘンゼルは、家の屋根にゐる鳩に暇乞をするのだと答へまして、其實はパンをちぎつて、之れを來る途に置いたのです。其中にどん／＼深い所に這入て、今は丁度森の眞中頃に參りました、此處に二人を置いて、父親は又火を燃し、何處かに行て仕舞ました。

二人は火にあたりあがら、殘りのパンを睦しく食べて仕舞ましたが、やがて疲れて眠りました。目を醒ましたのは、既に暗くなつた夜でしたが、更らに父親も繼母も來ませんで、只だ寂しい森が闇の中から、風の響を發して居るばかりです。ヘンゼルは、又月が出たら途が分るから安心しろと云ひて、泣いて居るグレッテルを慰めました。大凡そ夜中頃でしやう、月は僅かに森の端から登りましたから、さ――行かうと、ヘンゼルは妹の手を取て立ち、途に置いたパンを探したが、いかにしても見付ける事が出來ない、其中に夜が明けたが、それでも何處にもない、それも其筈、二人が晝寢した間に、鳥が來てみんな食べたのですもの。嗚呼兄妹は、最早家に歸る途を失たので御在ます。

さあ、こうなると腹は減るし、足は疲れるし、其中に晝となり、夕暮となり、食べたものとては、木の實の二つ三つのみで、此に至つて已を得ず、二人は寒い木の下に眠て仕舞たのですが。實に憐れ極まる話ではありませんか。

夜は明け放れて、三日目の朝となつたが、父親

は勿論、人一人とても來るものがありません。泣くグレッテルを慰めながら、ヘンゼルは其手を引いて森の中をづん〳〵と行きましたが、若し助けに來る人がないのなら、最早二人は、死ぬより外の途はありません。やがて晝頃になりましたが、二人は食べる物もなく、寂しげに進んで行きますと、丁度目の前の木の枝に、得も云はれない奇麗な鳥が止まつて居て、其鳴く聲は、殆んど極樂の音樂の樣に聞へます。二人はつひに其に氣を取られて見て居たが、鳥は忽ちづいと飛んで、二人の前にうろついて居ます。兄妹は何氣なしに其後について進んで行きますと、森の少し開けた所に、一軒の見慣れない家がありましたが、鳥は其屋根



に止まつたのです。見ますと家はすつかりパンで建てられて居りまして、屋根は乾酪で、窓は奇麗な砂糖から出來て居ます。ヘンゼルは之れ幸ひと、グレッテルに向ひ、

グレッテル、此處で休まう、腹が減たからお前もあれをお食べ、私はパンを取るから、お前は砂糖をお取り。

と云つて、ヘンゼルを屋根に登つてパンを取りましたが、其中にグレッテルは砂糖を一ぱい懷に入れました、すると忽ち家の内から聲がして、

だれだだれだ、そこにゐるのはだれだ。

と云ひますから、ヘンゼルはすぐ氣をきかして、

かーせだ風だ、おそらのこどもだ。

と答へて、甘い乾酪の屋根をちぎつて、カクシに入れました。

ところが不意に、戸ががらりと開いたから、二人は驚いたの驚かないの、忽ち丸い目を開けて其方を向きました、見れば年老いて梅干の様なお婆さんが、杖に縋つて、よぼ〳〵と出て來たのであります。だかお婆さんは、にこ〳〵笑ひながら、二人の頭を撫で回はし、

さあ〳〵、こちにお這入り、少しもお恐しい事はないよ。

と云つて、二人を、パンで出來てる家の中へ入れ戸棚を開いて、其處から、林檎や、梨子や、角砂糖や、羊の肉などを御馳走して呉れましたから、二人は喜んで食べましたが、其中にお婆さんは奇麗な蒲團を二つ出して、之れに悠くり臥なさいと二人を眠らせたから、今や兄妹は、極樂にでも行た心地がしたので御在ます。

お婆さんが、斯の如くに親切にして呉れたから、兄妹は大變に喜んで居りましたが。實を申せば、此お婆さんは魔術使ひで、いまに此二人を燒いて、パンと一所に喰べてしまふと思つてるので御在ます。何んと恐い事ではありませんか。若しお婆さんが、二人の床を摑んだなら、二人は死ぬより外に途はなく、忽ちに炙ぶられたり、燒かれたりして、お婆さんの胃袋に這入て仕舞ふのです。而し玆に一つ幸な事は、此お婆さんは、鼻は滅法界に利いて、百里の先きにあるものまで嗅ぎ分けるが、眼の方は色が眞赤で、一間先も見る事が出來ないのです。其ですから、グレッテルとヘンゼルが、家の近くに來たときは、家の内から之れを嗅いで、よしよし、來たら、つかまへて、喰べてや

ろうと申して居たので御在いますが、其容姿を、見る事が出來ないのでした、

翌朝になると、早々、未だ兄妹が可愛らしく眠て居る所に來て、例の眞赤な目玉をきよろつかせながら、鼻を揺ぶつて、忽ちヘンゼルを攫み、之れは甘味さうな小供だと云ひながら、直ちにヘンゼルを引攫ぎ、家の後の物置部室に容れて仕舞いました、そこで亦グレッテルの所へ來て、早速眠つて居るのを大きな聲で怒鳴り付けました。

起きろ、此怠惰者、水を汲んで來てから、物置に行てお前の兄さんに甘い物を食させろ、それで能く肥た時に、おれが喰べて仕舞ふから、



之れを聞いてグレッテルは、悲しくて泣き出して仕舞ひましたが、もういくら騒いでも駄目で、どうしても此魔術使のお婆さんの、云ふ事をきかなければなりません。

それでヘンゼルは、肥る爲めに物置の中で、毎日をいしいものばかり喰べて居ますが、グレッテルは毎日使はれてばかり居ますから、蟹の甲羅みたいに痩て仕舞いまして、兄妹は、互に心で苦しんでるばかりなので御在ます。

毎朝お婆さんは、物置に居るヘンゼルの所へ、肥たか、肥らないかを見に行きます、然し幸いに目が見えないものですから、ヘンゼルに指を出さして、之れに觸つて見なければ、判らないので御在ます、

漫錄

おいヘンゼル、指を出して御覧ん、肥たか痩せたかを見てやるから、

ヘンゼルは、甘いものを食べてるから、丸々と肥たのですが、若し肥たのが知れては、喰べられますから、利巧にも、何時でも指の關節の所を出すのです、其だからお婆さんは、まだ肥らないのだと思つて、何時になつたら肥るのだらうと、呟やいて居りました。

魔術使の婆さんは、一周間過ぎても二周間過ぎても、肥らないのを怪しみ、遂に忍耐が出來なくなりました、そこで大きな聲でグレッテルに、

おいグレッテル、もうヘンゼルが肥てゝも瘠せてゝもいゝから、今日は是非に喰べるから、そう思ふて料理の仕度ををし、

グレッテルは、實に身を削がれる樣な思をして、心の中で悲しくて悲しくて、しかたがありません、

而し已を得ないから、水を汲んで來ましたが、其時涙は、其愛らしい頰を傳えて流れました、

神樣、どうぞ、私共二人を助けてください、いくら獸に食べられてもいゝから、どうぞ、二人を一處に死なして下さい、

とグレッテルは、泣きながら祈りますのを聞き付て、默れ、お前を助けるものなぞはないぞと、魔術婆さん、怒鳴り出しました。

仕方がないから、グレッテルは又竈に火を焚き付けて、パンを燒き　かゝりました、すると畏ろしき婆さんは、

おい、グレッテル、まづパンが喰べたいから、竈の中へ這入て、燒けたか燒けないかを見ろ、

といふてグレッテルを衝き飛ばし、

おい早く這入らないか、匍匐て這入れば、這入れない事はないよ、

と云ふのは、グレッテルも燒き殺して、ヘンゼルと一處に喰べて仕舞ふと思てるので御在ます、而しグレッテルも、小さいながら其位な事はわかりますから、

妾は、どうして這入てい丶か存じません、

と云ふと、魔術のお婆さんは、怒つて焦りながら、

馬鹿、竈の口は、大きくあいてるぢやないか、見ろ、おれがして見せるから、

と云ひながら、匍匐いだして、頭を竈の中へ突込で見せました。

之れを見てグレッテルは、物も云はず、お婆さんのお尻を力一ぱいに押しましたから、流石のお婆さんもたまりません、竈の內だから、自由に體を動かす事も出來ず、とうとう、體ごと竈の中に這入て仕舞ひましたのです、グレッテルは、早速鐵作りの竈の戶を閉ぢて、錠をピシンとたてましたから、中では只だ、獸の樣な聲で、ドタバタ呻いて居るばかりです。やがて物凄い程の騷ぎもすんだから、恐らく魔術使のお婆さんは、黑燒けに成て、死んで仕舞たので御在ましよう。

そこでグレッテルは、急いでヘンゼルの處へ馳て行き、其戶を開けて、

兄さん、もう大丈夫ですよ、恐ろしいお婆さんは死んで仕舞いましたよ、

ヘンゼルは鳥の籠を出づる樣に喜び出まして、グレッテルと抱き合て、たゞ嬉し淚に、物も云ふ事も出來ません。而しもう恐る丶ものはありませんから、二人は勇んで奧の座敷の方に參ましたら、實に其處には、驚く程立派な寶物ばかりあるので御座ます、金銀の細工物、金剛石、綠磐石、紅玉石、其外瑪瑙、水晶、かず限りもない程あります。

二人は、カクシや、懷の裂ける程寶物を容れ

て、さあ之れから森を出て、家へ歸らうと、此處術使の處を出發しました、二人は喜んで、種々の話をして、やがて一時間も參りますと、思ひがけなく、大きな大きな廣い河の前に出ました、さあどうして渡らう、切角此處まで來て、又困て仕舞ふのかと思ひ、悲しそうに四邊を見廻しましたが、舟もなければ、橋もなく、只だ渺々たる大河が流れてるばかりで、目に入るものとては、悠々と泳いで居る一羽の家鴨のみで御座ます、グレテルとヘンゼルは、絶體絶命で、なんとか、此家鴨が助けて呉れまいかと思ひました、そこでヘンゼルは。

あひるや、あひる。しろいせなかに。
　のせてくれ。
ヘンゼルさんも。グレテルさんも。
　舟がないので。こまつてる。

そうすると家鴨も、其歌が面白いと見えて、兄弟の立てる岸に泳いで參りました。而しグレッテルの云ふのには、二人一處に乘ては重過ぎるだらうとて一人宛、かはりがはりに乘て、此大河を無事に越して仕舞ひました、これで二人は手を引き合いながら、やがて一二里も行きましたら、豫てより二人のよく知てる處へ出まして、其中に自分達の家の居根も見えだしました。さあー、もう堪え切れなくなり、二人は息を切て駈け出し、家の戸を開いて飛込むと、其處にいとしい父親が居たので、父親も夢かとばかり喜び、三人抱き合ひて、嬉し涙に暮れました。そうして、母親はと問けば、繼母は二人のゐない留守中に、死んで仕舞ひましたといふ事です。そこで親子三人、樂しく暮らして行く樣になりましたが、ヘンゼルとグレッテルの寶を持て來たおかげで、家も大層立派に建てな

ほし、近郷近在では、第一番の金持となり、二人とも、後には大變出世をしたと云ふ事で御座ます。

(をはり)

婦人と赤十字(下)

一 記者

●●●●●●●●●●赤十字社と看護婦養成　赤十字社が戰時又は天災救護上看護婦準備の必要を認めて之が養成に着手せしは明治二十三年の七月であつた。爾來本支部兩方に於て養成せる看護婦の數は累年多きを加へ、最近の調査によれば、全國を通じて約千五百九十餘名に達し、この外目下養成中の生徒尙は六百二十餘名あるさうだ。されば今の生徒が悉皆卒業する曉には同社の看護婦は二千二百餘名の衆きに達するといふ事である。此に少しく讀者の注意を乞ひたきは、看護婦養成は赤十字社の主たる目的でないといふ事である。現行の社則によれば準備看護婦の數は約二千名を以て定員としてある。然らば定員に充ちたる上はいかに之を處置するやと云ふに、夫れは豫備員として若干養成し置くことに止むる見込であるさうだ。

●●●●●●●看護婦志願者の資格　はどうかといふに、年齡は十八歲以上三十歲以下にして配偶者なく且つ修學中家事に係累なきもの、身の丈け四尺六寸以上のもの、身體强健にして性質淳良なるもの、高等小學卒業若くは之と同等の學力を有するもの、從來の履歷品行に咎むべき所なきもの、公民權を有する保證人一名(東京府下に限り現住保證人別に一名を要す)あるもの、以上六項の資格を具へし者にあらざれば何人と雖も看護婦候補者たることを許されない。而して生徒は未婚者に限られある

も、全科卒業の後は結婚するとも差支ないのである。

本部に於ける志願者の假入學及試驗　每年一月、七月の兩度に生徒募集を行ひ、中の優等者を候補者として二ヶ月以上假入學を許し寄宿舍に入れ、一ヶ月金五圓を給して病室勤務に服せしめ、この間に於て各生徒性行の査察を試み、四月十月の兩度に右候補者につきて試驗を施し、所謂準備看護婦生徒なるものは更にその優等者中より採用されるのである。處ろが二回以上落第せしものは重ねて候補者たることを許されざる規程なれば志願者は十分注意すべきである。夫れから受驗の課目はかうである。落つるか落ちぬか運命の未だ定まらざる若干の候補生は、二ヶ月以上の假入學を畢つた後、讀書(假名交り讀本)作文(往復書翰文)書取(普通文書の類)算術(四則雜題)の四科につき試驗を受けるのである。因みに本部に於ける生徒採用の數は一回二十名と限られてあるさうだ。

本部に於ける生徒の學期と課業　學年は通じて三ヶ年、之れ前後の二學年に分ち、前一ヶ年半は專ら學業に就き、傍ら實務を練習せしめ、後一ヶ年半は主として實地勤務に從ひ、その修得したる學科の應用に熟練せしむる方法である。敎科書には本支部共同社看護婦用として特に編纂されたる「看護學敎程」といふを用ひつゝあるが、實務練習の際には本書所載の外敎練を要する課業も尠なくないさうだ。次に日課の配置に就て記せば、まづ一日を二分して、一は學課、一は實務、一は休息睡眠の時刻に充て、一定の時間をもて各生徒交替しつゝ、晝夜手落なく勤務に服して居る。修學中は學費として每月金七圓を給し、器械服帽等を除く外一切の費用を支辨せしめて居るから、浪費さへせ

ずば不足のある筈はない。

●●●●●●●●●●
支部に於ける志願者の試驗　毎年一回體格、應問、讀書、作文、書取、算術の六科目につきて志願者を試驗し、その優等者中より直ちに生徒を採用する規則である。本部のやうに假入學抔といふ事はない丈け簡便である。採用さるゝ生徒には定員なく適宜之を定むるさうだ。かゝる工合であるから教育及び技能の點に於ては支部看護婦はどうしても本部のに數歩を讓らざるを得ない。蓋し本支部都鄙の間、民情同じからず、地方は一般に應募者尠なきより、自然此種の方法が設けられたのであらう。

●●●●●●●●●●●
支部に於ける生徒の學期と課業　支部の學年は本部より一ヶ年を減じて二ヶ年とし、之を前後二學年に分ち、前は專ら學業に就き、後は主として實務に當らしむること本部と異同はない。教科書は無論同斷。生徒修學中は學費として毎月金四圓乃至七圓を給し、教科に關する器械物品及服帽を除き總べての經費を支辨せしむること是れ亦本部と同じである。而して生徒を教授するには支部養成所の設けある處はソコで、まだ設けられぬ處は大抵其地の公私立病院を借りて臨時之に充てゝ居る。講師は本支部共多く知名の軍醫又は醫師に囑託してあるから決して心配はない。此の他百事本部と大同小異と見て差支ない。

●●●●●
卒業後の看護婦　前記の外讀者の意を留むべき問題は、別儀でもない、卒業後に於ける看護婦の生活及び保護の問題である。記者は此の點につき特に精査を遂げ、必要なる材料の調査も畧ば結了を告げてあるが、詳論のことは他日に讓り、本稿は一先づ此の邊で筆を擱かう。

（完）



おあさ

天聲

（四）

渴きては流れに咽喉濡したれど、飢えては嚢中にものなければ、靑緡二個につなぎし命細く、綠の鬢塵埃に塗れて赭く、顏憔悴れて黑眼の光殊に銳く、喘ぐばかりの路はかどらず、三月は十二日の朝まだき、いらかならびたてる巷にたどりつきぬ。武士町人の影もなほ見えざれど、これこそはと思ふまゝに、逢ふ人もやと行くほどに一人の年たけし婦に逢ひぬ。もし〳〵と腰低く耻かゞやかしきわが姿の見すばらしきを厭ふ術なく、此處は江戸でござりますかと聞けば、さうで御ざんす此處は江戸の端、上野廣小路とばかり言は短けれど嬉しさは譬へがたなく、この邊に天神樣は御座りませぬか。それはこゝより遠くはない湯島といふところ、もう少し行つて右へまがり、また左へまがり、聞いてゆけば分りますると深切に敎へられて、やう〳〵に湯島天神。膝がしらに力をこめてのぼる石段の脚もと危ふく、神前にぬかづきてわが身無事の喜び、父和七郎に逢はれますやうと一心不亂に祈り了へ、人語に起ち上れば、町人らしきもの三四人、朝參りにや、語りあふ言葉の數。三日の働云々と言ひのゝめくを、聞くにさてはと嬉しきと憂さ。ぶしつけながらおきゝ申したうございます、唯今の御話しの浪人の姓名は何と申

すものでござりますかと問へば、つい聞いたれど忘れてしまひぬ。八人たしかに細川さまへおあづけになつたのだから、知りたくば細川のお屋敷にいて聞いたがよし。おりかへして、細川様のお屋しきは何處を伺う參りましたら判りましよう。此坂を下り、お成道といふ廣い通りへ出て、外神田から筋違御門、神田橋、大名小路ときゝ〳〵行きなば直ぐ解るべしと渡る世間に鬼はなき懇ろなる答へに、忝なしと禮して起ちしが、九日に食ひ十日に味ひしばかりの腹、身體は疲れて足ひよろ〳〵、蹣跚つくを倒れまじと一生懸命に踏しめて、此處大名小路と聞きたる路を辿りつき、嚴しき通用門に倒れたる身をそのまゝに跪いて、息つきあへずお願ひが御座ります。

　赤穗義士以來例なきこと、一國の大老を途に斬りし水戶浪士、幕府の命に預りし細川家、門の出入嚴しく、番人增して衞らせける處に十三四の田舍娘、而も憔れしおもひを冒して御願がござります〳〵と血を吐く思ひの幾度か叩頭きつゝ、番人共の通れ〳〵と睨み付くるにもわるびれで、突伏したまゝ哀れは深き聲を絞りて、額を砂に埋めしさまの、いぢらしと見てや門の內に居りし同役、づか〳〵と其處に進みて倩々視れば、容貌卑しからず、言葉はまがひもなき水戶訛りと心付けば愈譯ありと推して見過しがたく、拙者に任せられよと同僚に合點させ、その娘此方へ來よと番所の裏手に導き、さて何の願あつて當お邸には來しぞとの問ひに、はいありがたう御座ります、去る三日御大老樣を害めました浪人八人、此お屋敷にお預けの由、その姓名御知らせ被下ますやうお願ひ申上げますると、聞きてさては浪士の身のものと不便を催し、それは姓名聞かせてもやらふが、其方

何で名がきゝたいか理由を申せとの詰問、おあさうなづきて、私こと譯あつて御尋ね申まする、名のうちに思ひ當りました事あらば、其上始終は申上まする。男少し威儀つくりて、凡て人に物尋ぬるに、おのれのことを先づいはで問ひたゞすこと法に於てないこと、それでは敎へてもやれまいぞ、といはれて、おあさ涙はろ〳〵膝に落るを手にて拭ひ、何卒お慈悲に敎へなされてと言ふにも勞れは總身にわたり呼吸切れがちなを男は察し、傍の辨當今日の午の飯に湯をかけ、粥にして、空腹かるべしこれなりと食べて凌ぐがよしと信ある欵待も願のとほらぬうちは飢えながら食も咽喉にとほらぬ一念のさま動かし難く見てとつて、頷く番人。兎も角も浪士の姓名聞きたしなど、變あつては事ならんよい加減になされてはとの同僚の注意をうち消し、何の心配さるゝに及ばず、十三四の小娘一人、何が出來やう思案あれば、任せられよ、お咎めあらば罪は拙者受くべしとて、さて姓名きかせたけれど一存にはゆかぬまづ上役に聞うてと詰所に至り、事を通ずれば上役も憫然に思へど勝手にはなり難く、かくと家老を經て殿にも聞え、おあさ多時番所に休ひし程に上役よりその娘同道せよとの命令。かの番士おあさを伴れて至れば、段々の願により殿樣のお耳に入り御沙汰あり、すなはち書取に致し八人の姓名申渡すとの言に。おあさ小さき胸おどらせつゝ俯して聞けば、第一蓮田市五郎、佐野竹之助、齋藤監物、大關和七郎、杉山彌一郎、森山繁之助、森五六郎、黑澤忠三郎と讀終れば、父の名あるに天へも上る心地、言はむとする時、この中深手ありてとの文言聞いて、はつと胸悸きしが、佐野竹之助は三日の夕方に落命、齋藤監物は四日に落命、外六人薄手にて

無恙、此うち心あたりありやと、問はれて嬉しいのやら、悲しいのやら、わつと泣き出し、お慈悲のほどありがたうござります、今はつゝみ申さず、私は大關和七郞の娘あさと申すもの、母には昨年の春死別れ、父には同じ年の九月生別れ、水戸城下菱屋に預けられ、三日の噂に心ならず思ひきつて一人、九日の朝出立いたし、今日お邸に參りましたわけ、この上のお情け、今生の暇乞一目なりとお逢はせなされてと聲涙共に下りて願へば、なみ居る人々感動して、やがて越中守殿に言上するに殿にも感ぜらるゝこと一方ならず、老女めされて何か命せられ、さてその娘目通へ伴れ來よとの仰せに、家老は旅やつれの姿あまり見苦しと申せば。いや苦しうない、孝行もの姿形はいはず、疾くせよと、承りて此旨傳へ、おあさ伴れて御前に出づるに、旅のやつれは塵埃に著るく、見るも哀れなるものから、見あぐる眼もと黒く淸やかに、人品のよきこと風采に知られぬ。



あさとはそちか、始めての旅行、さぞ難義したであらう、言はれておあさ平伏し、厚きおじひありがたく、唯一目父にお逢はせのほど、この上の御情け願ひあげますると、くりかへせば、うなづかれ、老女召されて、この娘ぢや、奥へとの仰せ心得て、此方へと手をとり奥の間深く伴れゆかれぬ。

室々の女中ども、水戸から孝行娘來たとの事に、彼處からも此方からもはしり出でゝ噪がしく、それお菓子、お下り餅をと、おあさをとりまきての欵待。此夜は暖かく蒲團夜着にまかれ、殿樣わが願を許したまふにや、父上在すは何處の室なるらんとこれを夢に翌朝となれば昨日にもます女中の欵待、嬉しけれど父の顔見てもよいとのお許し言なきうちは安心かず。當てがはれし室に獨り倩々越方行末の事思ひまはし居るところへ、昨日の老女包かゝへて來り、殿樣の仰せと鏡臺に對はせ、髮なほして大前髮の大銀杏、結ひ了れば、取り出す大振袖の衣服一領、紫地に曙染の美ごとさ、茶に淡鐵色入りたる袴、それを身につけて見れば、天晴の姿態、老女に伴れられ、殿の御前に出づれば御覧あつて好き小姓になりしと微笑れて、あさ。今日は父に對はするぞ。

（五）

天下の爲め君の爲め同盟十八人、赤心合羽に現はし、白刄雪にまぎらかし、彥根侯の登城途、不意に起つて奮激突戰、雪紛々として血は滴々、天下の大老を刀の尖の首級に換へ、是にて思ひは晴れぬと潔く自訴したる結局は此邸に預けとなりしも、僂ふればはや十の日數またゝくまに經ちける。昨日蓮田氏町奉行所に呼出されしと聞きしかど、其れすら如何になり行きけん知るによしなし、一日も早く沙汰ありてこそ、心も聊か沈着べきを、徒く日々の無聊、書見ばかりもされず、廣やかなる庭園も眼なれてはさのみ慰さむ媒ともならずと。細川越中守上屋敷の一室に、無聊を喞つ大關和七郎、鐵と固めし心の操は、松の緑の色美しう茂りあへど、何處よりか亡き妻の面影、朧ろに映りて見ゆる間を、愛たき娘の幼き顔さへ、宛ら雲

霧のやうに浮び出で來る胸の有耶無耶。あゝさても故郷へ止め置き來しお淺の身の上、今頃は如何に、我亡き跡、定めし思ひやらるゝわと、口頭漏るゝ言葉の末は、四邊に散りて我にもあらず差俯向けば、襖の外に、はた〳〵と跫音近し。軈て襖を靜かに開きつ、現はれて恭しく手を仕へしは近侍の武士。何用にかと振返る和七郎を見上げて、主人越中守、少々其許にお逢ひなりたく、御足勞ながら、奥書院まで入來ありたしとの口上なり。

越中守何用ありて呼出すにや。大名と此方、身分こそ違へ、君の爲め國の爲め、命捨てゝ事作せし上預けとなりし身。呼出すとは無禮至極と、怒りの色青白き顏に少し見えしが、今の場合否むわけにも行かず、亂れし衣紋さそくに整へ、件の近侍を先に立たせ、監守役後邊に從へつゝ奥書院にと行きぬ。

至りつけば正面に金襖負うて威儀正しく、控へられし細川殿、いさゝか笑やうなる眸に、此方を佶と視らるゝさま、我を嘲むかと平かならぬ胸をさすつて、設けの席にむづと座れば。越中守殿言葉靜かに、和七郎大儀なり、呼立てしこと他にはあらず、此座に連なる青若き者どもが後學の爲め、勇ましかりし彼日の有樣、其處にて語り聞かされなば大慶なり。如何にやと首少しのばすやうにして問ひかけらるゝに、這は心外なりと、怒氣愈制しがたく怺へ難きを辛くも鎭めて、お訊ねとも存ぜず拙者共、身を鴻毛の輕きに比し、國の爲めまた君の爲めに、妻子を忘れ家を忘るゝ、赤き心を櫻田の降積む雪にしめせしのみ、働きはいかばかり勇ましゝとて武士の習慣に二つはなし、をかしきお訊ね、憚りながら和七郎、お答へ申す言葉を知らずと。威大高になりて拳を握れば、越中守殿

膝を打たれて、天晴なり和七郎、斯くありてこそ勇士の本分。予もほと〳〵感心致した。が、和七郎、只今の言葉のうちに、妻子を忘れ家を忘れと申せしかど、よもや其方、骨肉恩愛の絆にまつはる妻子を忘るゝ事はあるまじ。如何に〳〵に問はせらるゝに、眼に角たてゝ肩怒らせし和七郎、焰とばかり吐く息を拳に吹きかけ、武士たる者の眼中には、大事の前の小事は映らず、賢慮とも存せぬお言葉かな。勇ましき心さもあるべし、さなくては斯程の大事、よも首尾好うは行はれまじ。されど本望遂げし今の塲合と、大事を控へし曩昔の塲合とは等しかるまじ。同志の者とは別れ〳〵の無聊を喞つあひま〳〵、定めて思ひ出さぬにもあらざるべし。兎角に人の情、さうなうては叶はぬ筈と、物柔らかに念を推されて。和七郎の心俄かに和ぎ、忽ちひそみ居たる情火ぱッと燃え立ち、手を膝にして頭を下げ、徒然には妻子の事、思ひ出すらんとのお言葉、身魂に徹し五臓に喰入り、我と我手に腸掴み立てる樣に思ひまする、耻しきことながら、拙者十四歲の娘一人、淺と申すもの、浪々の身と相なる前、水戸城下菱屋勘兵衛なる者の許へ預け置きましたれば、今日此頃の巷の噂に、嘸や心痛まかりあらんと、實は寢た間も忘れませず、お賢慮の殿、たゞ〳〵恐入り奉りますと。聞くにかなしき小姓打扮の大振袖、父樣此處にと取縋りたく聲懸けたく、小さき胸に寄せては返へす波のうね〳〵、怺へ情なき涙は膝に時ならぬ村雨とばかり降りそゝぐを拂ひのけ〳〵、昵と怺ゆる切なさ苦さに身を顫はせて俯向く時。是和七郎へ茶一服と殿の命せは豫てのはからひ、此處なりと氣が付きて立上れば、早や次の室の敷居越しに、お坊主の差出す薄茶、しとやかに受けると聽て父

の前、總身すくむやうに覺え、一生懸命泣くまじと縮むる唇、嚙みてもかなはず、ぶる〳〵と震ひ戰きつ〻、捧げし兩手に涙垂る〻を拂ひもあへず、やう〳〵に差出す茶碗、一生は是限りと、永却尽き難き情に、涙の裡より兩の眸を眤と据ゆれば、受けんとて顏あはす和七郎、紛ふべくもあらぬ我娘、やれお淺かと唇頭まで出でしを、飲む茶と共に辛くもおさへて、さては越中守殿の厚き情、我を呼びしは親子の對面、他ながらせさせん爲めのはからひなりしを、知らねばこそあれ先刻の無禮過言、あ〻過てり〳〵と繰返しつ〻、思ふ刹那も、水戸より此處へは如何にしてか來りし、問ひたきは千山萬水、山崩る〻とも動かず、水押寄するとも物かは、天地を搖がし、鬼神を驚かす鐵石心腸も、是には斷々になりて眼と眼、瞳と瞳に映りあふ互ひの俤、眼に言いはず一期の苦痛、



さこそと思へば座に聲なく、唯鼻す〻る音のみ、寂寞を破りぬ。

堪へかねし和七郎、紙筆をと請じ申せば、其れ持てとの命せに、お淺差出す料紙硯箱、和七郎筆執上げ、さらさらと書き下したる水莖のあと、

親を思ふ子をふり捨て〻今よりは
君の情を死出の手みやげ

越中守殿御覽ありて、言葉はたゞ涙なり、お淺今は言葉なくて止みがたく、父の側にすりより、唯一言、私へも一首と請へば輕く頷き、またも筆とりて渡す紙、曇る眼に文字分らで、手に受けしま〻座りぬ。

良久ありて越中守殿言葉を出され、故郷に殘せし淺とやらんが身上、さこそは心に懸るべけれど、舵としたる預人は水戸にあり、心置きなく思はれよとの御意、裏を想へば、我が預つたぞとの嬉しき命せ、身もとろけんばかり喜ばしけれど、面り禮申上る處でなし、幾度か頭垂れ、幾度か手を仕へつゝ、いざ退出んと身を起せば、父子の訣別、終古の悲歎、お淺縋りたくありて、後追ひ蒐けんと思ふ間もなく、父の姿は、無慙や襖の陰に隠れぬ。振袖の秋の七草、涙に染めて引拗つても足らず、聲を擧げてわとばかり、我身を我身とも覺えぬまで　泣沈みしが、突と起上りて料紙手に執り、片手に涙を拭ひもあへず、籠りし聲音に誦するを聞けば、

子を捨つる親を思はゞ此君の
慈悲のほどを忘れざらまし（完）



落葉　　久我建通

木のもとにちりてかさなる紅葉の
おとさへたえし冬そさひしき

初時雨　　蜂須賀茂韶

もみ出しみねに日影はみえなから
時雨そめけりやまもとのさと

殘菊　　諏訪忠元

今もなほ冬をへたてゝきくのはな
しものかきねに咲ほこりつゝ

殘紅葉　西三條實義

老松のしける木のまにたゝひとり
のこるもみちの色のよきかな

初冬霜　宮地嚴夫

散そめしもみちの色をおもしろく
かくさぬほとにおける朝しも

松下殘菊　北郷久政

こと草はかれし野中のまつかけに
何時までのこるしらきくの花

瀧上落葉　萩原毅雄

はら／＼とちりはなかれて瀧川の
紅葉はかけもとゝめざりけり

庭霜　大口鯛二

菊もみちまたさかりあるわか庭に
こゝろおかるゝけさの霜かな

池水鳥　遠山英一

折々にきてはおそへるみつとりも
いけにかふとや人はみるらむ

山時雨　岩崎勝從

そめのこす木のは尋ねてけさも又
山めくりするしくれなるらむ

山家鳥　蜂須賀随子

ひとりすむ我をいほりに殘し置て
深やまをいつるあさからす哉

野邊霜　前田朗子

打わたす野中のみちのかれくさに
しものはなこそ咲そめにけれ

冬興　柳原愛子

一つきのさけに寒さをわすれつゝ
ゆきの山をもつくりけるかな

新嘗祭　小池道子

千よろつの靑人くさにかはりても

にひなめまつり事へますらむ

庭殘菊　南郷柳子

咲のこるにはのしらきく袖かきの
うらなつかしく匂ひけるかな

行幸　岩崎寧子

御いくさをみそなはさんと風荒き
とち木の野へにいてましに劍

森落葉　田中瀧子

里の子か落葉かく見ゆかしの實も
をり〳〵ましるもりの下みち

冬燈　中村禮子

うちけふる大ちのしもに宵なから
曇るもさひしのきのともし火

社頭殘菊　服部磯子

神かきのさかきに霜の見えなから
なほしらきくのうつらさり鳧

殘菊宴　土井榮子

御めくみの露そふ菊のさかつきを
とりてものこる花をみるかな

○大瀬誠一郎君が外國へ物學し給ふを送る

下田春興

もの澤に大瀬の君　玉あへる橋きわかせか
とつ國の濱によるてふ　眞白珠ひろひまさむと
そこひなき學びの海に　舟出せすけふの別に
待て暫し吾が思ふ事の　一言を君にまをさな
とつ國のまなびの海は　朝はふる浪立ちさわぎ
夕はふる風吹きすさび　かにかくに越えうきそ
よしゑやし浪は立つとも　よしゑやし風は吹く共
學柱立てしこゝろを　はにあけてゆるぎまさずは
たはやくおもふ港に　はてずあらめやも

反歌

とつ國の學びの海のましら玉
かざして歸るときをこそまて

〇夕霧

宇治の山人

夜ごと朝毎棚雲に
戀しき心懸け添へて
殘せる人の俤は
朧に見えてはかなかりしを
夕浪千鳥鳴く磯の
故里は砂原荒はてゝ
歸りて身のみ彳ずめば
いづこに戀の影やある

戀は苦しと人はいへど
戀は悲しと人はいへど
いとしき君を思はゆを
禁めし神はおかりしに
さながら兒らは言痛も
何しに旅にやつれけむ
更けゆく閨にわびさせつ
往ぬも千歳にともなはで
堪へ得ぬ胸か霧たちて
天地おほふ夕暮に
『能く似た笠』め通らまし
切めて狂うてわが眼もが

教の庭



十二月五日兼題

竹間霰

天

霜こほるたけのはやしの玉あられ
　たまにくたけてたまそみたる丶

埼玉縣武州川越町三十番地　前野壽賀子

評曰、趣向おもしろく韻力あり一ふし秀たる歌といふべし

地

あられふる竹のはやしのむらすゞめ
　むれてなく音もかしましきかな

東京市芝區白金臺町　松村あさ子

評曰、はたらきあるよみさまかいなでならず

人

かけさむきつきは雲間をかつもれて
　あられふるなり小野のたかむら

東京市本郷區本郷三ノ八　璥島うた子

評曰、寒夜のさまよみ得てよし

甲之部

かしましき夜半のあられに夢さめて
　いと丶ふしうきたけのしたいほ

大阪　大坂谷新子

小さ丶はらわけゆくそてに風さえて
　あられふるなりわしからのさと

東京　戸賀崎治子

むらすゞめねくらにしめしくれ竹の
　よぶかきまどをうつあられかな

青森　柿崎秀子

乙之部

わかやとのまかきの竹のよもすから
　ゆめおとろかしふるあられかな

筑後　鏡山增代子

霜こほるまとのむらたけかせさやき
　たまとみたれてあられふるなり

東京　戸賀崎久子

まとちかき小さ丶か上におとたて丶
　たまりかれてもちるあられかな

東京　戸賀崎梅子

まと近きいさ丶むらだけうちそよき丶
[illegible]

栃木　青木たま子

たまとも見ねてあられふるなり

千代ふへき竹をねくらのむらとりも　大阪　橋本ふく子
いかにわふらんあられふるよは

さらさらと竹のはやまにおとそへて　埼玉　前野ふさ子
ふしおもしろくふるあられかな

しつかなる我かくれかのたかむらに　京都　坪内りき子
おともあられのふりしきるなり

おこたりのこゝろくたけと竹の葉を　長崎　八尾いへ子
うつおとさむくあられふるなり

とふ人もなきわかやとはたかむらの　東京　高橋野利子
あられのおともうれしかりけり

さひしさのいやまさるかな玉あられ　東京　高橋津音子
をさゝにさやくおともきこねて

夜をふかみとりもこゑせぬたけむらに　東京　北島功子
あられはたしるおとのはけしさ

雲さわく峯のあらしにさそはれて　札幌　山田靜子
あられふるなり小野の竹むら

さら〳〵と音はすれともたかむらに　熊本　日高かす子
あとものこさぬたまあられかな

夢さますまとのむらたけうちなひく　東京　牛山楽子
かせのかへしにふるあられかな

竹むらにやとるすゝめをおとたてゝ　三河　河合ぬひ子
うちおとろかすたまあられかな

まとちかき竹にたまちるおとはして　東京　積山鏡子
ふゆの夜さむくあられふるなり

ふるおとはさたかなりしを竹のはに　岐阜　吉村せい子
あとかたもなき玉あられかな

うきふしのたけのまかきに風さねて　和歌山　瀬戸榮子
あられみたるゝおとそさむけき

まとのとの小笹に殘るしらつゆに　東京　椎野ぬき子
あられみたれてたまとちりけり

よひのまのあめや霰にかはりけん　東京　椎野蘭子
まかきの竹の音そはけしき

このあさけ竹の下道わけくれは　埼玉　横田音羽子
袖にこほるゝ玉あられかな

月かけはなり〳〵見ねてものすこき　東京　近澤和子
竹のはやしにあられたはしる

まとのとの竹のはやしに音たてゝ　茨城　荒野たに子
かしまかしくふる玉あられかな

山かせに竹の葉さやきはら〳〵と　東京　平尾あさ子
ふりくる物はあられなりけり

霜氷るわら屋の影のむら竹に　東京　片山あや子
みたれてさわく玉あられ哉

たかむらに光り見ゆれと玉あられ　東京　片山ふみ子
はわけのみして影はとまらず

冬深みさゆるあらしにさそはれて　東京　戸塚てつ子
たけのはやまにあられふるなり

いろかへぬ竹のはやしにふく風の　東京　川村松子
音かと見れはあられふるなり

竹の葉にこほりてむすふ玉あられ　東京　吾妻ちか子
かせにもちらぬ物にそありける

むら雲のたつよと見れは音たてゝ　東京　内田とく子
さゝの葉はしる玉あられかな

こからしにいさゝむら竹さら〳〵と　横須賀　上田まき子

葉わけしてちる玉あられかな

夢むすふひまこそなけれさわかしく
あられふりくるまとのくれたけ　肥後　德永萬壽子

さら〳〵とそのふの竹におとたてゝ
ふるやあられのおもしろきかな　三河　永井さい子

かしましくねむりさましてまと近き
竹のはやしにあられ降るなり　山口　田村多豆子

くれ竹にしめしすゝめのねくらをも
うちおとろかしふるあられかな　松山　上原のふ子

玉あられふりしくおとにねさめして
ゆめもむすはぬたけのしたいほ　肥後　千知波楯子

ひ桶いたき文よみをれはおとたてゝ
あられふるなりそのゝ竹むら　伊勢　池田梅子

あかすみし千草のはなもうつろひて
あられたはしるそのゝたけむら　岐阜　佐藤蒼生子

千代となくすゝめの聲もしつまりて
たけのはやしにあられふるなり　熊本　田代綾子

むらすゝめさわくを見れはわか庭の
たけのはやしにあられたはしる　和泉　稲原菫子

風まぜにあられふるなりたけはやし
ねさめのゆめをおとろかしつゝ　東京　林環子

そよとふく風にもさやくなよたけに
あら〳〵しくもふるあられかな　秋田　三浦ふさ子

かせわたる竹のはやしはともすれの
おとにましりてふるあられかな　秋田　三浦さわ子

こゝろさへくたけぬるかなわか宿の
のき端のたけにあられふる夜は　大阪　伊勢村春子

しくれかとおもへは軒のたけむらに
おとかしましくあられたはしる　大阪　伊勢村花子

ものゝふの弓矢となれるたかむらに
あられたはしるおとのはけしさ　肥後　田代甌子

風はやく千々にみたるゝたまあられ
おとおもしろき庭のむら竹　東京　北岡美代子

くれ竹の葉末なひきてかせさやく
まとにみたるゝ玉あられかな　東京　北岡文子

かせそよく軒はのたけにたはしりて
ふるおとさむきたまあられかな　神奈川　田邊房子

竹むらにあられふるよはさわ〳〵て
すゝめもゆめやむすひかねらん　熊本　德永下枝子

かせさやく小笹かうへにひとしきり
ふるやあられのおとのはけしき　肥後　志方圓子

さや〳〵とゆふかせさやく笹の葉に
こほるゝたまはあられなりけり　肥後　德永雪枝子

うきふしのうき世もしらぬたけの庵に
おとおもしろくあられふるなり　肥後　坂本竹子

風さやく小さゝかうへにおとたてゝ
ふるやあられのたまそたはしる　肥後　坂本美智子

我やとのたけのしけみをふくかせの
おとに合してちるあられかな　富山　長谷川初枝子

丙之部

吾かやとの竹にみたるゝ小夜あられ
いかにすゝめのゆめやうつらん　長門　岩田章子

あられふるしつかさゝやの夕くれに
ねくらもとめてすゝめなくなり　東京　高橋松江子

物おもふわれそかなしきさすたけの　大阪　橋本ふさ子

葉わけにあられふりしきるよは

かせましり我家のにはのくれたけに
あられたはしるおとそわひしき
大阪　橋本しか子

小夜ふけてしつけきにはのくれたけに
あられたはしるおとのさやけさ
東京　清水はるみ子

みし夢もさむるはかりにおとたてゝ
あられふりくるまとのたかむら
三河　本多きさ子

あられふる竹のはやまにたつとりは
今朝しらたまやまつあさるらむ
東京　山本梓子

くれ竹の葉すゑそよきてふくかせに
くたけてたまとちるあられかな
東京　山本茂子

とふ人もなきわかやとはたけのはに
ふるあられさへおとそさひしき
筑後　宮崎しけ子

竹のはにふるやあられのくたけすは
さなからたまのねたにこそみめ
筑後　武田そとよ子

たまさかに友とかたらふこのゆふへ
まかきのたけにあられふるなり
雲洲　岩倉依子

やとりてしすゝめも今朝は聲たねて
たけのはやしにあられふるなり
埼玉　横田秋子

むらすゝめうまいの夢やさむからむ
たけのはやしにあられふるなり
東京　篠田圓子

あられふるまとのたかむらふく風に
みたるゝ玉の音を聞かな
茨城　内田さた子

在あけのつきかけさむくたけのはに
あられふりつゝしらみそめけり
東京　三好珍子

おもしろく竹の葉末をまとひつゝ
玉とみたれてちる霰かも
札幌　山田婦美子

くれたけにふりかゝれども葉わけして
すかりもあへぬ玉あられかな
相洲　岩橋花子

あたな追ふこまのたつかみたはしりて
あられみたるゝゐなのさゝはら
東京　大川ふく子

さら〱と笹ぶつおとのきこゆるそ
かせにみたるゝ霰なりけり
廣島　春野靜子

いなやすくねられさりけり我の
たけにたはしるよはのあられは
肥後　吉富榮子

大そらのつきのしつくとおもふまて
かけさすたけにあられふるなり
大阪　谷信子

たけのはにいつか時雨の音かへて
はなとみたるゝたま霰かな
東京　椎野銑子

葉かへせぬ窓の小笹にをとなふは
よふかきほとのあられふるらん
東京　椎野清子

のきちかきまとの呉竹かせすきて
またおとつるゝたまあられかな
東京　椎野秀子

よもすからあられ降くるおとしけく
ゆめおとろかすにはのむらたけ
肥後　德永多瑠子

音のみはさやかなからもくれたけに
みたれてかくるあられさひしも
肥後　德永廣子

なよ竹の下にたゝすみものおもふ
わかころもてにあられたはしる
横須賀　中山ふみ子

こそたちし人はかへらてなよたけに
あられみたるゝおとそさひしき
東京　朝倉とめ子

くれ竹にふるやあられのつもりなは
たまの枝ともてはやさまし
山口　村上操子

たけむらの葉わけの風もたゝならぬ
廣島　衣笠澄子

おとこそすなれあられふるらし

いくみ竹よたけそよきてかせさむし　肥後　佐々有鄰子
あられたばしるゆふくれのそら

やとしめしすゝめの聲もいとさむし　肥後　佐々小琴子
あられたばしるその丶たかむら

さらでたに風さわがしき竹むらに　伊豫　吉亘貞子
ふるや霰のおとそきこゆる

いと安く居られさりけりまとの外の　東京　永井さき子
おさゝさやきてあられふる夜は

おもしろく小笹をつたふたまあられ　伊豫　小田操子
しばしうきふしわすれはてけり

風さやく小笹か上にふる霰　肥後　松井みは子
矢をいることくはけしかりけり

十二月五日兼題

入營する新兵の母に送る文

天

長崎市新町十三番地　八尾いへ子

一男の君には、今年二十にみたせ玉ひて、先づ日の檢査のをり、たけ高くいとすこやかなる男の子も數多きが中に、甲の一番にあたらせ給ひしとなん承る。かゝる御子持せ玉ふ刀自の御心のよろこび、いかばかりと、おしはかり侍るになん。いよ〳〵來ん何日營地にむかはせ給ふよし、御自らの御こゝろは更なり、此玉の浦わもこよなき面目にこそ。されど刀自には召使ひ玉ふ人のすくなければ、何かにつけて御心細うおぼし給ふらんも多からんめれど、そも〳〵我國の兵制はかしこけれど　上御自から統御あらせ給ひ、一日も兵權を臣下に委ね玉はぬは、神代のまゝにして、種々に治め玉ふ政の中にも、いと大切におはす御事に侍れば、草むすかばね水つくかはねのと古き歌のごとく日本男の子は、必らず一度は兵に召され、御國のみたてとなりて、限りなき　大君の御惠にむくい奉らでやは。不幸にて此召にもれつる人の心や如何に侍らん。されば男々敷刀自へ申さんはなめけながら、御子の行かせ玉ふ地は程近き大村となんあれば、行かひもをり〳〵のおとなひもやすくこそ侍れ。御心ないためたまひぞ。やがて昨日と過ぎ今日と暮して、あす川の流るゝ月日に關守なく、三年を送る、夢の間に恙なう御務め終へ玉ひ、兵の等もへのぼりて、めでたう歸りきまさんを、御心のとがにまたせ給ひねかし。御門出の御祝にまで鰹節一連御目にいれまつる。何れ近きに

はどにたいめ仕りよろづ御よろこびきこえあぐべくなむ。

評、入營の兵士に對しては、勇氣を鼓舞し、その母なる寡婦に向ひては、慰籍の情を送る、紙表氣力あり、筆底血涙なりといふべし。

地

長門阿武郡椿郷東分村　杉　道　子

近々のうち、いよ〳〵御寵子俊夫樣、御入營遊ばさると、うけたまはり侍る。げに勇ましくも、芽出度しや。風清く空すみ、四方の山邊の紅葉の錦華やかに、大和心とうるはしく、垣根にはふ白菊も、君が外出を壽きて、後の思ひ出にせばやとにや。心なきものまでも、祝ひよろこぶことこそいとかしこく、たのもしうはべれ。黄金の花の、穗に穗の咲き出で、國の豊をみするなる、八千代ことぶく椿村、さらでだに慶しかるべきを、み國の守りの兵士にと、花も實もある丈夫を得たることの御悦びは、そも如何に。阿武の河水、それの千尋もたゞならめや。鐵石心の勇士が、忠と義とに凝りし身を、雪にうたれ、月に浴び、君の御爲め國の爲めと、心一すじに、磨き錬ひつゝあるものを心なき人は、瑤臺樓上歌舞の裡に、つたなき夢を貪るしれものゝあるぞうたてき。あゝうとましや、かゝる怠弱の男子にこそあれば、富士川の水鳥の羽音に、あわてふためき平家の兵ものゝごと、男子の面をはづかしめ、み國の光も汚すなれ、あな不吉〳〵由なきことを申し侍りし罪ゆるし給ひてよ。

さあれ聲しの兵士一旦、日の本の御旗にそむくものあらば、この時ぞ、幼なかりけるときより、さがしく、勇ましく、おはせし俊夫樣ぞ、第一に、八重の潮路を乘り越えて、み國の太刀にはふらふ敵もなく、雲霞の軍を打ち破り給ひ、やがて日の丸の旗を世界に輝がやかせ、げに兵士の鑑と稱せられ、多き名譽を身に擔ひ給ひてぞ、山青く水白き秀麗ある椿村に錦を飾り給はむこと、母上の君はいふも更なり、妾の如きに至るまでげに芽出度く賴もしうなむ。御賢子の御かどで、千代こめて祝ひまつらむ、高くそびゆる藤生山も萬歲とこそ祝ふめれ、めでたし〳〵。

評、かゝる送別の詞を聞きては、忠義に勇む若武者の、爭で功名の念にはやらざらん。

人

出雲國簸川郡稗原村　岩　倉　依　子

御館には此頃の、塞さをもいとひ給はで、いとすこやかに、渡らせ、たまふ由、目出度ぞんじあげ候。

御いそがしき、なかばを、御手植の塞菊わざ〳〵御持たせ被下ありがたく、存じ候。これも、猛雄樣の、日頃ろ御たんせい、あそばされし、ものよと思へば、此度の御別、一しほ名殘をしく愈明日は御入營の路にのぼりたまふ由、御伯母樣には兼て愛國心に富ませたまひ、日頃より國家の爲めならばと、御仰せ遊ばさるゝだけ、御心の内如何に、おはしるやと推し、參らせ候も、我が心に引きくらべて、いと御恥かしく存じ。此の襯衣と袢袴下は、夜な〳〵ともしびの元にて、縫上し物に候へば、不體裁には候へ共、心ばかりも、召させたまはり度持たせ上候。まづは御よろこびまでかくなむ。

評、勇氣に乏しきところはあれど、惜別思慕の情哀れに聞ゆ

當選以外の文章は紙數の都合により本號に限り揭載を見合はせたり切に投稿諸孃子の御宥恕を乞ふ

辛く動きて甘く眠れ　獨逸俚諺



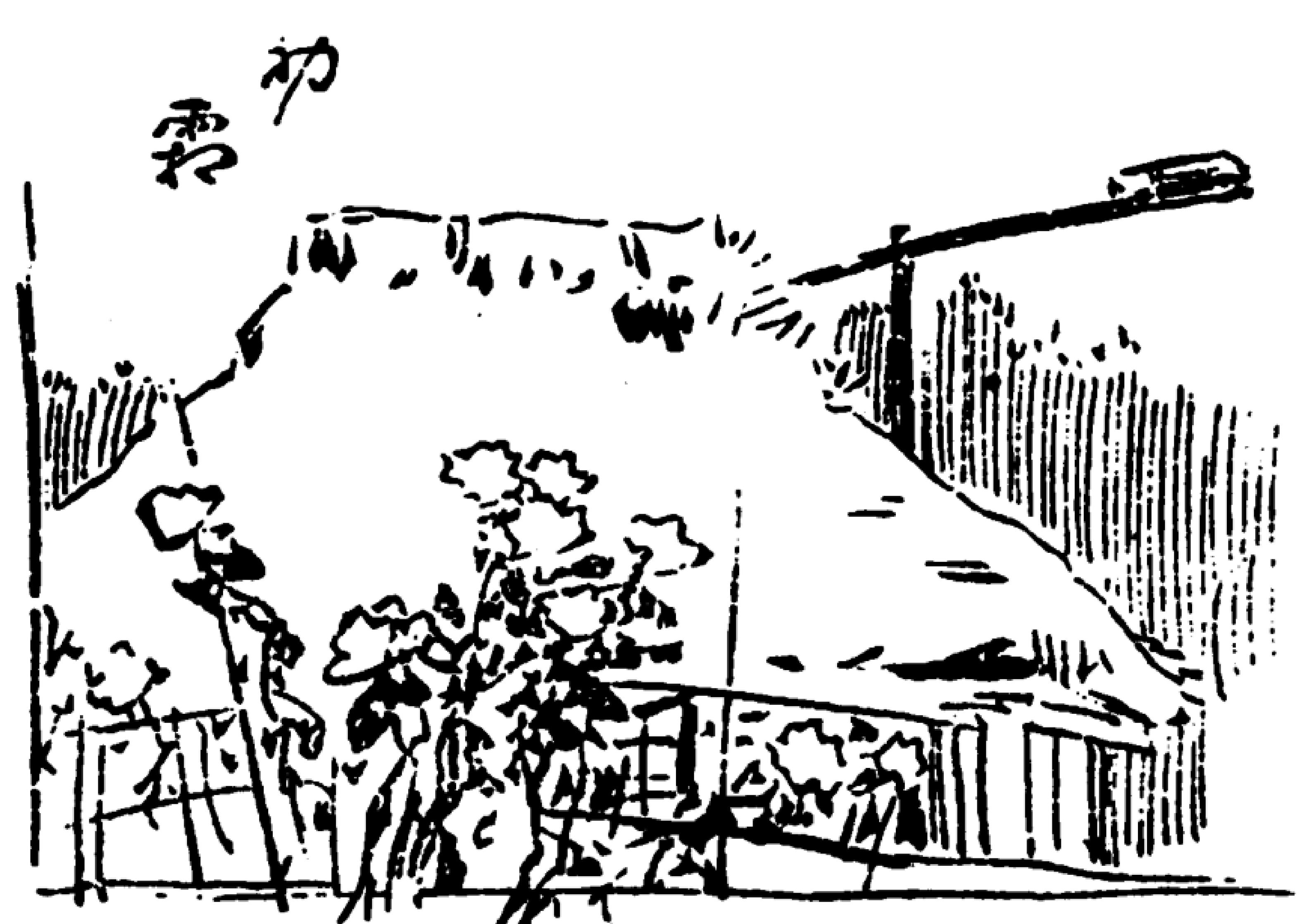
○山階宮御成婚式

海軍少佐勳一等功五級山階宮菊麿王殿下には十一月廿六日の吉辰をトし島津忠重公御姉君常子の御方と御婚儀の大禮を擧げさせられたり今當日の御模樣を承はるに富士見町なる宮殿下の御邸にては午前五時より近藤家令、香川家扶、中館、杉山、田頭、牧各家從は諸般の御準備に從事せられ五時三十分を告ぐる頃妃殿下御列馬車の參着あり近藤家令は御迎使として同四十分袖ケ崎島津公爵邸に參向同邸表座敷にて後見人珍彥男、山本家令の迎接を受け同七時頃儀仗兵近衞騎兵半小隊前後警衛の警部等參集ありしが妃殿下には朝來御身仕舞ひ

の上御近親に御挨拶あり五ッ衣を召され同七時三十分御出門賢所に御參着あらせられたり又菊麿王殿下には御束帶にて釜屋御附武官御陪乘富士見町より二重橋正門に入らせられ三角門千里門、道灌門を經て賢所通用門に御參着遊ばされ同時に閑院宮載仁親王、同妃智惠子、久邇宮邦彦王、梨本宮守正王、同妃伊都子各殿下を始め德大寺侍從長、田中宮相、同夫人、松方伯、同夫人、土方伯、香川皇后宮太夫、花房次宮、三宮式部長、同夫人、渡邊內藏頭、島津公後見人珍彦男、堤內匠頭、長崎調度局長、小笠原主殿并びに伊藤式部官（宮內省奏任總代）は參列の爲め賢所前幄舍に參集ありしが伶人の奏樂中に賢所皇靈殿神殿御開扉竹屋掌典以下神饌御幣物を供し岩倉掌典長の祝詞あり王殿下妃殿下には賢所御拜の上御告文を奏し御神酒を拜受せられ（此時青山練兵場にて陸軍の祝砲あり）畢つて御退出茲に御成婚の式を濟ませられたりかくて兩殿下には御同車にて富士見町御本邸に御歸着あらせられ正午表御殿に於て御媒妁田中宮內大臣、同夫人伊與子の方、近藤宮家令、釜屋御附武官侍立の上供膳の式を行はせられ田中宮內大臣、同夫人より御盃を進められ、了りて御先代晃親王の御靈殿御拜あり引續き御近親武彦王、芳麿王安子女王各殿下に御對面珍彦男に拜謁仰付けられ宮內大臣、同夫人、近藤家令、釜屋御附武官の御祝詞を受けさせられたり



午後一時　天皇陛下には北條侍從を勅使として同邸に差遣され御祝儀として白羽二重五匹、鮮鯛一折、酒一荷を王殿下に紅白縮緬二匹を妃殿下へ賜はり又　皇后陛下には御使として北島權掌侍を差遣はされ白羽二重を賜はり猶皇太子　同妃兩殿下よりも御使を遣はされ御祝儀御贈進あり兩殿下には一々勅使御使に御對面御懇篤なる御挨拶あらせられ午後二時三十分兩殿下御改服あり王殿下には海軍少佐の御正裝に勳一等旭日桐花大綬章を御佩用妃殿下にはマント、ド、クールの大禮服を召され御同車御出門宮城へ御參內三宮式部長の御先導にて桐の間にて御休憩の後鳳凰の間にて　兩殿下に御對顔御杯を受けさせられし後　皇后陛下より勳二等寶冠章を



妃殿下に授け玉ひ了つて兩陛下には直に芝離宮に向はせられ午後七時より有栖川宮威仁親王、同妃慰子、閑院宮載仁親王、同妃智惠子、小松若宮周子、華頂宮恭王、同妃經子、久邇宮邦彥王、梨本宮守正王、同妃伊都子各殿下を始め田中宮內大臣、同夫人、德大寺內大臣、松方伯、同夫人島津忠濟公、同珍彥男、三宮式部長、同夫人、伊藤有栖川別當、島津同家令、花房閑院宮別當、丹羽小松宮家令、萩原華頂宮家令、小藤久邇宮家令、日高梨本宮家令、長崎調度局長、同夫人外四十餘名を御招待御披露の御晩餐會あり兩殿下には八時過御歸邸、同三十日より御本邸に於て三個夜の餅の御儀式ありたりと

○山階宮妃殿下の叙勳　山階宮妃常子殿下には

王殿下と共に　兩陛下に朝見の際　皇后陛下より左の御内旨ありし後勲章を御親授あらせられしと

勲一等功五級菊麿王妃　常　子

叙勲二等授寶冠章

因みに記す妃殿下には本年二十九歳にならせられ御容姿秀麗夙に御淑德の御令聞ありしが御家庭にて御修業あらせられ習字は大迫藤十郎氏に歌は初め税所敦子刀自に後ち鈴木基資氏に茶は瀧開藤右衛門氏に花を羽生愼翁氏に畫は佐藤ぎん子に英語はウオリングトン、岡見けい子の二人に琴は福岡千代子に就き御研學遊ばされ萬づ御堪能に渉らせらるゝ趣なりと承る



○學生々徒の敬禮法

帝國教育會は曩に文部省より諮問したる學生々徒敬禮法に關し評議員會を開き左の如く決定し直に之を答申せり

▲立禮、男子普通の立禮は姿勢を正し帽を右手に持ち兩手を垂れ体の上部を少しく前に傾くるものとす最敬禮にありては兩手を膝の上まで下ぐべし女子の立禮は男子に準ずるものとす
御眞影を拜するときは御室に入り最敬禮を行ひ更に指定の場所に進み最敬禮を行ひ其儘に三歩退きて右旋し御室の出口に於て最敬禮を行ひ然る後退きて退歩す但多數一同にて御眞影を拜するときは一齊に最敬禮を行ふものとす、途上に於て行幸啓に逢ふときは前驅の稍前より道路一側に停止正面して帽を脱し車駕六歩前に近づかせらるとき最敬禮を行ひ六歩過ぎさせらるゝまで此姿勢を保つべし

▲坐禮、男子普通の坐禮は兩手を八字形にして膝の前に置き体の上部を前に傾け頭を坐面より凡五寸の所まで下ぐるものとす女子の坐禮は男子に準ず

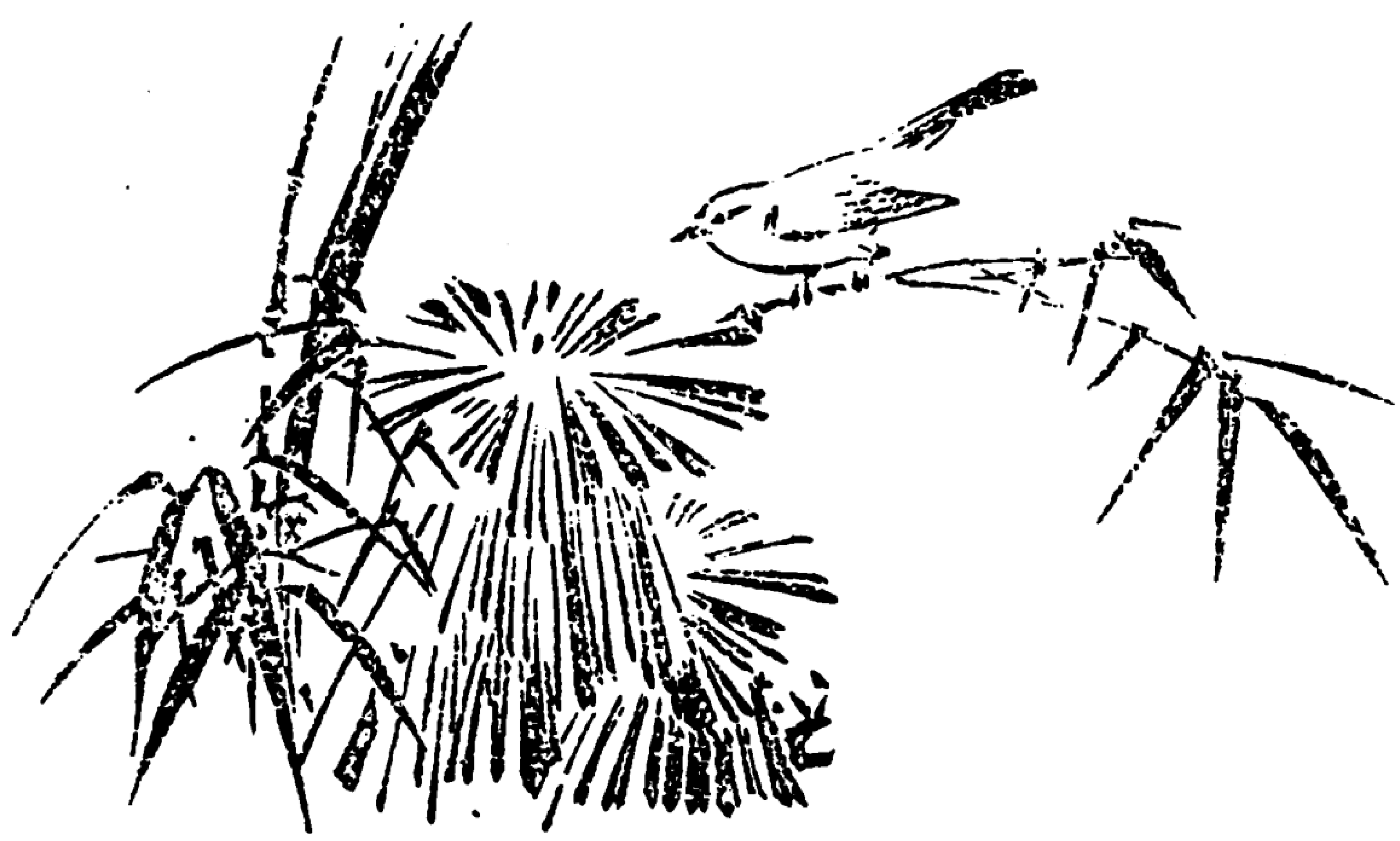
○女藝學會の設立

女生に於ける淑德の美を高め浮華の風を矯め且つ女流に關するあらゆる手工

技藝の發達進歩を計らんとの目的を以て今回遠山景福氏主幹となり女藝學會なるものを設立し此が機關として女藝雜誌の再刊を計畫し小杉文學博士及佐方鎭子後閑菊野子谷田部順子等の各高等女子師範學校教授を始め女子職業學校女子美術學校等の講師其他各專門諸大家の賛助を得たるを以て大に同誌の紙面に改良を加へ去る二十五日第二卷第一號を發行せし由

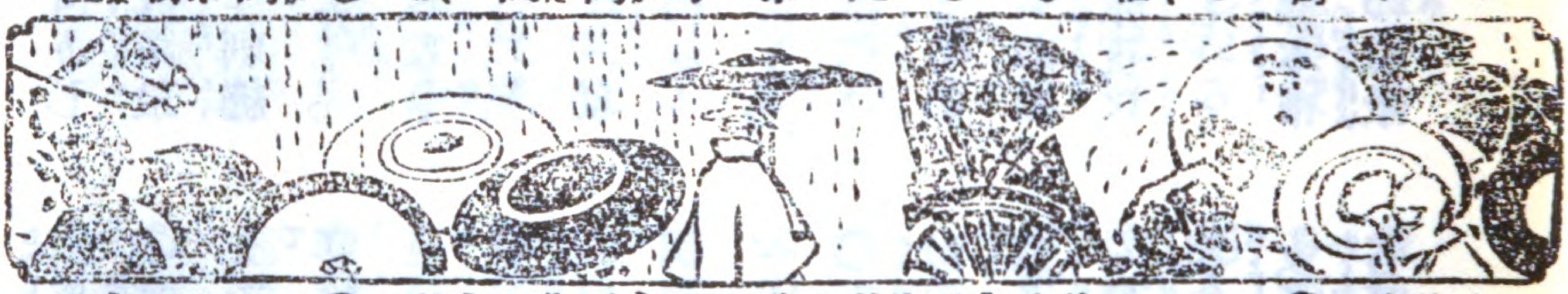
○女子共濟修藝會　東京裁縫女學校出身の松江美佐子は下谷入谷町に女子共濟修藝會と云ふを設け親切に裁縫を教授し會員等は家族的生活を營みつゝ皆な熱心に其技を修め居れりと

○女學校の尚齒會　大阪府立清水谷高等女學校にては去る十六日午後校友會の催しにて音樂、談話の練習會を開き尚齒の氣風養成の爲父兄保護者中より六十歳以上の翁嫗百餘名を招待せり教室内には博覽會出品の生徒作製品、統計表割烹品等を陳列せり尚大村校長は我國家庭動もすれば老者少者の間柄新舊思想の衝突を招き家内不和の場合なきにあらざれば老若相調和して扶掖し殊に一家の主婦等は此に注意すべしとて尚齒會を開ける所以を演說したりとふ



○名譽の翁嫗　大元帥陛下には九州より還幸の途次一昨日舞阪行宮に御駐輦あらせられしが其際國歌の献詠並に製作の文庫献納の榮を辱うしたる名譽の老翁と老嫗あり

翁は同市一番町百二十七番地長谷川龜太郎の父平助(七十四)と云ひ代々鞘師を職とし砥屋町に生れ名工の聞へ高く若年の時加州侯の用簞笥仙臺侯の硯箱などを鮫皮研出にて製作したる事ありき今回獻上の榮を得たる文庫は今宿にて捕獲したる鮫の皮を用ひ丹精を凝らして製作せしものにして老腕愈々冴えて美事なるが特に市にて之れを買ひ上げ獻上の榮を得たるものなりと又た國歌を詠進せし老媼は同市西草深町百九十九番地の士族中林行篤の祖母中林ゑん(九十三)と云ふ高齡者にして行篤は靜岡區裁判所登記所の書記を奉職し妻あつとの間に一男二女あり最と睦ましく暮し居りゑんば九十三歳の高齡なれども身體頗ぶる壯健にして曾つて眼鏡を用ひしことなしと然るに靜岡市の住民中最年長者の故を以て特に國歌詠進の御許聽を蒙りたれば老いの身の愈々感泣



して自製の緋綾綸子の服紗をも獻上したりと名譽の事にこそ

◎女子東京美術學校開校式　神田仲猿樂町の女子東京美術學校は廿二日新築校舍落成式を兼開校式を擧行したるが來賓は岡府視學官本莊子爵、福岡秀猪、三浦安、三井八郎二郎、其他の諸氏二百有餘名にして午後一時振鈴と共に樓上の式場に着席し君が代の奏樂に次で藏原校長は敎育勅語を捧讀し次に湯本前校長の祝辭藏原新校長の式辭演説、辻帝國敎育會長、井上博士、府知事代理岡視學官、市長代理山田市敎育課長等諸氏の祝辭演説あり終て茶菓の饗應あり午後四時過散會したり

◎女子東京美術學校展覽會　前項に記したる同校にては開校式に續きて、廿三、廿四の兩日間、生徒の製造品を階上階下に陳列して展覽會を開きたり。兩日とも參觀者の非常に込

み入りたる爲め、一々製品を詳見する能はざりしも、概して創立日尚ほ淺きにも拘はらず、成蹟最と優れて見えしは欽ぶべし、殊に繪畫と西洋刺繡とは見事なる出來にて、造花と編物もまた巧なり。裁縫及寫眞は未だ見るべき程のものとてはなきも、是は元より日淺が故なれば追々發達するは、無論なるべし。但だ習字に至りては拙劣にして、幼稚なるを免れざるは、聊か遺憾の感なきを得ざりき、賣品掛りの女生が白襟、海老茶袴の打扮にて、周旋の勞を執りて馴々しく應接する樣は、如何にも目立ちて見え流石は文明的女流と稱讃するもあれば、餘りに態度の巧妙なる爲に壓氣に取られたる人もありしが如し。兎も角此の展覽會の景況によりても同校將來の盛運を卜するに足るべし。

○可愛らしき贈物　九州の大演習に就き熊本市に滯在せし各國武官に對し同市にては縣下の風景寫眞及び毛布を贈りしが師範學校附屬小學校よりの贈物は最も愛らしき者にて女生徒の手に成れるよだれ掛を又女子高等小學校よりも同じく生徒の手に製せられし巾着を贈る筈にて目下製作中なりといふ又市内の四幼稚園よりは大なる花籠に園兒の持寄りの菊花を亂挿し四五名づゝの愛らしき園兒附添ひ歐米武官旅舍へ三個清韓武官旅舍へ一個を去る十三日贈りしといふ、好き思ひ付といふべし

○東京府教育上の新施設　東京府は來年度より教育上の施設を擴張するの計畫にて從來師範學校より期を定めて郡部に出張講習會を開きしを廢止して教員の實力を研鑽せしめ師範學校豫備科生徒を全部寄宿舍に收容して品性の修養に勤め女子師範學校第二第三の各府立中學校第一第三の各高等女學校は校舍の擴張と共に生徒を增員し

第一第三第四中學校には外國語を正確に敎授するの目的を以て外人敎師を雇聘し且つ女子師範學校附屬小學校幷に第四中學校は建物稍や朽廢したるを以て校舍を改築し且つ全校を通じて敎員書記等を增補するの豫定なり然るに八王子の染織學校は從來同町の私立に係り國庫及府の補助を受け居りしを府立として維持せんとの議あり又昨年府會の建議に成りし工業學校新設は專門家に囑托して設立に關する諸般の準備を爲さしめ居れりといふ

○四十七年勤續せし老婆　麻布區東鳥居阪町九番地に宏壯なる邸宅を構え辱くも畏き邊の至高顧問府の一員に列り給へる大鳥圭介氏方の老女中西てつ(七十五)と云ふは男爵夫人の乳母にして襁褓の中より身に引受けて心盡しの數々は云ふまでもなく戌辰戰爭の際には夫人を扶けて難を千葉に避くるなど四十有七年の長の間一日の如く忠勤を抽でたることは前頃の本誌に詳しく記したるところなるがてつは其後男爵始め家内の人々より手厚く待遇し居られたるが寄せ來年波には敵し兼ね、本月十一日午前六時眠るが如く黃泉の旅に赴きたれば男爵は深く生前の功績を思ひ自ら

　幾たちのをさな子そだて朝夕に
　　家のすぎはひつとめしぞなり

との一首を詠し佛前に手向け鄭重なる佛事を營みたる上遺骸をば芝區松阪寺の寶德寺に埋葬されたりとぞ

○老女　去る廿七日の午前十時頃一人の老女杖に縋りつゝ麻布區役所へ出頭し受附係員に向ひて自分は麻布本村町五十七番地質商石井良平の養母ゑい(七十一)といふものなるが斯く老年となりては何時亡き人の數に入るやも測られざれば切めては生前に於て聊かなりとも公學資金の一分なりと寄附

したきも何分其手續をさへ知らねばとの奇特の申立に受附係員は懇に手續を示し猶區長長岡往來氏に上申せしが老女ゐいは軈て整理公債證書額面五百圓を區內學校基本金として寄附せり依て區役所に於ては直ちに是れが手續をなしたれば近日區會を開き受領するや否やの質問會を開くよしなるが今石井ゐいの身の上を聞くに同女は石井萬次郎の妻となり從來質商を營み居りしが本夫萬次郎は去る二十二年一月二十二日病死し不幸にも夫婦の間に一子なきより現今の戶主良平によしといへる夫婦養子を爲したる、良平夫婦にも子供のなきより先年府下豐多摩郡中野村の親類高野兼吉の次男慶造(二十)を養子として家內睦ましく暮し居る者なる由いづれにしても奇特の事といふべし



○米國婦人の職業　最近の統計に據れば米國婦人の辯護士たるもの千九百名醫士たるもの七千三百九十九名齒科醫たるもの七百八十七名雜誌業に從事するもの二千百九十三名建築技士は千四百名電氣技士は四百九名郵便配達は三千四百五名鐵道機關士は四十九名獵師は千三百二十名寺院の番人は九十一名葬式掛は三百二十四名あり其の外雜業を營むもの夥し

○幼稚園と近視眼者增加との關係
近來歐洲諸國にては近視眼者の數著しく增加したる由にて眼科醫は其原因に就きて切りに調査中なるが倫敦キング、スコレージの眼科敎授マックハーヂーの說に據れば斯く近視眼者の增加したるは現時の幼稚園制度の然らしむる所にして幼稚園生徒が光力の

不完全なる室に在りて種々なる色紙に視力を費すは非常に害あるなり余の調査したる所にては近視眼者は幼稚園の設けある大市街に多く少年の時に視力を讀書等に多く使用せざるものは視力の優れるを見るなり云々と

○最も價の貴き手巾　外國雜誌の報に據れば世界に於て最も高價なるハンカチーフを有する人は伊太利のマーグリタ皇后にして其手巾は純粹なるヴェニスのレースにして十五世紀に造られたるものなれども新しきものに異ならず其價は二萬乃至三萬圓ありと云ふ

○新年の晴衣

明治三十六年の年頭を飾るべき晴衣の流行を三井呉服店にて豫想せし處を左に紹介すべし

◎流行の色合　流行の變遷常ならざる内に其重なるは色合なり今日の流行は概して濃厚なるものを好み栗梅、葡萄、紫根、錆葡萄、鐵納戸、淡黒色錆鐵等最人の好みに投せり斯く黒染みたる所謂寂びたるものを好むに至れるは全く世人が彩色の配合に注意するやうになれる結果あるべし何となれば若し色の黒き人に從來の紫、藤色若くは小豆色の如き冴えたる色を用ふる時は分けて其顔色を見惡くするの傾きあり而して濃厚なる色は色の白き人にも能く適合するが故なるべし

◎令孃向　禮服用としての好みは何れ裾模樣にて地色は小豆色、紅掛色、空色、花葡萄等なり模樣に依りては曙染が相應しかるべし是れは年頃の人に映り好きのみならず華美にして立派に見ゆるものなり又地落染にして其模樣を極く鮮明に染上げたるも好し、例へば黒地へ一面に雪の積れる紅梅或は松の木を大きく白上げに染め其上に紅葉蔦を絡ましたるなどは遠見も好く近づくに從ひ愈々

美し地質は縮緬が第一なり併し小縐のものを選む方後々の保持善く模様の染上りも面白し兎角人は縐の高きものを好めども是は却て爲め惡し、（仕立上代價三枚重ねにて百圓前後）

若下着二枚を紋羽二重にする時は模様無しにて紋を置くなり是れなれば上着を脱ぎ下着二枚のみを晴着として用ふるも差支なからん（仕立上代價三枚襲にて七十圓位）

長襦袢紋羽二重にて紅の總疋田絞り（代價三十圓位）若くは無地の紋縮緬（代價十五圓位）等ならん

◎年若の婦人向　禮服は云ふまでもなく黒に白を襲ねるが正式なり下着は從來多く白羽二重を用ひたれど今日にては年若の人に限り紋羽二重を好むもの多し上着には裾模様を染上げるが正式なれども好みの向は江戸褄模様を用ふるならん（仕立上代價七十圓前後）



次に色物を用ひんか色合は湊鼠、薄栗梅、鍋島柿、栗梅、鰕鼠、鐵納戸、生壁、海老茶等にて三枚襲ねにすべし此裾模様は地落染が此年頃に適當し亦た今日の流行なり曙染は不適當なる故に昨今は廢れたり模様の付け工合に儀式服として、裾廻り一面に染出したるものあれど少し意氣に見せんとなれば江戸褄模様となし奧身と前身へ掛け後身には一二寸許少々掛け染出したるが好し（普通のは後身へ掛けぬが本式なり）一體に是れまでの如く繁雜なる模様のものは婚禮等大層なる儀式の

外更に用ひざることゝなり極く淡白なるものにて白上りに近き模様を用ふるが普通となり型は大模様のもの流行し小なるは廢れぬ（仕立上代價七十圓位）

長襦袢　黒衣の下着に用ふるものは白に限る（代價十五圓位）尤も又色物或は縞物を用ふるもあり夫れなれば繪羽友禪（代價二十五圓位）若しくば普通の友禪（代價十五六圓）を用ふるを宜しとす帶は繻珍が第一の流行にて次は幽谷織あり（何れも代價五六十圓位）厚板（代價三四十圓位）綴織（代價二百圓位）の類又之に次ぐ、色合は前記色合の所にて述べたるものと異りなし併し着物の地色に依て帶の地色を選み配合善きものを用ふべし模様は昨今漸く外國模様を用ひ嶄新なる意匠を凝らせるが多し故に其人々の着付に應じて隨分面白き好もあるべし

◎中年增婦人向　禮服の正式は黒に白き襲ねを用ふること前に同じ、されど此年頃は兎角地味なるものを好むが故に黒の紋付に裾模様を付けざる人あり但し是れは新年の賀など吉事には用ひぬが宜し無地の點は凶事の時に限る是れは呉々も注意し置く處なり扨て裾模様は白の無地を三枚襲ね（仕立上代價六十五圓位）とするか又は色物を用ふるか先づ其邊あらん色物あれば地色は鍋島柿、生壁鼠、海老茶錆利久等相應しかるべし帶の地合は前に述べたるものと異りなしされど摸樣を選ぶ點には差違あり稍や地味なるものを用ふべし（代價三十圓位）

◎派手向　派手向の禮服は先づ小紋にて近來是れに裾模様を付けたるもの流行せり摸樣の付方は江戸褄に限る普通よりは丈高く染出し極めて鮮かに見ゆるものなり又往々刺繡を施し同じ白上りの模

樣なれば白絲を扱ひたるもの又は小紋へ白絲にて縫取りにしたるもあり但し繡模樣の流行は小紋に限らずして無地物にも用ひ又一寸したる縞物等に模樣を繡ひたるもあり中々意氣なるものなり扨て模樣の工合は今年の初めに比して非常なる變化あるべし例へば地色は總て地味なるものを好み模樣の方は反て派手なるものを用ひ而して模樣の付方は地色の濃き處へ眞白に鮮かに染出し或は其模樣に依りて白上りと淡彩とにて施したるが如きものあり其一二をいへば水仙二三本を大きく江戸褄に染出し或は宗達風の松を一二本大きく横たへ若くは寒菊一枝を上より下へ斜に出し又は南天の葉を鼠色に染出し其實を白茶に染め或は白茶色の絲にて繡ひ又は雪除けの寒牡丹を置くなど總て單純なる畵樣のものを用ひ遠見にも判然と望み得近づけば更に鮮かに眩ゆきまでに染出したるを今日の流行とす但し斯かる模樣は獨り小紋のみならず色物にも亦た多く用ひらるゝなり色物の地色は薄栗梅、凩茶、栗梅、栗梅鼠、湊鼠、鐵納戸、錆納戸、鍋島鼠等を適當とす（以上仕立上代價三枚重にて七十五圓位）

帶の地色は着物の色合に準じ自から寂びたる者を好む是れは色の配合上能く適合する故ならんが又一つには從來永らく金色燦爛たるものが流行したるより新陳代謝の常として今度は其反對に出でしなるべし扨て是等派出向には主に厚板織、紬錦、東綴等の光澤の無き模樣のものを用ふるなり（仕立上代價三十圓より五十圓位）さて帶の地質と其締め方も變れば變る世の中なり是れまでは成るべく地質の厚きを用ゐ締め方は胃腑を壓搾する迄なりしに今日は地質の薄きものを尙び柔りと締めるを以て昨今の通人とは稱するよし

◎婦人向縞物　派出向にては縞物を用ひ同じ地質同し柄合のものを三枚襲ねとするが流行なり從來の如く上着丈けを縞物とし下着二枚に別の縞を選むことは廢れたり扨此向きにて目下最も勢力あるは縞御召にて柄合は一寸見たる處田舍染みたる竪縞なり唐棧縞或は手織縞樣のもの殊に嗜好に投せり裾廻しは從來多く縮緬を用ひ來りしが今日は縮緬に比し裾捌き宜しく且つ光澤多き羽二重を用ふることゝなりぬ色合は縹色栗梅、錆葡萄、勝色等にて總て着尺物と同じ濃き色のものを用ふ（仕立上代價五十圓前後）

長襦袢は總體に澁味のある一寸目先の變りたる者流行す例へば焦茶、澁葡萄、澁色友禪縮緬又は段縮緬の如き餘り濃厚くなき彩色のもの或は梅鼠、葡萄鼠の如き寂びたるものを第一とす次に友禪にて一寸絞り又は横に金絲を織出したる段縮緬の類の好みもあり（仕立上代價十七八圓位）

帶は厚板の丸帶　翁織等が第一流行す次は晝夜帶なり是れは金更紗の羽二重に縹或は花色の繻子を取合せ又は焦茶獻上博多等へ唐繻子若くは紬錦を腹合にしたるが當世の生粹といはる（仕立上代價十五圓より二十圓位）



◎男物禮服　男子の禮服は上着黑羽二重にて下着二枚は同地質の白無垢、襦袢長胴着も同地質の白を用ふるが普通なれど之れにては餘りけば〳〵しと思ふ者は上着を黑羽二重にして裏は鼠羽二重を付け下着二枚は是れも同地質の鼠色二枚重とし襦袢長胴着も同じく鼠羽二重を用ふるが普通なるべ

し中には七子を用ふる人もあれど羽二重の方一段と高尙なり羽織は黒の鹽瀬若くば黒羽二重の紋付を用ふるが普通なれど一層贅澤にすれば胴裏は無双にして模樣も背限りに付けず黒染の濃淡の暈しとして夫れへ龍雲或は夜景の山水等を付けたるなど最も高尙なり又無双にせずして白の紋鹽瀬或は繻珍の如き高尙なるものを付ける向きも多し（以上仕立上代價八十圓より百圓位）

◎同上縞物　縞物の上は上着鼠色の御召にて極細き斜縞又は素鼠の微塵小紋の如きものあるべし普通のものなれば上着は東華織、京市樂等下着は同地質にて上着よりは稍細き縞物など好し其中にも東華織は横に練壁絲を入れて織上げたれば何となく工合宜しきものなり裏地は縹色又は勝色の羽二重或は同色の絹が適當ならん（以上仕立代價三枚重にて五十圓より十七圓位）

新刊書目

女子之友	第百二十七號	東洋社
愛國婦人	第十七號	愛國婦人會
をんな	第十一號	大日本女學會
新聲	第八編第五號	新聲社
婦女新聞	第百卅一二號	婦女新聞社
婦人世界	第十八號	浪華婦人會
偕行社	第三百二號	偕行社
小天地	第十三號	金尾文淵社
藥石新報	第四百四十五號	藥石新報社
成功	第二號	成功社
經濟新報	第十六號	經濟新報社
大福帳	第十四號	山田丹心館
女學生新聞	第二號	女學生新聞社
少女界	第九號	金港堂
料理界	第五號	料理界發行所
福井工業新報	第二十三號	福井工業新報社
工談雜誌	第百五十四號	工談社
東京經濟雜誌	第千百五十八號	經濟雜誌社
實業評論	第四十七號	實業評論社
圖書月報	第三號	書籍組合事務所
女藝	第二卷第一號	女藝學會
日本婦人	第三十七號	帝國婦人協會

有る程の伊達しつくして紙子かな

御洋文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

文學士　小林雨[illegible]著

勾當內侍

（四六二切袖珍各十三錢郵税二錢）

名媛を以て名將に配す。是れ千歳の佳會也。而かも忽ち生別となり、忽ち死訣となる。豈復千古の恨事に在らずや。宮禁秋涼夜闌なる時、美姫半簾を捲き、月に對して玉琴を彈ざれば、名將千草の露を踏み、馬を佇めて戀に泣く、何等の風流ぞ。而して一たび天の憐みを受けて、鳳ふの契なるに及んでや、即ち亂離の厄に遭ひて、長く恨を北國の青山に留む。又何事の悲慘ぞ、時人或は傳へ曰ふ嵯峨野の奥、往生院の邊、まだ裏若き尼法師の、右手に花櫁を携へ左手に珠數爪繰りて、口に稱名をふ唱るにあふものありきと、是れ勾當內侍が義貞の後世を吊ふ也。抑も義貞の半面を知らんと欲せば、勾當內侍を知らざるべからず、勾當內侍を知る者義貞を知る所以なれば也古忠臣の魂、名媛の怨籠りて此の小册子の中に在り、涼夜秋燈に對して之を讀む、誰か又一滴の涙なきを得んや。

既刊

近刊

袈裟御前

巴御前

顏世御前

辨內侍

近刊

佛御前

虎御前

白拍子龜菊

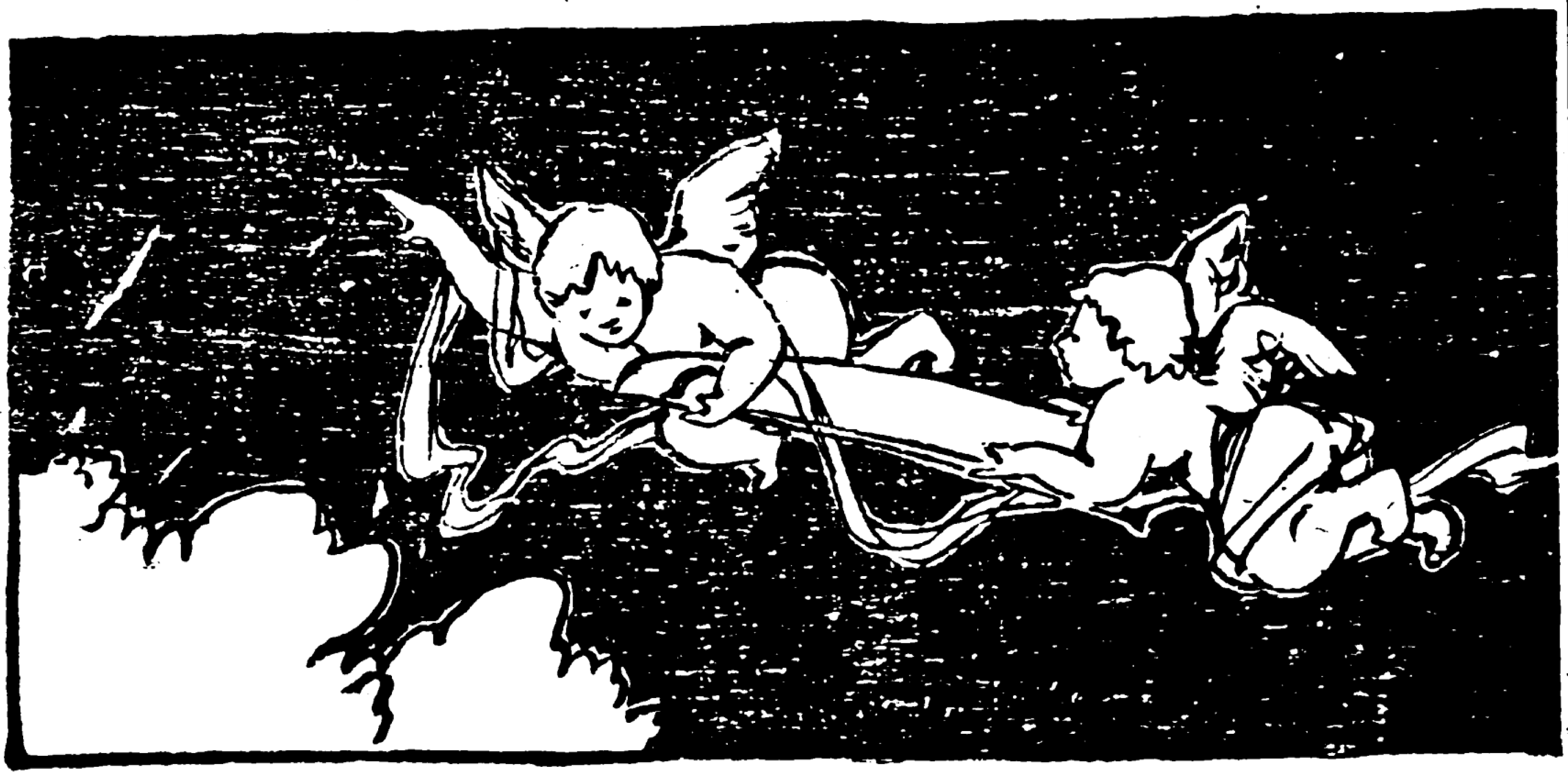
東京築地二丁目

株式會社

國光社發兌

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

堀内新泉子著



一個の美人身は良家に生れ姿麗はしく才かしこく廣く中外の音樂を研究して其蘊奥を極めしが月下氷人の媒妁にて一個の青年と赤繩を結び、音樂の効により陰鬱柔懦なる良人の心機を一轉して勇進敢爲の、丈夫となし、遂に或る一大事業を成功せしむると云ふ趣向斬新の家庭小説にて、春宵孤閨に泣くの新婦、秋夜明月に歌ふの夫妻、一面出産の歡樂、他面洋行の別離、と悲

家庭小説 女樂師

再版

喜忽ち變じ、哀樂俄に移り、讀者をして應接に暇あらざらしむ、而も主要は一家を輯睦して子孫の繁昌を圖るに歸せり、著者が家庭小説に別才あるは、大方諸君の知らせ玉ふ所、一本を座右に置かれなば、特り秋夜の幽寂を慰むるのみならで、家庭教育を裨益すること疑ひなし

壹部定價參拾五錢　郵税六錢

發行所 東京 株式會社國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

登録商標

五二會品評會功勞銅牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIOLET PASTE
錫器附乳白硝子入
壽美禮おしろい

●壽美禮おしろい



●れり製

定價 大壜 二十錢 小壜 十二錢

水製

定價 大壜 二十五錢 中壜 十五錢 小壜 十錢

ヴワイオレット水製



錻栓附乳白硝子壜入

すみれ白粉は　歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成諸體等を以て配劑しあるを以て皮膚を艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり『壽美禮白粉は』常に用て御顏肌等の色を白變せしめきめをこまやかに、にきび、そばかす、あせも等を生せす御肌へを清々しく天然の色白きに至るべし『菫おしろい』は芳香馥郁と長く保つが故宴會祝席雜踏の場所に臨て諸々の惡臭を退け不淨を拂ひ心氣を清爽快活ならしめ衞生上有益無比の逸品なり『壽美禮白粉』は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

●皮膚艶白劑壽美禮あらい粉

●緑、藍、紅彩蝶番ひボックス入三錢
罐詰六錢五厘　袋入 [illegible]錢

●弊舗製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に專ら賞發する香料及弊店新製の原料を用ひて製せし物なれば朝夕此洗粉を御用ひ給へば漸々皮膚の色を白くし美くして艶を出しきめをこまかに常に御肌を清々しくなし總而皮膚の患ひにかゝる事なし

●常に髮洗ひに用ひ給へば毛の拔る病を豫防し毛のくせを直し美くして艶を出し髮のねばりを取り油あかふけ等を生せず又絹綿布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する性あり

●使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は温湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるを良とす

登録商標
西洋色白くなるあらひ劑

SUMIRE.
WASHLNG IOWDER.
壽美禮あらい粉



伊勢吉壽美禮堂謹製

製造本舗　東京東兩國　横網町一丁目

販賣所ハ全國到ル處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場ニ有リ

女鑑
明治卅五年三月十二日第三種郵便物認可
毎月二回五日廿日發行 第貳百六拾六號
明治三十五年十二月五日發行

定價〔一冊金拾錢●十二冊半年前金壹圓拾錢●廿四冊一年分前金貳圓拾錢●全國無遞送料●廣告料五號活字一行金拾錢半頁金八圓一頁十二圓色刷は特に應ず〕
編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 渡邊素一
印刷人 東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木其雄
發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 國光社

（東京築地株式會社國光社印刷部印刷）